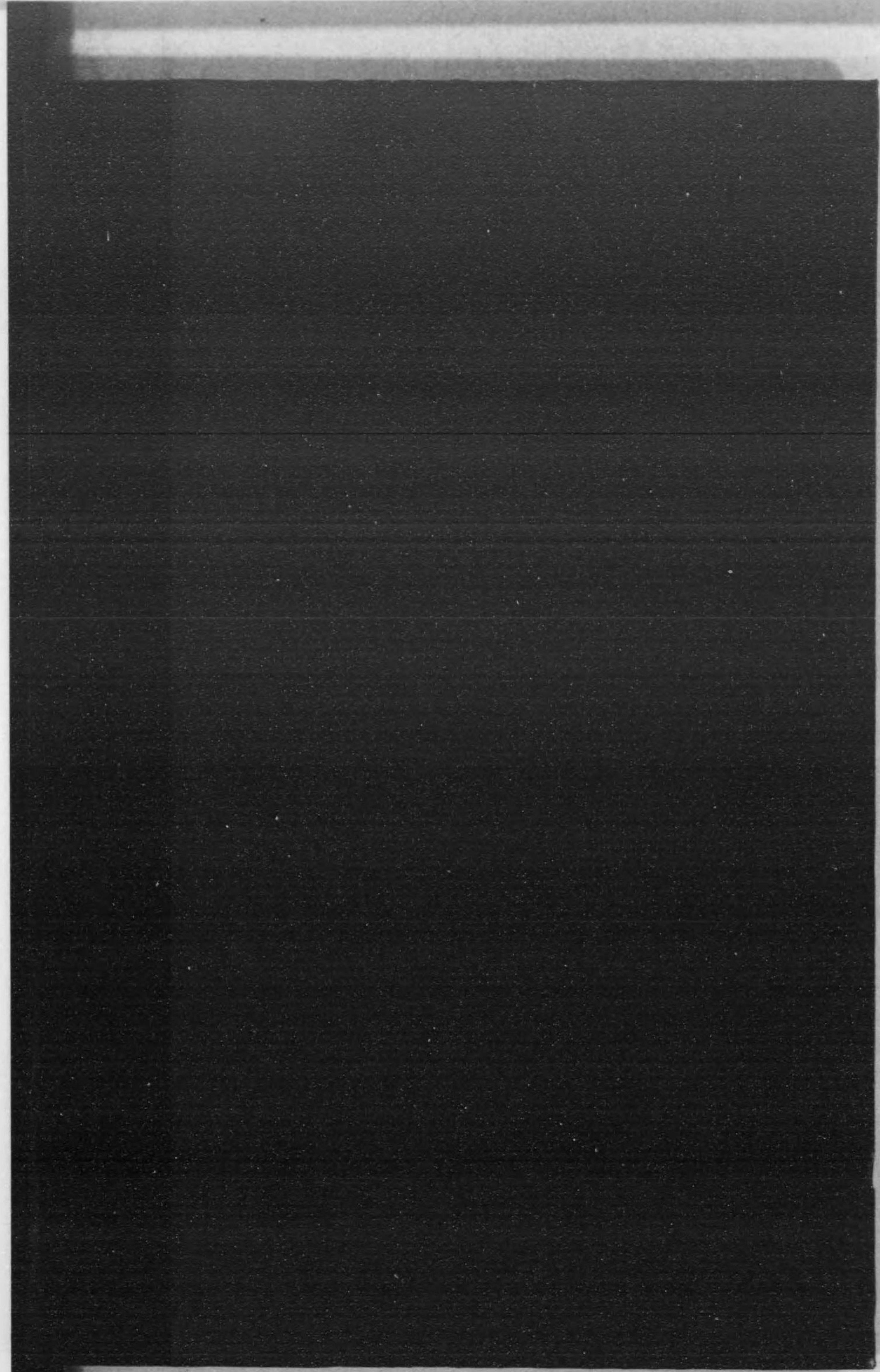


始



474
323-45

2
919



法學士 川原次吉郎 著
國 際 語

エスペラント獨習書

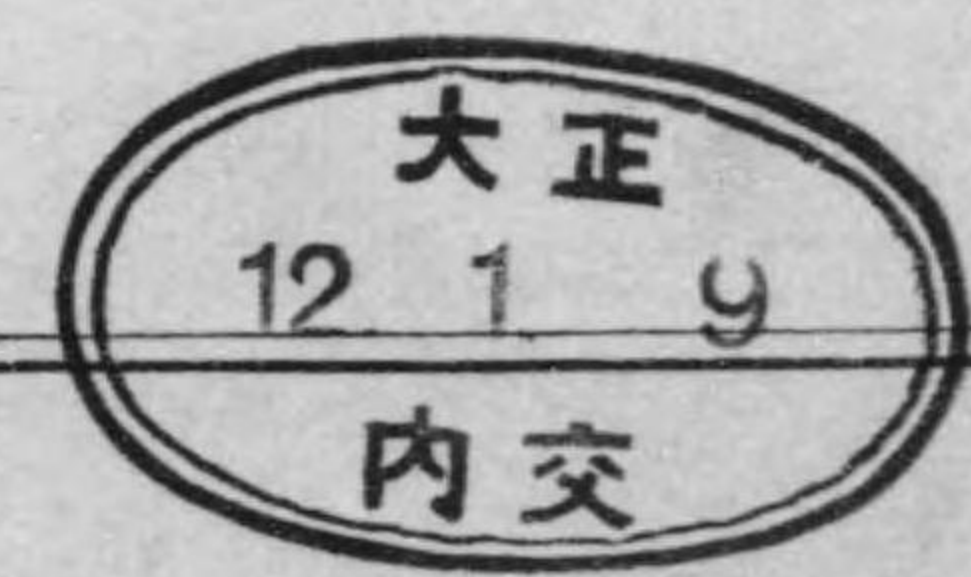
ESPERANTA MEMLERNOLIBRO

DE

J. KAŬAHARA

エスペラント同人社

藏 版



大正

12 1 9

内交

序 文

世界大戦前まで一種の空想視せられて居たエスペラント運動が大戦後國際協調の大勢に伴ひ、愈々實際問題として識者の注意を惹いて來たことは人類文化發達の止より見て極めて悦ぶべき現象である。

然るに其の普及上最も必要なる初學者用獨習書の適切なるものがなかつた爲めに世人多くエスペラントの名を知つて其の實を知らず、其の實を知つて其の語に通ぜず、之が爲めに折角の文明の新利器が少數先覺者の間にのみ使用せられて一般民衆の實用に供せらるゝに至らなかつたことは又吾人の頗る遺憾とする所であつた。

今回斯語の普及發達を圖る爲めに同志の間に「エスペラント」同人社設立の舉あるに當り、初學者用獨習書の必要なることを認め、不肖に其の編著の大任を依頼せられた。不肖は一介の政治學徒、日夜その研究にすら追はれて居る身分であるが我が國內の實情は此の際強ひて辭退するを許さず、乃ち其の重任を引受くることゝなつた。

爾來内外の類書を比較研究し、是れ迄に得たる經驗に徴して、先づ篇を分ちて二とし、前篇はエスペラント概

論とし、平易なる邦文を以て斯語に關する初學者の疑問となるべき一切の豫備知識を述べ、後篇はエスペラント語學教程とし、その字母、發音、文法、造語法、文例等一々章節を分ちて詳述し、他の外國語を知らざる全くの初學者と雖も本書を繙けば一通りエスペラント語を理解し得る様にした。其の他本書編述上に注意せる點を擧ぐれば、

1. 文法規則を簡明に且つ周到に説明すると共に一々適當なる實例を擧げて之を詳説し、初學者をして速かに文法規則に熟達せしめんと期したること。
2. 語學の原理と學習經濟の見地より見て簡より複に易より難に入る様に按排し、初學者をして入り易く達し易からしめんと期したること。

尙ほ不備の點は版を重ねるに従ひ改めたいと思ふ。識者の高教を得ば獨り著者のみの幸甚ではない。

同人社同人豊川善曄氏は其の専門たる教育教授の方面より種々有益なる助言を與へられた、茲に深く其の援助を感謝し併せて内外斯界の諸先輩に敬意を表する。

大正十一年十二月

駒込の寓居にて 著 者 識

内 容 目 次

序 文	
前 篇	エスペラント概論 1
第一章	エスペラントとは何ぞや 3
第二章	國際語の必要 6
第三章	エスペラントの組立 13
第四章	創案者ドクトル、ザメンホフ 25
第五章	エスペラント運動の歴史 33
第六章	世界大戰後の情勢 41
第七章	日本に於ける普及運動 51
第八章	エスペラント學習上の注意 57
第九章	エスペラント研究圖書解題 61
後 篇	エスペラント語學教程 69
第一章	字母及び發音 71
第二章	名 詞 80
第三章	形容詞及び副詞 83
第一節	形容詞 83
第二節	副 詞 84
第四章	動 詞 87
第一節	動詞の時及び法 87
第二節	分詞及び混成時 93

第五章 助辭	101
第一節 冠詞	101
第二節 代名詞	104
第三節 數詞	103
第四節 相關詞	112
第五節 接續詞	124
第六節 副詞的助辭	128
第七節 前置詞	131
第八節 間投詞	134
第六章 造語法	136
第一節 語尾の添附	136
第二節 語根の連結	138
第三節 接頭字並に準接頭字の添附	189
第四節 接尾字の添附	142
第五節 外來語の採用	148
第七章 文例	149
第一節 普通文	149
第二節 日用會話	164
第三節 書簡文	170
第四節 詩	178

—(終り)—

前 篇

國際語エスペラント概論



國際語 에스ペラント 概論

第一章

エスペラントとは何ぞや

エスペラントとは西曆一八八七年（明治二〇年）七月二十六日、ポーランドの眼科醫、人類愛の使徒、言語學の天才ドクトル、ザメンホフによつて發表せられた國際補助語のことであつて、其の文法簡明、發音流暢、表意自在、特に學習容易なる所より先づ世界有識階級の賞讃を博し、今や燎原の火の如き勢を以て社會各階級の間に普及されつゝあるものである。近き將來には國際間の政治、外交、商業、交通は勿論又科學文藝等一切の方面に採用せられて人類文化の上に一大躍進の新機運を造り出さんとする使命を有する眞に奇蹟的の言語である。

而して之をエスペラントといふ譯は最初之を發明せるザメンホフ博士が謙遜なる自己抑制から、之を發表するに當り自己の本名を以てせず、ドクトル、エスペラントといふ匿名を用ゐたることに起因するものであつて、初めは斯語は「エスペラント博士の國際語」と呼ばれてゐたが、後に博士の用ゐた假名を其のまゝ直ちに言語其の

物を指す名稱としたのである。よく此の譯を知らない人はエスペラントといふ國が世界の何處かにあつて、其の國の言葉を吾々が世界語にせんとして運動して居る如く考へるが、それは全く誤りである。エスペラントといふ様な國は何處にもない。随つてエスペラント語は何國の語でもない。全く嚴正中立の國際語である。又其の名前もポーランド、フィンランドといふ様に國の名に附くランドではなく、まさしくエスペラント Esperanto である。何故に之をエスペラントと名付けたかといふにエスペラントといふ語は同語で「エスペーリ（希望）しつゝある者」といふ意味であつて、ドクトル、エスペラントとは「希望博士」といふことである。夫れは著者ザメンホフ博士は後に述べる如く熱烈なる人類愛に富みたる人であつた爲めに「世界の平和」を希望して、自分の假名をエスペラントとしたのである。つまり此のやさしい、美はしい言語によつて各國民間の意思を疏通し、感情を融和し以て世界の平和を來たさうといふのがザメンホフ博士の希望であつたのである。

次に國際語——詳しく云へば國際補助語、或は國際中立語——といふ譯は國際間の交通の方便として各國の國

語を補助する言語といふ意味である。随つて彼の現在の國語を廢止して全世界を一の言語にせんとする「世界語」又は「人類語」といふものとは全然其の思想の系統を異にするものである。一體全世界の言語を統一しやうといふことは一層徹底的で痛快は痛快であるが、遠い將來は知らず、今日の時代に於ては先以て實行困難なる空想だと言はなければならぬ。エスペラントはそんな遠い將來の「空想」を充たさうといふのではない。今日學んで明日は直ちに實用に使はうといふ極めて「現實的」の考である。解りやすく言へばつまり現在英語やフランス語などを用ゐて辛うじて意思を通じて居る外交談判でも、外國貿易でも、學術文藝の著書雜誌でも、直ちに此の便利周到なるエスペラント語を使用してもつと自由に、もつと公平に行はうといふものである。そしてそれは又是からさうやらうといふ提議ではなく、既に現在多くの國際關係は此の語によつて圓滿に進行しつつあるのである。それで吾々は斯んな便利なものがあるからもつと多數の人が之を使つて種々の便宜を圖られたらよからうと言つて諸君にお勧めするものである。其の爲めに吾々は種々の宣傳や、講習を行ひ、又著述や出版をするのである。

第二章

國際語の必要

今日に於て「國際語は必要なりや」といふは恰も「郵便は必要なりや」といふと等しく確かに時代後れの愚問である。苟も相當の常識の發達した現代人はそんな馬鹿げた質問はしないであらう。吾人が茲に「國際語の必要」と題して説くのはそんな問題に答へやうとする爲めではなく、唯讀者諸君が片時も早く發心してエスペラントを學ばる様にとの老婆心から少しく之に關することを叙べんが爲めである。

一體人類は彼のギリシヤの哲學者アリストートルの喝破したるが如く社交的の動物であつて自然に同類相親しまんとする傾向を有するものである。各國民、各民族間に種々の障壁を築いて相排擠せんとするは實は人類の本性ではなく、全く激甚なる國際競争に没頭して不知不識の間に不自然なる似而非愛國心に墮落し、偏狹なる排他主義と、不合理なる權力制度を謳歌し來れる結果であつて、眞の人類文化の爲めには寧ろ悲しむべき邪道であつたのである。

近世に至つて世界の識者は同類相喰むの愚を悟り、皆平等に人類の一員として相協力して文化の各分野を耕し自然界を征服して人類共同の幸福を進めなければならぬといふ思想に一致する様になつて來た。是れ實に近代文化の一大特色たる國際化の傾向である。此の傾向は時代の進むに従ひ、益々増進するものである。

此の風潮に對して大なる障礙を與ふるものの一は確かに各國間或は各民族間に於ける言語の相異である。實に人種間、若しくは國民間の差別と相互の敵愾心を助長する原因をなすものは主として言語の相異である。互に言語の通じない人と人とが出會する場合に、吾々はそれが如何なる思想の持主であるか、地球の如何なる處で彼れ等が生れ、如何なる場所に彼れ等の祖先が數千年前に共同生活をして居たかといふ様なことは少しも分らない。しかし此の人々が何か話し始めるとすぐ彼等は外國人であるといふことを吾々に直覺させる。そしてこの異國人といふ自覺はすぐに反感を惹起さすやうになり易い。然るに茲に若し唯一つの共通語があつて全世界中の人々が皆其の語を用ゐて思ふ所を自由に語り合ふとしたら如何之を以てたとひ人種的國民的の反感を全然一掃すること

は出来ないとしても、大に之を輕減し得るだらうとは誰しも考ふる所であらう。北米合衆國やカナダに於て吾々の同胞が排斥せらるる理由、所謂排日熱の原因が奈邊にあるか。多くの列國會議に於て我が外交使臣が「木偶の坊」だの、「スフィンクス」だのと嘲笑せられ、除け者にさるるは仰も何に原因するか。同じ理屈を言ひ合ふ場合でも他の國語を強ひられて居る憐れな弱者が一言云ふ間に、本國語を其の儘使用する強者は三言も四言も云ふことが出来る。茲に於て勝つべき道理も負けとならざるを得ない。國際語は是非必要である。何國にも偏して特に利益を與へない絶對中立の、又表意自在なる國際語は是非とも必要である。同じ言語を話す者の間には自然に親愛の感情を湧出せしめるものである。しかしその同じ言語も他から強ひられてやる様ではやはりいけない。自ら進んで學ぶことの出来る中立語の必要は絶對である。

過去數世紀の間世界の強國と稱せらるる強國は概ね其の屬邦に對して其の土語を抑壓し、自國語を強制するを以て最良の同化手段と心得、世界の先進國は又後進國に對し其の國語を國際交通語として強制するを以て、自國の優越を圖る最上策だと考へ、そして又それを實行して

來た。しかし文化は進歩する。人類は自覺する。斯かる不合理な強壓策は永く人類の魂を支配することは出来ない。近世に至り、一方に民族主義の勃興すると共に、之に伴ふ郷語尊重の叫びが起り、所謂「舌の叛逆」となつて宗主國の言語を排斥し、他方に又多數の國語の學習から解放されんとする文化經濟の要求から、人類の先覺者達の間には自然に各民族、各國民に平等で政治、宗教、風俗、習慣に對し絶對中立なる一の國際補助語が痛切に要求さるる様になつて來た。其れに就いては吾人は多く語る必要はない。苟も一度嚴肅に此の問題に就いて考へたことのある人ならば、若し吾々が唯一の人類共通の言語を會得したとせばどれ程の大きな實益があるか、又どれだけ愉快なことであるかをよく了解するであらう。今日吾々は外國へ旅行しやうとしても、外國と貿易しやうとしても、又外交談判とか、勞働運動、婦人運動、教育運動などの國際提携をしやうとしても、或はもつと一般的に科學文藝を専門的に研究しやうとしても先づ第一に來る難題は外國語の學習といふ、全く無益の豫備行爲である。夫れが完全に出来ない限り本行爲に取りかかることは出来ない。それも唯一の外國語を學ぶだけで濟めば

未だしものこと、實際に於ては數種の外國語を學ばなければ用を達しないことが多い。英語を知つただけでは露西亞語に通せず佛語は巧みでも獨逸書は讀めない。而して此の外國語の學習といふものが又非常に複雑困難な仕事であつて、或る人は之を戦争及び傳染病と列べて、人類の三大厄と稱した位である。此の如き難物を、而かも數種も學ばねばならぬといふことは何といふ不幸であらう。是れ迄人類は外國語を學ぶ爲めに何程の時間と勞費とを失つたか。而も其れを學んだ處で足一步自國の國境を越ゆればもはや、實際に他の人々とお互に理解し合ふ能力を有しないのが常である。又一の文學作品が他の文字言語に變形せらるる爲めに何程の時間と勞苦と、そして財貨とが失はれたであらう。而も結局に於て何人も翻譯を以てしては單に外國文學の最も無意味な部分丈けしか理解することは出来ない。之を思ふと吾人はゾツとせざるを得ない。多くの人達が五年十年と一所懸命に外國語を學んだ處で、結局大した得る處もないといふことは何といふ残酷な犠牲であらう、人類の三大厄とはよくも言つたものである。

然るに茲にもし一の國際語があつて凡ての翻譯が凡て

の人々に了解さるる様に其の中立語のみによつてなされることとなれば吾々は何れ程の便利を得ることであらう殊に其の言語が現在の自然的國語の様に不規則な文法、不合理な慣用句からつくられた難物でなく、論理上心理上最も妥當につくられた人造語ならば尙更便利な譯である。そして自國語で出來た作品は又直ちに同國人によつて國際語に翻譯せらるることとなり、或は進んで直接國際語原文の作品を創り出す様になれば、凡ての讀み物は凡ての人々に共通となり、夫れに伴つて又教育、理想、信念、努力等も共通する様になり、諸國民が恰も一家族の如く互に接近する様になるであらう。短い生涯を種々の言語の學習に分たなければならぬ現狀に於ては、吾々は其れ等の語の一つに對してすら十分に力を盡すことは出来ない。随つて一方から言へば吾々の或る者は自分の母國語ですら之を完全に話せないことが多い。他方から言へば又其の言語自體を完全に仕上げる事が出来ないそれで吾々は自國語で話し乍ら、屢々外國人の言語や、言葉遣を採用すべく餘儀なくせられ、若しくは吾々を不精密に言ひ表はし、或は言語の不十分さから物事を辻褄の合はぬ様に考へることすらもさせられる。若しも吾々

が單に二個の言語——即ち自國語と國際補助語とを有して居たとせば吾々は其の時には一層よく他の言語以外の事柄を修得し得るだらうし、又是等の言語自體も一層完成せられそして其れ等の各が現在あるよりも一層高く發達し得る譯である。言ふ迄もなく言語は實に文明の主要なる原動力である。言語を有して居る爲めに吾々は禽獸より上に位することが出來た。そして一層其の言語が高ければ高い程一層速に其の國民は進歩する譯である。國際語の採用は此の意味に於て今日行き詰まれる國民文化の前途を展開し、人類文化をして一大躍進を遂げしむる第一の要件であるといふて差支ないのである。或は國際語が盛んになると國語や國民性を破壊しやしないかと杞憂する人もあるが、それは丁度國民間の相互の交通と了解の擴張は家族的愛を失はしめやしないかといふのと同じく全く滑稽な杞憂である。以上によつて讀者諸君は國際語が決して現在の國語や、國民性を破壊せんとするものではなく國際補助語として國際間の交通を圓滑にし人類文化の普及改善を一層速かにして人類の幸福を増すものであるといふことを十分了解せられたことと思ふ。そしてエスペラントは實に斯の如き資格に十分に合格せる國

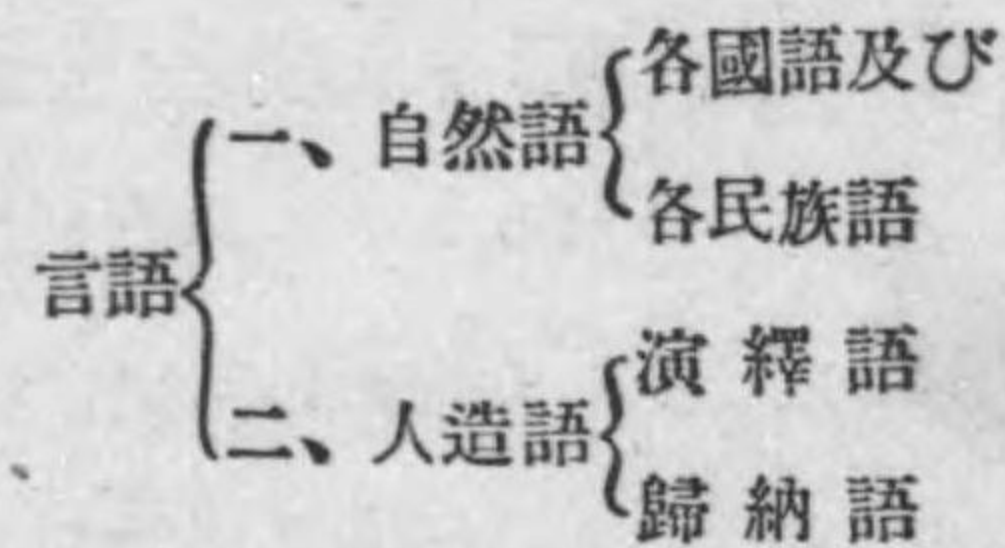
際語である。過去三百年間に國際語或は世界語として百餘種も提案されたが、一としてエスペラントに比肩するに足るものなく、最初様々に誤解されたにも係らず、今や前後四十年の歴史を経て、夫れを蔽ふて居た雲霧は一掃せられ、かの世界的言語學者マクス・ミュラーをして「エスペラントは廿世紀の奇蹟なり」と驚嘆せしむるに至つたのである。今日に於てエスペラントを非難する者は全く之を知らざる者か、或は少しく他の外國語に通ぜるものが自己の先入的偏見、若しくは利害關係から言をなすに過ぎない。吾人は更にエスペラント語の組立を解剖して、如何に此の語が驚嘆に値する言語であるかを説明するであらう。

第 三 章

エスペラントの組立

言語を分つて自然語と人造語の二とする事が出来る。自然語とは現在各國の國語の如く自然に發達し來れる語であつて、人造語とは人が一定の計畫方針によつて造つた言語である。エスペラント語はドクトル、ザメンホフが造つたものであるから無論人造語である。人造語は更

に二つに小別することが出来る。一は人が自分一個の獨斷で任意につくつたものであつて之を演繹的の言語といふことが出来る。二は現存せる自然語を統括整理して一定の新しい形式に組立てたものであつて之を歸納的の言語といふことが出来る。之を圖示すれば次の如くなる。



演繹的の言語は恰も造花の様なもの或る個人が一つ一つ勝手に造つて之をくつ付けたものであるから、之れには何等言語としての生長能力がない。全然死んだ語句の羅列に過ぎない。だから放つて置けば自然に消滅して了ふ。之に反し歸納的の言語は或る多數の自然語を基とし、其の綴字なり、語尾なりを一定の形式に改めたものであるから、同じく人造語とは言ひ乍ら、之れは恰も接木とか、園藝樹とかの様に其の形こそ一定されて居るが其の實はやはり生きた言語である。エスペラント語は實に此の歸納的の生きた言語である。だから放つて置いても死ぬ様なことはなく、次第に生長發展して花を咲き、

實を結ぶのである。吾人はエスペラントは何國の言語でもないと言つたが、之を他の方面から見ると、實は凡ての國の言語であるとも云へるのである。あらゆる言語を比較研究して歸納的に統一し、簡単な文法規則を立てて之を自由自在に活用せんとするものがエスペラント語である。或は曰くエスペラントは人造語だから文學がなく従つて趣味が乏しからうと、しかしそのやうな人に對しては種々述ぶべきこともあるが、要するに論より證據で茲では唯一度學んで見たら解るといふ一言を呈して置く丈けに止める。エスペラントは實に自然語の粹を抜き、精を蒐めたものであつて、之を學ぶこと深ければ深い程、奥益々深く、趣味津々として眞に永久つきざる精神の泉である。この邊のことは到底言辭や文筆の言ひ表はすことの出来ぬものである。其の妙所はただ學んで覺るより外にない。吾人が茲に述べんとする所は唯其の語の梗概である。

之を見る爲めに大體三の方面から觀察しやう。其の第一は文法の方面である。第二は語彙の方面である。そして第三は言語管理の方面である。

第一、エスペラントの文法は世界各國語の文法を比較

研究し、夫れより段々と不必要な部分を除去し、之を最低限度に縮めたものであつて、僅に十六ヶ條の規則から成つて居るのみである。之れはエスペラントを學ぶにも實際に使用する爲めにも必要であるから、次にザメンホフの示せる原文全體を譯出することにする。

エスペラント文法大全

A. アルファベット Alfabeto

Aa, Bb, Cc, Ĉĉ, Dd, Ee, Ff, Gg, Ĝĝ, Hh, Ĥĥ, Ii, Jj, Ĵĵ, Kk, Ll, Mm, Nn, Oo, Pp, Rr, Ss, Ŝŝ, Tt, Uu, Ŭŭ, Vv, Zz,

【注意】 ĉ, ĝ, ĥ, ĵ, ŝ, ŭ, 等の活字のない場合には夫々 ch, gh, hh, jh, sh, u を以て代用することが出来る。

B. 法則 Reguloj.

1. **冠詞**、不定冠詞はなく、定冠詞 la 丈けがある。冠詞は凡ての性、格、數によつて變化しない。

【注意】 冠詞の用法は他の言語に於けると等しい。但し冠詞の用法に馴れない人は當初の間全く之を用ゐなくてもよい。

2. **名詞**、名詞は語尾 o を以て終る。複數をつくるには

更にその後へ j を加へる。格は主格と目的格の二あるのみ。目的格は主格に語尾 n を附加してつくる。其の他の格は前置詞の助けを借りて表はされる（所有格は de, 與格は al, 奪格は per, 其の他意味に随つて別の前置詞を用ゐる）。

3. **形容詞**、形容詞は語尾 a を以て終る。格及び數に関しては名詞に於けると同様である。比較級は pli を以て最上級は plei を以て作られる。比較の場合には接續詞 ol を添へる。

4. **數詞**、基数詞（變化しない）は unu, du, tri, kvar, kvin, ses, sep, ok, naŭ, dek, cent, mil である。十位、百位以上の數を作るには數詞の單純な組合せを以てする。順序數は形容詞の語尾 a を付けてつくる。倍數は obl, 分數は on, 集合數は op といふ夫々接尾字を以つて、又分別數に對しては前置詞 po を以てする。以上の外、數詞は名詞的にも副詞的にも用ゐられる。

5. **人稱代名詞**、人稱代名詞は mi, vi, li ŝi, ĝi（物又は動物に對して用ゐる）si, ni, vi, ili, oni, がある。所有代名詞は形容詞の語尾 a の附加を以て作られる。變化は名詞に於けると同じい。

6. **動詞**、動詞は人稱又は數によつて變化しない。動詞の形は現在時には語尾 as を用ひ、過去時には is, 未來時には os, 假定法は us, 命令法は u, 不定法は i を用ゐる。

分詞（形容詞若くは副詞の意味を有する）では發動形現在が ant, 發動形過去が int, 發動形未來が ont, 受動形現在が at, 受動形過去が it, 受動形未來が ot, である。受動は動詞 esti 及び要求せられたる動詞の受動形分詞の相當形を以てつくられる。受動の場合に於ける前置詞は de である。

7. **副詞**、副詞は語尾 e を以て終る。比較の階級は形容詞に於けると等しい。

8. **前置詞**、凡ての前置詞は主格を要求する。

9. **發音**、各單語は凡て書いてある通りに讀む。

10. **揚音**、揚音は常に最後より二番目の綴にある。

11. **結合語**、結合語は單語の單なる結合を以てつくられる（但し主要なる單語は最後に置く）、文法上の語尾も亦獨立語の如く看做される。

12. **否定語**、他の否定語が使はれてゐる場合には更に ne はいらない。

13. **方向詞**、方向を示す語には目的格の語尾を付ける。

14. **不定の前置詞**、各前置詞は一定不變の意味を有つて居る。然るに若し或る前置詞を用ふべくして而もどの前置詞をとつてよいかその適確な意味が解からない時には前置詞 je を用ゐる。je は定まつた意味を有して居ない。但し je の代りに前置詞をとらずに目的格を用ゐてもよい。

15. **外來語**、比較的多數の國語が同一の語根から採用せる所謂外來語はエスペラントに於ても變形することなしに唯其の綴字法丈けを取つて、其の儘採用せられる。併し一の語源から出て居る種々の語がある場合は基礎となれる語のみを變化を加へずに採用し、此の基礎語から他の語をエスペラント語の規則に随つて作ることを一層良き法なりとする。

16. **母音の省略**、名詞及び冠詞の最後の母音は省略して略符 (') を以て代へてよい場合がある。

エスペラント語の文法は要するに以上述べた十六ヶ條の應用である。詳しいことは後編で説明する。

第二、語彙の方面であるが、ザメンホフは言語の修得を容易ならしむる爲めに記憶に訴へる單語の數を最少限

度に切りつめ、一の單語を知れば幾多の語をこれから造り出し得る様に工夫した。所謂造語法はそれである。それは大體次の四ヶ條の方法によるのである。

1. **語尾の添附**、語根には意義の許す限り各種の語尾を添附して意味の異なる語をつくることが出来る。即ち或る語根に *o* を附すれば名詞となり、*a* を附すれば形容詞となり、*e* を附すれば副詞となり、*as, is, os, us, u, i,* を附すれば動詞の時及び法を表はし、*ant, int, ont, at, it, ot* を附すれば各分詞を表はし、其の他複數には *j* 目的格には *n* を附するが如きものである。(十六ヶ條規則の 2. 3. 6. 7. 等参照)
2. **語根の連結**、二個以上の語根を連結して一語となすことが出来る。發音に不便なるか、意義を區別する必要がある時は、連結する語根の間に適當なる語尾を挿む。(十六ヶ條規則の 11. 参照)
3. **接頭字及び接尾字添附**、語根に接頭字(準接頭字)接尾字を附して種々の語をつくることが出来る。
4. **外來語**、同一語源から出て諸國に普く用ひらるる語は綴字法をエスペラント式に適合せしめてエス語として用ふる事が出来る。(十六ヶ條規則の 15. 参照)

語根を採用するには最大國際性を有する語から採用する。即ち之を選ぶ標準は之を使用する人数によらないで言語の數によりなるべく多くの國語、民族語に共通な語をエスペラント式語尾規則並に綴字法に改めて使用することとした。エスペラントは國際語であるから最大國際性を有する語彙を採用することは理の當然である。例へば支那語の如きは四億の人が使用して居るから、單に使用人数といふ點から云へば之が國際語として採用される譯であるが、國際性といふ點からいふと之を採用して居る國は唯支那一國あるのみだから之を採らない。又麵炮のことを「ブレード」といふ英語民族の人々は一億九千萬で、「パン」といふラテン語民族の人々は一億三千万であるから、人数から言へば前者が多數であるけれども國語數から言へば後者が遙に多數であるから之を「バーノ」とした。其の他之に準ずる。

【註】 前述十六ヶ條規則の第十五條は極めて重要な規則である。即ち其れにより同一の語原から出て諸國に普く用ひらるる語は綴字法のみをエスペラント式に適合せしめて其の儘エスペラント語として用ふる

ことが出来る。例へば「國民」といふ語はフランス語も英語も獨逸語も等しく nation である。そこで 에스ペラント式に綴字を適合せしめて nacio といふ語が出来るのである。同條後段に「併し一の語源から出て居る種々の語がある場合は云々」とあるのは例へば nation といふ一の語源から national (國民の) とか、nationality (國民性) とか種々の語が出て居るが、併し基礎となれる語の nation 丈けを取つて nacio といふ語をつくり、其の他の語は此の nacio から 에스ペラントの規則に隨て造るがよいといふ意味である。即ち「國民の」といふ場合は nacia であつて naciona でもなければ nacionala でもない。其の他「國民性」は nacieco で、「國際の」
といふときは internacia とする類である。

以上の諸規則により記憶すべき單語の数は非常に節減せられ、通常一千語位を語記すれば他の國語の一二萬語以上を語記せるものと同等の効果を有して居るといふ割合である。最初ザメンホフが 에스ペラント語として採用せる語根は九百十七個であつたが、彼れはそれで十分用を達することが出来た。其の後言語委員會に於て二回の

増補を行ひ、今では公認語根は約四千個位になつて居る將來も勿論益々増補さるる見込である。併し後から増補された分は概ね學術語であつて日用語は多く出て來ないから、實際に於ては最初の九百語が最も多く使用されて居るわけである。

斯の如く記憶すべき語数が節減されたので 에스ペラントは非常に有利な性質を有して居る。從來語學は語記の學と稱せられ、そして記憶力の盛な年少者でなければ語學は出來ないものと思はれ勝ちであつたが 에스ペラントに於ては無論年少者が有利には相異なるが、記憶力の減退した老年者と雖も左程困難を感ぜずに修得することが出来るのである。これ推理力が大いに記憶力の不足を補ふからである。昔から六十の手習といふが、エスペラントは決して老人にも苦しくはない。實際六十以上になつてからはじめたといふ人で大成した人は有名な人の中にも可成り多い。これなども 에스ペラントの長所の一に算へられやう。

第三、言語管理の問題についても 에스ペラント語は非常に卓越した長所を有つて居る。ザメンホフは其の最初の著書の中に明言して居る通り、此の語を以て自分一個

の所有物とせず、全世界の共有物として一切の個人的特権を抛棄して了つた。そして自分も單に一個のエスペランティストとして此の仕事にたづさはつて居た。彼れは生涯の間一度でも此の綱領に反いたことはなかつた。後にエスペラントが盛んになつて、よき財源となり得る機会があつても彼は決して之を私しやうとはしなかつた。彼は常に口癖の様に云つた。自分は「造語者」ではない單に言語の「創案者」たるに過ぎない。眞の造語者は凡ての使用者である。そして言語の管理一切を擧げて言語仲間の選べる言語委員に一任した。エドモンド・ブリヅア氏は「一體言語とは何であるか、又夫れは如何にして生長するかといふことを吾々の創作的天才ドクトル、ザメンホフが實際に理解して居たことは彼れの貴い夢想をして驚くべき實現に至らしめた所以である」と云つて彼を賞讃して居るのは尤もである。(「エスペラントの本質とエスペラント文學」94頁参照) 此の點は他の言語創作者が飽く迄自分の言語を自分の所有物として他の者の手を觸るるを禁ぜんとした態度と比すれば雲泥の差異である。

要するにエスペラントは以上の三方面の何れから見ても歸納的言語の凡ての長所を完備して居るのである。

第 四 章

創案者ドクトル、ザメンホフ

エスペラント語の創案者ドクトル、ルドヴィコ・ラザロ・ザメンホフは一八五九年十二月十五日(露曆同月三日)ポーランドの東にあるリトワニヤ州のピエロストツク市で生れ、そして幼年期を此の市で送つた。父はマルコ・ザメンホフと云ひ其の市で私立學校を開き獨佛語の個人教授をなして居た。母のロザリオは慈愛に富める善良な婦人であつてザメンホフの性格の上に感化する所極めて大きかつた。一家はそれで貧しい乍らも極めて平和に暮しが立つて居た。ルドヴィコは幼い時から常に空想的な、物思ひに耽る質であつて、又物に感じやすく、やさしい心を有つて居た。彼は何でも出來のよい異常兒として知られて居た。彼は非常に早熟の天才であつて四歳の時には既に読み書きが出來、學校に入つてからは殆ど首席で通した。又音樂の趣味深く、立派な詩人でもあつた。しかし彼の健康は孱弱で、幼年時代には屢々重い病氣に罹つたりなどした。

一八六九年彼れはピエロストツクの實科中學校に入つ

て學んだ。しかし其の時彼れは未だ法定の學齡滿十歳に達して居なかつたので未だ公には生徒として許されず、翌一八七〇年に至つてやつと第一年生となつたのである。父からは理智を、母からは情愛を、そして環境からは印象を受けた。ザメンホフの天才を形成せるものは此の三要素である。』と彼の傳記作者ブリザア氏は喝破して居るが確に名言である。母の慈愛は彼を感化して人類愛の使徒たらしめ、父の言語學の智識は彼を鍛へて國際語の創案者たらしめた。併し彼の大天才をして燦然光輝を煥發せしめたものは確に其の環境の影響であつたと言はねばならぬ。吾人は彼れ自身の言によつて其の間の消息を知ることが出来る。彼れ曰く、

『予はグロドノ縣のピエロストツク市に生れた。予が生れ且つ幼年時代を過した此の土地は予に將來の目的の方向を與へて呉れた。ピエロストツク市では住民が露西亞人、ポーランド人、獨逸人及びヘブリュー人の四種の異人種に分れて居る。此の異人種は各々其の異つた言語を有して、其の間に何等の友誼的關係もない。此の市に於ては他の何れに於けるよりも市民は言語の異なるが爲めに非常なる不幸を感じて居る。そして市民が各派に分

離して各々敵視してゐるのも其の言語の異なる事が唯一の或は少くとも主なる原因である。予は思想家として教育せられた。總ての人類は同胞兄弟であると教へ込まれた。然るに予は到る處に於て人類は決して同胞でない、只露西亞人、ポーランド人、獨逸人、ヘブリュー人であることを感じた。人は笑ふかも知れないが、予は子供心にも痛く此の『世界の憂』を悩みとして居たのである。そして予は大人は萬能の力を有つて居るものと思つて居たから、予が大人になつたら必ず此の害を排除しやうと決心をして居た』云々。

と、實に愛は一切文化の根源である。此の同胞憎惡の惡氣流の中にあつて若いルドヴィコの高貴なる感情は一種の慈悲心を以て充たされて居た。恰も彼の悉達太子が四門の哀苦を見て衆生の難を救はんと決心せる如くルドヴィコ・ザメンホフの痛ましき心の中には永世不拔の一念が生じた。その一念たるや彼れが終生決して忘れしことのなきものであつた。即ち『何人の國民的感情をも傷けない一の中立語があつたら種々異なる民族の間にも相互の意思を疏通し、感情を融和して敵視の關係を改善し得るであらう。』といふ一念がたれであつた。そして直ちに

其の思想の實現の爲めに働いた。彼れはそのやうな問題について曾つて他に誰れか働いたものがあつたかどうか全く知らなかつた。しかし彼は無意識に、歴史家達が後に國際語發達史の中に定義したと同じ徑路を辿りつたのであつたのである。ザメンホフの最初の試みは純然たる演繹的のものであつた。彼れは最も簡單にして容易に發音される綴字 ba, ca, da, ……eb, ec, ed, ……aba, aca, ada, ……などと書いて之に任意の意味を附した。併し彼れは間もなく其の様な任意の言語は之を造る方からは容易でも之を學ぶ方からはあまりに困難であり、又凡ての人に對してあまりに縁遠いものであつて、結局それでは民衆を引付け得ないといふことを了解した。そして國際語は兎も角そんな獨斷的のものであつてはならぬといふことも解つてきた。

此の時にあたつて(1873年十二月)ザメンホフの一家は久しく住み慣れたピエロストックからワルソーに移住することとなつた。其處で彼の父は私立學校の監督官の職を奉じ、少し後には其の地の國立中學校の獨佛語教授となつた。ルドヴィコも1874年八月にはワルソー高等中學校の第二年に編入された。第四年になつた頃、彼れ

は熱心なラテン語主義者になつた。ラテン語の形式の整然たると、内容の豊富さとは彼れを全く誘惑し去つたからである。彼は信じた。彼れの泡いて居る問題はこれで最もよく解決さるゝだらうと。併し彼は又間もなく、學習者として不可避的な試験の困難から斯ういふことが解つた。即ち「文法と文體の豊富さだけでは言語が容易であるといふ事にはならぬ。却つて遺憾乍ら反對である。その様な性質は世界に通用せられんとする言語に於ては到底忍ぶことの出来ない、寧ろ避くべきものである。」といふことである。

其の後彼は偶々英語を學んだ。そして其の文法の比較的單純さは頗る彼れの氣に入つた。彼れは之れをモデルとして新しい計畫をはじめた。そして終に、現代歐羅巴語は多くの眞に國際的な共通要素の豊富な單語を有して居る、其の材料を國際語の素材として用ゐないのは誤であるといふことに氣がついて、彼は

「新しい國際語は最大國際性を有する既知の言語的要素を材料として作られねばならぬ。」

といふ結論に達した。之を換言すれば將來の國際語は演繹的人造語でなくて歸納的人造語であるといふ事である

一八七八年（明治十一年）丁度彼が十九歳の時にザメンホフの最初の人造計畫は完成した。最初彼れは夫れに「世界語 Lingwe Universala」といふ名をつけた。そして自分の學友の間に之を宣傳しはじめた。同年十二月五日ワルソー高等中學校生徒仲間の會で熱心に人類同胞の團結の象徴たる新しい言語の出現は芽出たいと言つて祝福された。

諸の國民間の反目は

崩れよ、崩れよ、既に時は來た、

全人類が一の家族にまで

團結すべき時は來た。

といふ歌は其の時に同語で歌はれた初めの一節である。其の語はラテン語的要素の上に基いたものであつて既に最初のエスペラントの原型であつた。しかし無理解な世間は嘲笑した。家族の者や知己や或友人等は彼の父に忠告して彼の息子がかかる途徹もない問題に没頭するのは發狂の前兆だから是非止める様にと云つて來た。それ等のことからザメンホフは當分——大學を了へる迄——此の問題を放棄しやうと彼れの兩親に約束しなければならなかつた。

一八七九年七月ザメンホフはワルソーの高等中等を卒業して八月にはモスコウ大學に入學し醫學を修めることとなつた。しかし學資が續かない爲め二年の後再びワルソーに歸つて、其處の大學に轉じ兩親の下で勉強をつづけた。一八八五年彼れは愈々ワルソー大學を卒業しドクトルの學位を授けられた。

大學を卒業すると彼は又國際語問題に歸つて來た。彼は是れより先兩親に對する當分此の問題を放棄しやうといふ約束を守つて、兎に角大學に於ける五年半の間は之について一言も話すことはなかつた。しかし自分の一生の使命であり、全人類の幸不幸の分岐に關する重大問題がどうして放つて置かれやう、其の間にも彼れは内々密かに多くの實驗と可成り多數の語からの翻譯などを試みて、彌が上にも此の語を完全にしやうと努力して居た。彼れ曰く、

「其の時位予に取つて辛いことはなかつた。第一隠して居るといふことが非常に苦痛で、其の爲めには殆ど何處にも顔出しすることも出來ず、何事にも携はる譯に行かず、人生中最も美しい學生時代をば最も不愉快に経過したのである。予は幾度もつひうつかり會などに入つて

も丸で外国人同様の感じをしては退會し、唯此の語で自ら詩歌を作り僅に煩悶を遣つたのであつた。後日予の初めて出版した小冊子に入れた Mia penso [我が思ひ] は實にその中の一である。併し如何なる境遇で此の詩が出来たといふことを知らない讀者には多分不思議で又分らぬものと思はれたであらう。云々。

かくして六年の間浮身をやつして吟味した結果、其言語が愈々凡てに對し十分合格し、且つ實用にも適當なることを發見し、大學を卒業すると同業に自身の考を發表しやうと決心したのである。彼は其の最初の本に「ドクトル、エスペラント著、國際語、序文並に大成教科書」と題し、其の出版者を求めたが、二ケ年間奔走したけれ共何人も之を空想として相手にして呉れるものはなかつた。やつと一人發見したかと思ふと、其の人は半年も準備せしめた後、終に拒絶した。其の間に生活問題、職業問題等の爲めに一通りならぬ困難に出會し、さすがのザメンホフも之に失望し、落膽して居たが、天は善人を見棄てない！ 彼は圖らずも後のザメンホフ夫人、當時の約婚者クララ・ジルベルニク嬢の熱心なる同情と援助を受けて終に之を自費出版することとなり、即ち最初述べ

た様に一八八七年七月二十六日、彼の最初の著書國際語ウエスパーント「第一卷」はかくして發表されたのである。

第五章

エスペラント運動の歴史

ドクトル、ザメンホフによつて創案せられたる國際語は前章に述べた國際語第一卷 Unua Libro が出版されると共に愈々實行運動の第一期に入つた。其の本は露語で書かれたもので紙數僅に四十頁、四六判假綴の極粗末な小冊子であつた。従つて定價も十五コベツクで丁度我が十五錢に當るのである。其の内容は先づ卷頭に廿八頁より成る序文があり、(當時行はれて居た世界語ゾオラビユツクの滅亡を豫言し國際語の必要と自分の言語の優秀なることを述べたものである)次に六課より成る本文があり、其の次に斯語に對する賛否を著者に知らず爲めの小カード八枚、其の次が大成教科書で、それには二十八個の字母と十六ヶ條の文法規則(本書第三章参照)があり外に大附録として別紙に九百十七個の語根より成る國際語露譯辭典が附いて居る。

此の冊子の第二頁には「各國民の共有財産としての國

際語、著者は永久に之に對する個人的權利を拋棄する」と書いてあり、終から二頁目には「此の冊子を凡ての他の語に翻譯するの權利は凡ての人に屬する」と書いてあつた。そして奥附には「ワルソー市ドクトル、ザメンホフ氣付ドクトル、エスペラント」としてあつた。

(註) 此の書が出版されて間もなくポーランド語、フランス語、ドイツ語で書かれた同じ内容の本が出版され、一二年後れて英語で書かれた本も出た。

ザメンホフは此の「第一卷」が出来ると之を單に書肆の店頭に出して賣出すのみならず、又世界中の主なる新聞雑誌、學者、評論家等に贈呈して其の批評を求めた。殊に其の小カードを入れた事は極めてよい思付きであつたので、暫くするとボツボツ返事は到達した。其れ等の返事の中には随分下らない、人を冷罵した様なものや、不眞面な駄評をしたものもあつたが、多くは大に博士に賞讃と慰安を與へ、熱烈なる賛同と無條件で彼の語を學ぼうといふ約束を齎したものであつた。中には早手廻しで其の國際語で書いた手紙さへ交つて居た。

新しい民族は勃興した。博士の周圍は新しい空氣を以つて包まれた。多數ではないが而も熱烈なる同志は露西

亞、ドイツ、瑞典等から來て學んだ。其の仲間達は其の言語に對して、曾つて謙抑なる博士の匿名だつた「エスペラント」といふ美しい名前を與へた。彼等は平和の象徴たる「緑の色」と、希望の象徴たる「星」とを結合して吾々の今日の胸間に飾つて此の語の徽章とする所の「緑の星 Verda Stelo」をつくつた。又其の頃吾々の共通の聖歌たる「希望の歌 Espero」が唱はるる様になつた。
(エスペラントの本質とエスペラント文學102-3頁参照)

ザメンホフは普及團體を組織して宣傳しやうと考へた併し當時露國では斯種の運動に對しては非常に神經過敏であつた。殊に屢々叛亂を起した後のポーランドでは到底斯様な團體運動は許されなかつた。そこでエスペラント初期の運動は發生地の露西亞でなくて隣國の獨逸であつた。同じく國際語を發明せんとして居た獨逸ボーゼン生れのアントニー・グラボウスキーは率先してエスペラントイスト(エスペラント語使用者)となり、有名なブーシキンの小説「吹雪」を翻譯してザ博士の下に贈つて來た。しかし最初の最も有力なるエスペラント運動者としては吾人は先づ指をババリヤのニユールンベルヒの雜誌記者老大家レオボルド・アインシュタインに屈せなけ

ればならぬ。

是れより先一八八〇年に獨逸コンスタンツの僧正シユライエルといふ人が「ヴオラピユツク」(世界語といふ意味)と稱する言語をつくり、熱心に宣傳した處、丁度國際語を要求せる時代の思潮に合したので大に歡迎せられ獨佛等の諸國に弘まり、創案發表以來僅に四年後の一八八四年には獨逸のフリードリヒハーフェンでヴオラピユツクの第一回萬國人會が開かれた位であつた。それで一八八五年にはニュールンベルヒにも、其の宣傳機關として「國際語協會」なるものが起つた。丁度一八八七年エスペラントが初めて世に現はれた頃はヴオラピユツク萬能の時代で將來の國際語はヴオラピユツクであると信ぜられて居た。然るにニュールンベルヒの雜誌記者で熱心なヴオラピユキストの一人だつたレオボルド・アインシユタインといふ人があつた。もう六十以上の老體であつたがザ博士の小冊子を読んで感激し、「國際語問題は是れで解決せられた」と言つて驕然エスペランティストに改宗し、熱烈なる宣傳をはじめた。それで最初はヴオラピユキスト仲間からは異端者として散々罵られたが結局仲間を説服し、遂にニュールンベルヒの國際語協會は其の

會長クリスチヤン・シユミツドの提議によつて全員エスペランティストとなり。茲に於て創めてエスペラント語の雜誌を發行し、ザメンホフ博士を其の名譽主筆に推戴して、先づ同志連絡の機關が出来たので是れよりエスペラントは稍々光明を見るに至つた。

(註) ヴオラピユキストは其の後一八八七年ミュンヘンで第二回大會を、一八八九年には巴里で第三回大會を開いた。其の時はヴオラピユツク極盛時代で、既に二百八十三の普及團體と、二十五國語で書かれた教科書、二十五種の定期刊行物を有し、同語使用者百萬と號せられた居た。然るに同語には言語として種々の缺點(演繹的人造語であることが其の最も主なるものである)があつたのみならず其の管理の方法も不當であつた爲めに、第三回大會の際内部に改造論起り、四分五裂して全く崩壊して了つた。之が爲めに世人をして人造語は結局不可なりといふ偏見を抱かしめ、之れとは大に趣を異にするエスペラント語迄を其の宣傳上非常なる不利に陥らしめたのである。

かくして一八八九年から一八九五年頃迄はエスペラン

ト運動はニユールンベルヒが中心となつて居たので此の時代のことを「ニユールンベルヒ中心時代」と云ふことが出来るのである。然るに其の後機關雜誌にトルストイの「信仰と智慧」といふ論文の翻譯を載せたことから露國官憲ににらまれ、露國へ輸入することを禁ぜられた。當時同志の讀者は多く露人だつたので大打撃を受けた。

然るに其の時フランスに一人の宣傳の天才が現はれた爲めにエスペラントは一大飛躍の機運を來した。依つて其の時代（一八九六年乃至一九〇四年）を「フランス中心時代」といふのである。

其の大宣傳家とはルイ・ドウ・ポーロン侯のことである。此の人も國際語をつくらんとして「アジュヴァント」といふ語を創案し、公證人の所に登録までして是れより大に其の宣傳をしようと思ふ矢先にやはりザ博士の小冊子を受取つて、大體は似て居るが、しかしザ博士のものが遙に完全であるといふことを發見して、斷然自分の計畫を拋棄して熱心なエスペランティストとなり、其才學及び社會上の地位を利用して、盛に著述をなし、又同志を勧誘して、フランスをして殆んどエスペラント化し去らんとする勢があつた。有名な巴里の書肆ハツチエ

ット商會がエスペラント書發行の機關となつたのも此の時代であり、又ザメンホフが「Unuel」なる匿名を以つて「國際語思想の本質及び將來」といふ論文を佛の科學促進協會の大會に寄せたのも此の時代であつた。

【註】此のザ博士の論文は大會でポーロン氏によりて發表され、エスペラントの本質を詳論せる原據文書として非常の高評を博したものである。川原、豊川共譯「エスペラントの本質とエスペラント文學」の前編はそれである。

フランスにエスペラントが盛になつたので隣國の英獨露スキス等も盛になり、茲に於て一九〇五年（即ち明治三十八年）八月五日フランスの南部海岸の小都ブーローニュ・スール・メールではじめて萬國エスペラント大會が開かれた。其の町のエスペラント協會々長アルフレッド・ミシヤウ博士及び、彼のポーロン侯等が先に立つて斡旋したのでドクトル、ザメンホフを始め三十餘國から約八百名の參加者があつた。

是れ迄エスペラント語を本の上で讀み、雜誌にかき、夫れで文通をしたことはあつたけれども一堂に會して衆目環視の前で萬國の人が話すといふことは今度が最初な

ので参加者は一面好奇心にかられ乍ら、他方多少の不安なきを得なかつた。

しかし凡ての憂慮、凡ての疑問は大會の最初の瞬間から全く消え失せて了つた。謙抑と自信に富めるザ博士の演説の數語が発せらるるや、滿堂の聴衆は最う熱狂して拍手喝采し、熱烈なる歡呼の聲はブローニユ市の城壁を揺り動かした。エスペラントは實に此の瞬間で成立したと云はれて居る。其の光榮ある國際的祝日に於てザ博士は正しく斯う言つて其の演説を終つた。

「人間の歴史あつて以來初めて、吾々非常に相異なる民族に屬する各員は、異國人としてではなく、兄弟として肩を列べて立つことが出來た。如何となれば今日はフランス人が英國人と會して居るのでもなければ、ロシヤ人がポーランド人と會して居るのでもなく、しかし人間が人間と會して居るのである！ 今日の日に祝福あれ、其の結果をして偉大ならしめよ、光榮あらしめよ！」

と。彼れが其の貴き思想に對する全生活の爲めに致せる長い年月の勞苦に對して、若い時の犠牲に對して、其の幾分かは茲で報ひられたと云へやう。

此の大會の間に起つたことでエスペラントの歴史上是

非とも書かなければならぬことは所謂ブローニユ宣言に關することである。

抑もザメンホフ博士が國際語を造くるに至つた動機は吾人が既に詳説せる如く其の熱烈なる人類愛の精神から發したのであつた。博士は之をエスペラントの内部精神エスペラント主義、或は人類主義などと稱して、此の言語を以て其の内部精神の普及に努めんとした。しかし此の如き思想問題と言語問題とを一體とすることは言語の宣傳上不都合ではないかといふ懸念があつた。否中には言語丈けならばエスペラント語を可とするも、其の内部精神に對しては寧ろ反對の態度を取るものが少くなかつた。殊にフランス其の他の軍人、政治家などの中にはかかる考を懐く人が多かつた。そこで強ひてザ博士の純なる思想を其の儘行はんとする時は言語の普及上不便があるので大會出席者は大會を終るに當り一の宣言書（原文は Dokumentoj de Esperanto にある）を發した。所謂「ブローニユ宣言」といふものがそれである。即ち其の要旨は

1. エスペラント語と其の内部精神たるエスペラント主義とを分離し其の間に何等必然的の關係なきものと

すること。

2. 國際語に関する理論はもう盡きたるを以て今後徒に議論に日を送ることを止め専らエスペラント語の實行につとむること。
3. エスペラント語は何人の所有にもあらず、之を使用することも、之れで著作することも各人の自由たること。
4. 「十六ヶ條の文法」及び其の「練習文集」並に「國際語辭典」を萬代不易の基礎と定め之を改變せざること。又なるべく創案者ザメンホフ博士の文を模範とすること。
5. エスペランティストはなるべく其の團體に参加することを勧める。しかし強制はしないこと。

是れは實にエスペラントの憲法とも言ふべきものである。此の會に於て又言語を管理する爲めに言語委員を設け、大會組織委員及び中央事務局をも設立した。それから例によつて年々大會が行はるることとなつた。

第二回はスキスのゼネヴァ、第三回は英國の劍橋、第四回はドイツのドレスデン、第五回は西班牙のバルセロナ、第六回は米のワシントン、第七回ベルギーのアン

トワープ、第八回は奥匈國のクラカウ、で開かれた。そして第九回は最初伊太利のゼノアで開かるる豫定であつたが都合によつてスキスのベルンで開かれた。

これ迄は大した異變なく極く順調に進んだ。ザ博士は毎回出席して開會の演説をなす例になつて居た。それから新舊僧侶の祈禱とか、演劇とかがエスペラント語で演ぜらるる恒例になつて居た。唯茲に一つ一大波瀾を惹起したものは所謂イード語といふものを以てエスペラントを改造せんとする一派の陰謀である。此の運動は外部からエスペラントに對抗して起つて來たものではなく全くエスペランティストの内部から起つたものであつた爲めに比較的大きな騒ぎを起したものである。即ち此の運動の張本人は實に會つてエスペラントの教主として、又ザメンホフ博士の片腕として信頼されて居たルイ・ドウ・ボーフロン侯其の人であつたのである。

是れより先き一九〇〇年に巴里に萬國大博覽會のあつた頃有力な人々の間に「國際補助語採用期成會」といふものが設立された。しかし、是れ迄何もしなかつたこの會が一九〇六年に至つて突然活動し出し翌年劍橋大會が終ると間もなく代表委員を選擧して實際に國際補助語の調

查をはじめた。其の時ザメンホフ博士は自分の代理としてエスペラント辯護のことを一切其の信頼せるポーフロン侯に一任した。然るに此の國際補助語採用期成會の突然の運動其のものが全くポーフロンの差金によつたものであつたのであるから、先づ原則としてはエスペラントを採用するもイード語と稱する新國際語（實はポーフロンの作）により大改造を加へなければならぬと決議し、ザメンホフの代理者たるポーフロンも其の代表委員の決議に賛成して了つた。茲に於てエスペランティストの間には一大動搖が起り、其の時のエスペラント言語委員長エミール・ボアラツク博士は早速言語委員會を招集して改造案に対する賛否を問ふた所、極少數を除いて大多數は反對を表明し、殊にザメンホフは熱烈なる回章を發して全世界の凡てのエスペランティストに直接訴へ所謂彼の採用委員會なるものの誤謬越權不法不條理なるを痛論し、萬國のエスペランティストは益々一致して勇猛直進、前途の大理想に向ふべきを力説したので人心漸く安定し、是れよりポーフロン一派は分れてイード運動を起すこととなつたが、イード語其のものは單に理論に走るのみで必ずしもエスペラントに勝れるものにあらず、文

法規則の如き却つて複雑になれるものある等要するに單なる物好にあらざる限り之に賛成するものなき爲め、運動資金の盡きると共に其の聲も靜まつてしまつた。しかし此の騒ぎがあつた爲めに却つてエスペラントの基礎鞏固なることが益々證明せられ、使用者は年々非常の勢を以つて増して行つた。

斯くて第十回大會は一九一四年八月二日からフランスの巴里で開かるることになり、既に参加申込者が五千人もあつた程前景氣が好かつた。然るに丁度開會の前日たる八月一日に世界大戰が勃發して大會は中止になつた。其の後大戰中第十一回大會を米國桑港で開いたけれども集る者少く何も決議することが出来なかつた。此の間エスペラントは非運のドン底に陥り、萬國エスペラント協會（普通に U. E. A. と稱す）の會員など一時八千八百人を突破せしものが僅に一千九百人に激減する程であつた。

是れより先きザメンホフ博士は巴里大會に出席する爲めに獨佛國境までやつて來ると、忽ち交通遮斷に逢ひ、間もなく戰爭勃發したので、止むを得ず和蘭を経てワルソーに歸り、それよりは毎日戰爭の慘禍を聞くにつけて

「世界の愛」を感じることを益々深く、之が爲め遂に病を得て一九一七年四月十四日、其の貴き一生を終られた。時に年五十八歳である。

第六章

世界大戦後の情勢

ザメンホフは自分の言語に就きては餘程の自信を有つて居られたので、其の最初の小冊子が出来た時したとひ自分は其の時に死んで了つたとしても、其の言語は自分の援助を借ることなしに、言語其れ身體の固有の基礎から進化發展し得るであらうと断言した位であつた。

果して其の豫言の如くザメンホフは死んでも其の言語は死ななかつた。世界大戦が終ると世界の思想界は一變した。これ迄軍國主義に熱中してお互に似而非愛國主義に墜落し、偏へに武力により他國を掠めんとして居た人類は其の短見の夢から覺め、將來の文化は國際協調の上に立たなければならぬといふことをつくづく感ずる様になつた。一國で何程善いことをしやうとしても隣國が之と異なる政策を採れば如何ともすることは出来ない。各國が單獨に自己の欲することを行はんとせば結局軍國主義

に墜落せざるを得ない。茲に於て國際協調の思想は痛切に其の必要を感じられて來た。これ迄も國際法とか、平和會議とかいふものがあつて國際協調の精神はないことはなかつた。しかし從來の協調は各國の自由活動を原則として其の範圍内で人道的施設を加味するに過ぎなかつた。大戦後の國際協調は之に一步を進めたもので、即ち全世界の平和といふことを第一位に置き、各國を強制して之に従はしめんとするものである。國際聯盟と國際労働會議とは先づ巴里の講和會議に於て定められた。又労働者は此の公の國際労働會議に與せず以前より別に直接國際労働者の團結たる所謂「インターナショナル」を組織し、教育者は國際教育會議を組織し、科學者は國際科學協會をつくる等所謂文化の國際化的傾向は次第に濃厚になつて來た。此の如き風潮に於て國際的の會議や、國際交通は盛に行はるゝに至つたが、偕て其の會の公用語を如何にするかといふことである。從來小弱國は或る強國の言語を學んで汲々として其の強國の鼻息を伺つて及ばざらんことを恐れた。しかし今日目覺めたる民衆が英佛等の強國語を學んで彼等の顔色を伺つて事をなすといふことは全く馬鹿らしきことである。第一其の國語を採

用された國は非常に有利な地位に立ち何等準備なしに世界に臨むことが出来る。そして其の餘裕の時間勞力を他の大切な方面に利用し得るに反し、他の國民は學校教育の大部分の時間を割いて、先づ選ばれたる國語を學習しなくては世界に活動することは出来ない。既に出發點に於て大なるハンディキャップを附せられて居るから結局世界を擧げて、選ばれたる國語の民の前に屈伏しなければならぬ。それも政府筋の代表者とか資本家側の代表とか、兎に角相當の教育を受けることの出来る人々なら大した不便もなからうが、一般民衆の十年二十年と外國語を學ぶ資力と時間の餘裕なき者にとつては到底不可能のことである。今日デモクラチックの時代に英佛語を國際公用語とするは全く時代錯誤の骨頂なりと言はなければならぬ。

そこで西班牙は先づ西班牙語をも國際聯盟用語として採用すべしと第一回國際聯盟總會の際提議し、伊太利代表も亦伊太利語に對して同様な提議を試むる旨宣言したので、英佛より種々懇談して西班牙、伊太利の提案を撤回せしめた。しかし言語問題は未だ根本的に解決せられたのではない。それで識者の輿論は 에스ペラントを國

際公用語にすることに傾いて來た。萬國 에스ペラント 大會は大戰によつて一時中絶して居たのであるが一九二〇年第十二回大會を和蘭の海牙に開き、次に其の頽勢を恢復し、一九二一年はチエツコスロヴァキヤ國の都ブラーグに第十三回大會を開き、一九二二年は新興國フィンランドの都ヘルシングフォールスに第十四回大會を開いた。かくして 에스ペラント 運動は強大なる時代思潮の後援を受けて發展し、今や其の普及團體の數三千、使用者七百萬と稱せられ、同語で發行せられた翻譯及び原作の主なるもの五千種、定期刊行物の數は百餘種に上つて居る。其の中には普及雜誌の外に政治、文藝、科學、商業、労働者等の専門雜誌もあり、盲人用の點字雜誌すら發行されて居る。

ロンドン商業會議所は此の語を以て將來國際貿易を行はんことを計畫し、管下の商業學校の課目に入れた。巴里商業會議所も一九二一年に各商業學校で 에스ペラント を教授すること、世界一般に此の語を以て商業取引を容易ならしむること等の決議を行ひ各地の會議所へ勸告狀を出した。戦後各地に行はれた見本市、博覽會等は此の語で書いたポスターやカタログ等を使用し、豫想外の

効果を挙げつゝある。此語で立派に貿易をなすつゝある商店は日本にも數個ある。(横浜市山下町日本エスペラント貿易商會。東京丸の内ビルディング内上野商事株式會社。東京芝罘濱松町旭光社等其の主なるものである。)

一九二一年フランス科學學士院會員たる世界的の碩學二十三名はエスペラントの採用が科學及び其の應用の進歩上無限重大なることを認めて各學校の教科目に入れ、且國際會議の公用語にすべきことを勧むる宣言を發した又同年萬國赤十字大會も各國其の普及に盡力すべきことを決議し、國際聯盟第二回總會では日本外十一ヶ國の代表が全世界人民間の直接了解を容易ならしむる爲めエスペラントを公立學校の課目に入るべしと決議した。又エスペラントは學習容易なる爲め平民のラテン語と稱せられ、目下目覺めつゝある勞働者階及の間に研究されて居る。國際勞動會議は之を將來公用語にすべき決議を行ひ、ブラーグの萬國エスペラント大會には約二百名の筋肉勞働者が各國勞動代表として出席し、現に國際勞動事務局は同語で文書を受付け、又書いて居る。旅行用としてエスペラントの最も卓越せることは現に日本から歐洲各地に行つて居る吾々の同志が十分實証して居る。今迄是一步外國の地に入れば自由に話しが出来ぬものと諦めた人

々もエスペラントを知つて居るおかげで少しの不便もなく知識の交換も商業も出来る様になつた。エスペラントイストの間には互に「同志」と呼び、「兄弟」と呼んで其の親しきは到底英佛語の大家等の夢想だもし得ざる所である。

第七章

日本に於ける普及運動

世界的交通の發達は到底一國の文化的孤立を許さないエスペラントも其の出現後間もなく日本に入つて來た。理學博士丘淺次郎氏の如きは既に一八九一年獨逸留學中に斯語を研究され、法學博士吉野作造氏亦一九〇一年頃仙臺高等學校の學生時代に學びはじめられたといふことである。其の頃から日本に來て居る外國人で之を宣傳するものもボツボツあつた。即ち曉成學校教官ミツスラー氏は一九〇二年に長崎の新聞に其の談を載せ、岡山第六高等學校の講師エドワード、ガントレット氏は一九〇三年頃から通信教授を始め、其の他横須賀の加藤節氏、岡山の村本達三氏、東京の黑板文學博士、安孫子貞次郎氏等も之を學びはじめられた。かくて一九〇六年(明治三

十九年)六月に黑板博士、安孫子貞次郎氏、讀賣新聞記者薄井秀一氏等の肝煎によりて「日本エスペラント協會」(Japana Esperanto Asocio)が設立され、外務大臣林董伯を其の會頭に推し、機關雜誌「日本エスペランティスト」(Japana Esperantisto)を發行し、又講習會等を開いて盛に會員を募集した。丁度日露戦争が終つて國威人心共に作興せる時だつたので諸名士の之に参加する者少くなかつた。一寸参考までに創立當時の顔振を挙げると、藤岡勝二氏、斯波貞吉氏、飯田雄太郎氏(氏は又ヴオラピユキストでもあつた)、黑板勝美氏、足立荒人氏、丸山通一氏、安孫子貞次郎氏、薄井秀一氏、古賀千年氏、淺田榮次氏、堺利彦氏、田川太吉郎氏、丘淺次郎氏、和田萬吉氏、松井知時氏、井口丑二氏、原松治氏、杉井和一郎氏、石川安次郎氏、岡田榮吉氏、木内禎一氏、大杉榮氏、加藤節氏、ガントレット氏、村本達三氏等歴々であつた。そして同年八月十三日には第一回エスペラント講演會が開かれた。

其の頃にはすでに長谷川二葉亭氏の「世界語」、ガントレット、丸山兩氏共著の「エスペラント文法書」、加藤節氏の「エスペラント教科書」、村本達三氏の「エスペラン

ト小字書」などの研究用書も出來て居り、講習會も屢々開設された。

次いで中村精男氏、千布利雄氏、小坂狷二氏、杉山隆治氏等も加はつて會は益々發展し、一九一四年(大正三年)には「エスペラント全程」(千布氏著)、「エスペラント和譯辭典」(中村、黑板、千布、小坂、杉山五氏共著)も出て、内容も漸く充實して來た。然るに間もなく世界大戰起り、其の他に種々の事情もあつたので兎に角日本エスペラント協會は雜誌の發行も中絶し、諸の機關も一時殆んど停止の有様となつた。大戰終つて時代の要求に従ひエスペラントも大に復興の時運に際會したのであるが、如何せん協會は借財其の他で到底活動が出來なかつた。そこで一九一七年(大正八年)小坂狷二氏、藤澤親雄氏、淺井惠倫氏等少壯氣鋭の諸士相圖つて新に日本エスペラント學會(Japana Esperanto-Instituto)を起し、機關雜誌「Revue Orienta」を發行して、舊協會とは獨立に宣傳運動を開始した。其の間に盲詩人エロシエンコ、クツネツオフ、セリセフといふ三人の露西亞のエスペランティストも渡來して宣傳を助け、フィンランド公使ラムステッド博士の如き熱心なエスペランティストも迎ふる

ことが出来たので爾來宣傳運動は駁々乎として成功し、一九二二年（大正十一年）末には全國に學會會員二千餘名、萬國エスペラント協會會員百數十名を數ふるに至つた。そして學會以外にも全国各地に七十餘の普及團體が出来、今や非常な勢を以てエスペラント運動は進展しつつあるのである。

學會と全國の諸團體とは現在全然獨立の關係に立つて居るから其の間の聯絡を取る爲めに「日本エペラント聯盟」(Japan Esperanta Federacio)を設けやうといふ意見も近年起つて來た。之もいつれ實現するであらう。

しかし日本に於けるエスペラント運動は未だほんの初期にしかなつて居ない。之によりて吾々は我が新進勃興の氣概に富める新しい學術、其の他百般の事業を世界に紹介すべきであるが遺憾ながら未だ何程もそこ迄に進んで居ない。しかし世界に於けるエスペラントは最う宣傳の時代を過ぎて實用の時代に入つた。吾々はいつまでも宣傳ばかりして居る譯には行かぬ。道は近きにある。吾々は直ちに取つて之を實際に用ゐなければならぬ。

「一體日本の外交官は何故あんなに腰が弱いだらう、日本の商人は何故あんなに意氣地がないだらう、日本の學

者は何故あんなに外國崇拜ばかりして居るだらう、自分が大きくなつたらウント外國人の鼻をへし折つて日本の國威を發揚し、世界の舞臺に名を揚げてやらう。」とは血氣盛りの青年諸君の勇ましき意氣である。然るに五年十年と年を重ね、區際生活の實情を知る様になると次第に自分自らも腰が弱くなり、意氣地がなくなり、外國崇拜病にかゝらざるを得なくなる。それは一體何故であるか云ふ迄もなく外國語を學ばなければならぬからである。吾々は未だ幼い時から既に漢字といふ難物によりて若い膏汗を絞られる。それから中等學校に入れば又英語といふ不規則と慣用とから成立つて居る言語を學ばなければならぬ。高等學校に行けば又其の上に更に獨逸語フランス語と云つた様なものをやらなければならぬ。そんなことで學業の大部分は費され、そして眞の實用になる學問を修める餘裕はほんの一少部分しかない。それも一の外國語でも完全に物になれば免に角、多くの場合眞に外國語を完全に修得し得る者は百人中二三人に過ぎない。優等生と自惚れて居る人々でも外國人と出會すればもう何も出来ないことが多い。外交官の試験は人物よりも學識よりも何によりも外國語の力を主として行ふが吾が外

交官で眞に外國人同様に外國語の話せる者は幾人もないといふことである。三井三菱はじめ大商店は高い俸給を出して外國語學校の出身を雇ふが、眞に外人と應待して自ら言はんと欲する丈けを言ひ得るものは極めて少數であるといふことだ。學者とか文士とかは十年乃至二十年と外國語を學んで翻譯を出すが大抵の場合誤譯だらけで青二才の失笑を買ふが常である。此の如き有様でどうして腰が強くなれやう、どうして意地が立てられやう。どうして自己尊重を支持することが出来やう。茲に於て外國に勝たんとすれば唯沈黙して銃劍突撃を行ふ外はないと考ふるに至るのは無理もない。世界は日本を「好戰國」と知るのみで、日本に「文學があり詩歌があり、人文道徳がある」とは知らない。是れ今日世界に漲れる排日の根本原因ではないか。

吾人は此のことを思ふ毎に痛切に日本エスペランティストの前途に横はる大なる使命を思はざるを得ない。他の國がエスペラントを採用しやうとしまいとに關せず日本には日本獨特の理由からエスペラントを採用する必要がある。

昨年（一九二一年）瑞西ジェネヴァの國際聯盟總會に

出席して具さに日本人が國際交際場裡に於て不利の地位にあることを直視せる柳田國男氏、佐竹三吾氏、宮島幹之助氏等二十三名は彼地より遙々帝國議會に「エスペラント語に關する公の調査をなすの件」を請願して來たが請願者の記名調印がしてなかつた爲めに採用にならなかつた。茲に於て在京の同志は中村理學博士、穂積法學博士等百三十九名の賛成署名を得て本年（一九二二年）二月議會に「エスペラント語を諸學校の教授課目に編入する爲め調査委員を設けられんことの請願」を提出し、衆議院の採擇を得たが、貴族院では議事未了のまゝ閉會となつた。しかし吾人は政府が採用すると否とに關せず、善い事はどしどし實行して日本文化の向上發展を圖る事が國民の任務であると信じ、且つ行ふものである。序ながら當路諸公が此の點に早く自覺し、片時も早く全國の諸學校にエスペラント語を加設せられんことを希望して止まないものである。

章 八 第

エスペラント學習上の注意

如何なる學問でも同じことであるが、其の學問に早く

熟達せんとせば良師を選び之に就くか、良書を選び之を読むかの二つに歸する。エスペラントも初期には然るべき教師に就かうとしても其の人を得難かつたために多くのエスペランティストは獨學自修によつて之を學んだ。今日は常に多數の立派な講師も出來たのであるし、中には立派な講習所まで設けて諸君を待ちつゝあるのであるから、なるべく之に就いて學べる方がよからうと思ふさういふ便宜を有する人々はそれでよい譯であるから殊更に茲に言を費す必要はない。吾人が以下少しく述べんとするものは全くの獨學者の爲めである。夫は本書が元來獨習書として作られて居る目的にも副ふからである。

第一に吾人は先づ諸君が「エスペラントとは如何なるものであるか」といふことを徹底的に知るゝことを希望したい。エスペラントが如何なる性質の言語であるか、それを學んで如何なる利益があるか、其れを學ぶには如何すれば最もよく目的を果すことが出来るかと云つた様なことを先づ先輩の談話なり日本文で書いたものによりて知つておけば學ぶにも便利があり、又早く上達もする譯である。エスペラントとは何であるか、それを學んで何んな益があるか、如何にして學べば最もよく上達

することが出来るか、そんな様なことを知らずに、單に好奇心から學ぶ人は途中で止めて了ふものが多い。それではやつた所で何の意味もない。

從來此の第一の必要に應ずる記事や、演説などはあつたことはあつたけれども一つにまとまつたものはなかつた様に思ふ。本書前編に之を説いたのは全く其の必要に應ぜんが爲めであるから、是非とも之を一讀してから、後編に就かるゝ様にしたいのである。

第二にエスペラントは細く長く學んで修得するよりも太く短くやつて卒業して了ふ方がよい。つまり之をやる時は萬事を抛つても之をやる位の用意を以てやつて了ふ方がよい。一通り修得して了へば容易に忘れはしないが、半成のまゝで止めたりするとやはり忘れやすい。

第三に文法を早く呑み込むことである。エス語の文法は極めて簡單であるから之を早く學ばうとすれば一二時間でも十分である。だから初めての人はエスペラントは馬鹿に容易いなど、言つてあまり力を入れて學ばうとしない。その爲めに上達するのは比較的遅いのである。エスペラント文法はなる程英獨佛などの外國語に比すれば百分の一にも足らぬ簡單なものであつて一二時間でも

一通り學ぶことは出来る。併し日本人として見れば全く新しい形式の外國語を學ぶ譯であるから相當の覺悟を以て當たる必要がある。エスペラントは決して全然努力なしに學び了へることは出来ない。名詞、形容詞、副詞、動詞は語尾が一定して居るからすぐ見分けがつくが、其れ以外の助辭になると語尾は全く不定である。此の助辭はなるべく早く語記して了ふがよい。其の数は百幾つとしかないので少し努力すれば覚え込むのはさう六ヶしいものではない。併し語記すると云つて無暗に捧語記しても實際用ふる時にはうまく行かないから、やはり文例と一所に學びつゝ語記するがよいのである。本書は此の點に可成り注意を拂つてあるつもりであるから、何度も何度も繰返し練習して獨習書全體によく通曉せらるゝことを望みたい。

第四に覺えたことは大膽に使ふことである。外國語學習の秘訣は「大膽」といふ一字につきて居る。大膽に使へば言語は忽ち我が物となるが、遠慮してピクピクして居ると、言語はいつ迄も我れを馬鹿にして我が物とはならない。大きな聲で大膽に讀めばすぐ讀方が上手になり、大膽に話せば會話演説が上手になり、大膽にかけば

手紙や、文章が上手になる、大膽なる哉、大膽なる哉、何でも語學は大膽に限る。

第五に宣傳することである。エスペラントは全く新しい言語を、新しく植付けやうとするものであるから自分丈け知つて居ても何にもならない。だから自分が相當會得したならば之を周圍の者に宣傳普及し、或は研究會とか、普及團とかをつくり、そんな會や團體が既にあれば之に加入し、そして盛に宣傳するがよい。さうすれば自然に一種のエスペラント的の氣分が出來、其の中に居るものは早く同語に上達するのである。

第九章

エスペラント研究圖書解題

獨習書に依つて一通りエスペラントといふものはどんなものであるかを學ばれたら、次にどんな本を讀んだらよいかといふに、それには色々本はあるがあまり繁雜になるから茲では重要なものゝ一部分を擧げるに止める。先づどうしても一通り讀んで置かなければならぬ本は、

1. Fundamenta Krestomatia de la Lingvo Esperanto.
を擧げなければならぬ。これはザメンホフ博士が自らエ

スペラントの基本的文範¹として編輯されたもので、大部分は博士の自作であるが又他の人の傑作も編入してある。兎に角此の書を一通り讀取することはエスペラント研究者には是非必要なことである。殊に其巻頭にある Ekzercaro (練習文集) は博士が最も巧妙なる十六ヶ條の文法規則を僅に十八頁の中に自由自在に使つて見せたものであつて、彼のブーローニュ宣言の中に於て十六ヶ條文法規則及び世界辭典と共に萬代不易の基礎となつて居るものであるから、十分に熟讀玩味する必要がある。定價金二圓郵税十二錢。

2. Dokumentoj de Esperanto.

これは D-ro. A. Möbusz 氏の編纂せるものでエスペラント運動の歴史的な重要文書類及び組織内容を説明せる文書を蒐めたもので、これ又是非、一讀しなければならぬものである。就中ザ博士の諸大會でなした演説は教へられる所極めて多いと思ふ。定價金二圓郵税八錢

3. Vivo de Zamenhof.

是れはエスペラントの創案者ザメンホフ博士傳であつてブリザア博士の名文を以てかゝれてある。内容も形式も共に模範的エスペラント文献たるを失はない。定價金一

圓六十錢郵税六錢。

次に雜誌では

1. Esperanto.

萬國エスペラント協會 (即ち U E A) の機關雜誌であつて、其の會員に配布するものである。之を讀めば世界に於けるエスペラントの狀況、之を通じての世界の大勢等がよくわかる。月刊。一ケ年豫約金五圓二十錢。各地に代表者があつて取次いで居る。

2. Esperanto Triumfonta.

獨逸ケルン同社發行、週刊、エスペラント語で書いた隨一の速報機關、記事の正確は衆目の一致する所である。一ケ年豫約金五圓。

3. Revuo Orienta.

日本エスペラント學會の機關雜誌、會員に配布される會費一ケ年金二圓四十錢。

辭書類では

1. Plena Vortaro Esperanto-Esperanta kaj Esperanto-Franca : E. Boirac.

エスペラントでエスペラントを譯したもの、又フランス語でエスペラントを譯したものとして最も權威あるも

のである。全三冊定價金二圓六十五錢郵税十六錢。

2. The Esperanto-English Dictionary : by Millidge. エ
スペラント英譯辭典定價金三圓七十五錢郵税十二錢。

3. The English-Esperanto Dictionary : by Joseph Rhode.
英エス辭典金二圓五十錢郵税十四錢。

4. 大成エスペラント和譯辭典、エス私辭典、日本エス
ペラント社發行定價金二圓郵税六錢。

5. 和エス小辭典、京都カニヤ書店發行、定價金一圓郵
税四錢。

【注意】外國書の値段は時に變動があることを承知置
き願ひたい。

其の他推奨すべき良書は

1. D-ro L. L. Zamenhof の著書及び翻譯書

Batalo de L' Vivo (Dickens).

Fundamento de Esperanto.

Georgo Dandin (Komedio de Moliere).

Hamleto (Shakespeare).

Ifigenio en Taurido (Dramo de Goethe).

Lingvaj Respondoj.

Proverbaro Esperanta.

Predikanto.

Psalmaro.

Rabistoj (Dramo de Schiller).

Revizoro (Komedio de Gogol).

Sentencoj de Salomono.

Genezo, Eliro, Levidoj, Nombroj, Readmonoj, (舊約
聖書)

2. 教科書類

Bildtabuloj por la Instruado de Esperanto : Th. Gold-
schmidt.

Commercial Esperanto : Page W. M.

Karlo : Ed. Privat.

Kursa Lernolibro : Ed. Privat.

Kurso Tutmonda laŭ la Metodo Natura : E. Casse.

Perloj el la Oriento. 小坂狷二氏著

Praktikaj Komercaj Leteroj : O'Conner.

Tra la Mondo : Paul Bennemann.

Unua Parto 〓 Dua Parto ;

エスペラント讀本及文範 千布利雄氏著

エスペラント全程 同

エスペラント教科書、小坂狷二氏著

模範練習讀本、同

イツツブ物語、同

エスペラント講習讀本、八木日出雄氏著

短期講用エスペラント速成教科書、川原次吉郎著

レッスンの萬話、同

3. 辭書類

Edinburgh Pocket Dictionary. (エス英、英エス辭書)

Enciklopedia Vortareto : ch. Verax.

English-Esperanto Dictionary : Fulcher and Long.

Handwörterbuch Esp-Deutsch und Deu-Esp : Steier.

Vortaro de Esperanto : Kabe.

Wörterbuch Esperanto-Deutsch : Stark.

Wörterbuch Deutsch-Esperanto : Stark.

助辭一覽、小坂狷二氏著

助辭詳解、千布利雄氏著

4. 文學書類 (小説、戯曲、童話、詩文)

Advokato Patelin (Franca Komedio de Brueys kaj Palaprat)

Aspazio (A. Svjentoĥovski) : D-ro. Leono Zamenhof.

Avarulo (Moliere) : S. Meyer.

Don Juan (Moliere) : E. Boirac.

Fabiola : E. Wiseman. [Krikortz.

Fraŭlino Julio (A. Strindberg) : Paul Nylén kaj S. E.

Makbeto (Shakespeare) : Lambert.

Pario (A. Strindberg) : Bijer Storöm.

Pri Esperanta Literaturo : Ed. Privat.

Pro Kio? : Argus.

Salome (Oscar Wilde). 千布利雄氏譯

Sokrato (Ch. Right) : J. Coutheaux.

Sonĝo de Somermeza Nokto (Shakespeare).

Tri Rakontoj (Leo Tolstoy).

以上の外科學、宗教、美術、歌集、曲譜、叢書類等枚舉に違なきほどの多くのエスペラント書籍がある。エスペラントをやり出した人がすぐ發する質問は一體エスペラントをやつても讀む本があるかといふことであるが、その點は決して心配無用で恐らく人の一生を献けても讀みきれない位の本が今日現にあり、又日に日に新書が出版されつゝあるのである。雑誌だけでも各専門にわたつて何十種とある。

国内人の常識としては日本式ローマ字を！

国際人の常識としてはエスペラントを！

後 篇

エスペラント語學教程

エスペラント語學教程

第一章

字母及び發音

：字母 Alfabeto.

1. エスペラントの字母は二十八文字ある。即ち次の如くである。()中の假名は各文字の名稱を示すものである。

Aa(ア-), Bb(ボ-), Cc(ツオ-), Ĉĉ(チヨ-), Dd(ド-), Ee(エ-), Ff(フオ-), Gg(ゴ-), Ĝĝ(ヂヨ-), Hh(ホ-), Ĥĥ(クハ-), Ii(イ-), Jj(イヨ-), Ĵĵ(ジョ-), Kk(コ-), Ll(ロ-), Mm(モ-), Nn(ノ-), Oo(オ-), Pp(ポ-), Rr(ウろ-), Ss(ソ-), Ŝŝ(シオ-), Tt(ト-), Uu(ウ-), Ŭŭ(ウオ-), Vv(ヴォ-), Zz(ゾ-)

2. Ĉĉ, Ĝĝ, Ĥĥ, Ĵĵ, Ŝŝ, Ŭŭ の上のへ印又はー印は(これをスーパーサイン Supersigno といふ)發音の符號ではない、Aa, Bb, ……等の文字と同じく皆其の印と共に獨立の一文字を形成するものである。従つて S と Ŝ とは全然別個の二文字なのである

3. A. B. C. Ć...のやうな大文字は標題、文章の最初の語、地名、人名、などの書きはじめに使ふ。敬稱の語の初めの字も大文字にすることがある、例へば Dio (神様) M-ošto (閣下) の如くである。又 vi (あなた) を大文字で Vi と書く人もある。

4. 筆記文字は一般のローマ字と同じい。スーベルスイグノは筆記文字の上に付けねばよろしい。

5. スーベルスイグノを有たない印刷所又はこれのついた文字のないタイプライター、ライノタイプなどでは其の代りに ch, gh, hh, jh, sh, u を用ひてもよい。

6. 字母二十八文字を其の發音の性質によつて母音を表はす文字と子音を表はす文字とに分けることが出来る。

2. 母音 Vokaloj.

1. 五文字ある、次の如し。

a, e, i, o, u,

2. 母音とはそれ自身で獨立の發音 (名稱と同じ) を有つてゐるものである。即ちその發音は

a (ア) e (エ) i (イ) o (オ) u (ウ)

3. 子音 Konsonantj.

1. 子音は二十三文字ある。次の如し。

b, c, ĉ, d, f, g, ĝ, h, ĥ, j, ĵ, k, l, m, n, p, r, s, ŝ,
t, ŭ, v, z,

2. 子音はそれ自身單獨では發音なきものであつて、母音と連結して初めて一つの發音を出し得るものである。例へば ba (バー)、be (ベ)、bi (ビー)、bo (ボー)、bu (ブ)、の如くである。

3. 子音の中の j 及び ŭ は初學者には往々母音だと誤解される傾がある。注意を要する。

4 發音 Elparolad)

1. 一字一音、一音一字、綴つてある通りに發音し、發音する通りに綴る。

2. 變音、默音(書いておき乍ら發音しないもの)はない

3. 揚音 Akcento は常に語の最後から二番目の綴 Silabo にある。

發音練習(其の一)

發音は高く聲を出し揚音 (ゴチツクの所) に氣をつけて何回も練習するがよい。

アル パーロ パートろ ヌーボ ツエーロ ツイ
Al. Ba'-lo. Pat'-ro. Nu'-bo. Ce'-lo. Ci-
tro'-no. Cen'-to. Sen'-to. Sce'-no. Sci'-o

ツオーロ コーロ オフィツイーロ ファツイーラ ラーツア
Co'-lo. Ko'-lo. O-fi-ci'-ro. Fa-ci'-la. La'-ca.

パツーロ チャーる ツエミーゾ ツイカーノ ツイ
Pa-cu'-lo. Ĉar. Ce-mi'-zo. Ci-ka'-no. Ci-

エーロ チュ フェリーチア ツイーア チーア プろ
e'-lo. Ĉu. Fe-li'-ĉa. Ci'-a. Ĉi'-a. Pro-

ツエーソ センチエーサ エツ エチ エク ダ
ce'-so. Sen-ĉe'-sa. Ec. Eĉ. Ek. Da.

ルード デーント プレンドンディ エル エン デ
Lu'-do. Den'-to. Plen-di. El. En. De.

テーニ セン ヴエーろ ファーリ フィデーラ トウラー
Te'-ni. Sen. Ve'ro. Fa'-li. Fi-de'-la. Tra'-

フィ ガーロ グラランダ ゲーント キーブソ
fi. Ga'-lo. Gran'-da. Gen'-to. Gip'-so.

グースト レーギ パーゴ パーヂョ レーヂョ
Gus'-to. Le'-gi. Pa'-go. Pa'-ĝo. Le-ĝo.

ヂス チュースタ レーギ チアるデーノ ローン
Ĝis. Ĝus'-ta. Re'-gi. Ĝar-de'-no. Lon'-

ガ レーグノ スイーグニ グヴァるデイオ リーン
ga. Reg'-no. Sig'-ni. Gvar-di'o. Lin'-

グヴォ デュアード ハーろ ヒルラント ハーキ
gvo. Ĝu-a'-do. Ha'-ro. Hi-run'-do. Ha'-ki.

ネヘーラ バツホーろ セスホーら バト
Ne-he'-la. Pac-ho'-ro. Ses-ho'-ra. Bat-

フーホ ホーろ コーろ クほレーろ クへ
hu'-ho. Ho'-ro. Ko'-ro. Ĥo-le'-ro. Ĥe-

ミーオ イミーテイ フィーロ ビーラド トウローヴ
mi'-o. I-mi'-ti. Fi-lo. Bir-do. Tro'-vi.

プリンテムボ ミン フォイーろ フェイーノ
Prin-tem'-po. Min. Fo-i'-ro. Fe-i'-no.

イーエル イーアム インイヤム イユ イエス イユ
I'-el. I'-am. In. Jam. Ju. Jes. Ju-

リースト クラヨノ マイエースタ トウイ ドー
ris'-to. Kra-jo'-no'. Ma-jes'-ta. Tuj. Do'-

モイ るイーノ プルーイノ バラーイ パー
moj. Ru-i'-no. Pruj'-no. Ba-la'-i. Pa'-

ライ デイーノ ヴエーイノ ベレーイ マルプレイ
laj. De-i'-no. Vej'-no. Pe-re'-i. Mal'-plej

イユスタ ジュス ジエーテイ ジヤルザ ジユルナロー
Jus'-ta. Jus Ĵe'ti. Ĵa-lu'-za. Ĵur-na'-lo.

マヨ ボナージョ カーボ マクーロ ケース
Ma'-jo. Bo-na'-ĵo. Ka'-po. Ma-ku'-lo. Kes'-

ト スーケーろ アークヴォ コケート リク
to. Su-ke'-ro. Ak-vo. Ko-ke'-to. Lik-

ヴォろ バツカーボ
vo'-ro. Pac-ka'-po.

【注意】(1)は「スケーろ」と正しく發音しなければならぬ
「スケーろ Skero.」となつてはいけない。

發音練習(其の二)

次に示すものは自ら揚音點を區別して發音練習なさい。

ラーヴィ レヴィロ パーリ メム イムプリーキ
La'-vi. Le-vi'-lo. Pa-ro'-li. Mem. Im-pli'-ki

エムバラソ ノーモ インディフェレンタ イン
Em-ba-ra'-so. No'-mo. In-di-fe-ren'-ta. In-

テるナツイーア オル へろーイ へろイーノ フォーイ
 ter-na-ci-'a. Ol. He-ro-'i. He-ro-i'-no. Foj-
 ノ ビーア パールピ りペーテイ アるバーろ サー
 no. Pi-'a. Pal'-pi. Ri-pe-'ti. Ar-ba'-ro. Sa-
 マ スターり スイゲーロ スイステーモ ペスイーロ
 ma. Sta'-ri. Si-ge'-lo. Sis-te'-mo. Pe-si'-lo.
 ペズイーロ セーンテイ ソフイースモ ツイブレーソ
 Pe-zi'-lo. Sen'-ti. So-fis'-mo. Ci-pre'-so.
 シイ バーツ スターロ ヴエースト ヴエーシユト
 Ši. Pa'-so. Sta'-lo. Ves'-to. Veš'-to.
 デイスシイーり シヤンツエーリ トラピーショ テオ
 Dis-šì-'ri. Šan-ce'-li. Tra-pi'-šo. Te-o
 りーオ バテーシト ウテイーラ ウーンゴ プルーモ
 ri'-o. Pa-ten'-to. U-ti'-la. Un'-go. Plu'-mo.
 トウムールト プルー ルーイ キーウ バラーウ
 Tu-mul'-to. Plu. Lu'-i. Ki-u. Ba-la'-u.
 トラウーロ べれーウ ネウーロ フラウロ フラウ
 Tra-u'-lo. Pe-re'-u. Ne-u'-lo. Fraū-lo. Fraū-
 リーノ ラーウデイ エウろーポ トウろウーヅィ ホ
 li'-no. Lau'-di. Eū-ro'po. Tro-u'-zi. Ho-
 デイーアウ ヴアーナ ヴエるソ ソールヴィ ザーるギ
 di'-aū. Va'-na. Ver'-so. Sol'-vi. Zer'-gi.
 ゼニート ゴオロギーオ アゼーノ メズーろ
 Ze-ni'-to. Zo-o-lo-gi'-o. A-ze'-no. Me-zu'-ro.
 ナーゾ トウれゾーろ メズノークト ズーモ
 Na'-zo. Tre-zo-ro. Mez-nok'-to. Zu'-mo.
 スーモ ゴーノ ソーノ ペーゾ ペーツオ
 Su'-mo. Zo'-no. So'-no. Pe'-zo. Pe'-co.

ペーソ ネニーオ アデーアウ フィズイーコ グ
 Pe'-so. Ne-ni'-o. Adi'-aū. Fi-zi'-ko. Ge-
 オグラフィーオ スピリート リプハーろ インディーグ
 o-gra-fi'-o. Spi-ri'to. Lip-ha'-ro. In-dig'-
 ニ ネニーエル スペゲーロ シュビーノ ネーイ
 ni. Ne-ni'-el. Spe-gu'-lo. Špi'-no. Ne'-i.
 れーエ へろーオ コンスツイーイ トウラエターら
 Re'-e. He'ro-o. Kon-sci'i. Tra-e-te'-ra.
 へろエート ルーエ モーレ パーレ トライー
 He-ro-e'-to. Lu'-e. Mo'-le. Pa'-le. Tra-i-
 れ パースイーエ メテイーオ インヂエニエーろ イン
 re. Pa-si'-e. Me-ti'-o. In-ġe-ni-e'-ro. In-
 セークト れセーるヴィ レゼーるヴィ
 sek'-to. Re-ser'-vi. Re-zer'-vi.

發音練習(其の三)

次に示すものは發音揚音共に各自に試みなさい。

Citrono. Cento. Sceno. Scio. Palau. Šan-
 celi. Neniēl. Ēmbaraso. Zoologio. Reservi.
 Traire. Hodiaū. Disširi. Neulo. Majesta.
 Packařo. Heroino. Pezo. Internacia. Sesho-
 ra. Cipreso. Stalo. Feino. Plu. Sukero.
 Gento. Indigni. Sigelo. Krajono. Ruino.
 Pesilo. Lipharo. Metio. Ġardeno. Sono.

Laŭdi. Pale. Facila. Insekto. Kiu. Zorgi.
 Cikano. Traetera. Sofismo. Domoj. Spino.
 Majo. Signi. Ec. Bonaĵo. Legi. Iel. Juristo.
 Ĉielo. Ĥemio.

【注意】 行の最後の語の綴 silabo はどこで切つてもよい。

5. エスペラント式ローマ字綴は次の如くである。

1. 五十音

ア	イ	ウ	エ	オ
a	i	u	e	o
カ	キ	ク	ケ	コ
ka	ki	ku	ke	ko
サ	シ	ス	セ	ソ
sa	ŝi	su	se	so
タ	チ	ツ	テ	ト
ta	ĉi	cu	te	to
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
na	ni	nu	ne	no
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
ha	hi	fu	he	ho
マ	ミ	ム	メ	モ
ma	mi	mu	me	mo
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ja	ii	ju	e	jo

ラ	リ	ル	レ	ロ
ra	ri	ru	re	ro
ヴァ	ヴィ	ウ	エ	ヲ
va	vi	u	ue	uo
ン				
n				

2. 濁音

ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ga	gi	gu	ge	go
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
za	ĵi	zu	ze	zo
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
da	ĝi	zu	de	do
バ	ビ	ブ	ベ	ボ
ba	bi	bu	be	bo

3. 半濁音

パ	ピ	プ	ペ	ポ
pa	pi	pu	pe	po

4. 拗音

キヤ	キユ	キヨ	ギヤ	ギユ	ギヨ
kja	kju	kjo	gja	gju	gjo
シヤ	シユ	シヨ	ジヤ	ジユ	ジヨ
ŝa	ŝu	ŝo	ĵa	ĵu	ĵo
ニヤ	ニユ	ニヨ	ヂヤ	ヂユ	ヂヨ
nja	nju	njo	ĝa	ĝu	ĝo
ヒヤ	ヒユ	ヒヨ	ビヤ	ビユ	ビヨ
hja	hju	hjo	bja	bju	bjo

ミヤ ミユ ミヨ
mja mju mjo

リヤ リユ リヨ
rja rju rjo

ピヤ ピユ ピヨ
pja pju pjo

第二章

名詞 Substantivo

1. エスペラントの單語の中、名詞、形容詞、副詞、動詞の四品詞は文章構成の主要部分であつての其の數も無限であるから特に其の語尾の形を一定して本篇第五章に説く助辭と區別してある。

2. 名詞の語尾は *o* に終る。例へば

tabl) 卓子

lamp) 洋燈

の如き皆名詞であるから *o* に終つて居る。エスペラントには例外といふものがないから極めて便利である。

次に二個以上の物即ち複數を示すには *o* の次に更に *j* を附ける。即ち

tabloj 二個以上の卓子

lampoj 二個以上の洋燈

3. 名詞には主格と目的格との二つがある。主格とは文章の主となるものであつて、*「テーブルは」*とか、*「ランプが」*とかいふ場合の如く *「は」*又は *「が」* のつく形である。目的格とは *「テーブルを」*とか、*「ランプを」*とかいふ様に *「を」* のつく場合の形である。主格の場合は別に語尾は變化しないが目的格の場合は普通の語尾の外に更に *n* をつけることになつて居る。即ち

tablon 卓子を tablojn 卓子(複數)を

lampon 洋燈を lampojn 洋燈(複數)を

といふ風につかふ。次の例によりて知られたい。

(1) Patro kaj frato. (2) Leono estas besto.
(3) Rozo estas floro kaj kolombo estas birdo. (4) Knaboj kaj knabinoj. (5) Ili estas studentoj. (6) Ni estas japanoj kaj li estas amerikano. (7) Teodoro vidas leonon. (8) Mi konas Johanon. (9) Ludoviko aĉetis librojn.

【譯】(1)父と兄弟。(2)獅子は獸である。(3)ばらは花である、そして鳩は鳥である。(4)少年達(複數)と少女達。(5)彼等は生徒である。(6)吾々は日本人(複數)であ

る。そして彼はアメリカ人(單數)である。(7)テオドーロが獅子を(目的格)見て居る。(8)私はヨハノーを(目的格)知つて居る。(9)ルドヴィコは本を(複數目的格)買った。

4. 名詞の目的格は上の如き普通の用法の外に運動の方向(移動)、時刻、數量(時間、度数、大、高さ、重さ、價格等)及び前置詞省略の際(に其の代りとして)を示すに用ゐる(本編第五章第七節前置詞の中【注意】參照)次に數例をあける。

(10) Mi iras en la ĝardenon. (12) Georgo Vaŝington estis naskita la dudek duan de Februaro de la jaro mil sepcent tridek dua. (12) Li laboris tri tagojn. (13) Monto Fuji estas 3748 metrojn alta.

【譯】(10)私は花園の中へ(移動)行く。(11)ジョージ、ワシントンは一七三二年の二月二十二日に(時刻)生れた。(12)彼は三日間(時間數)働いた。(13)富士山は三七四八米(數量の中の高さ)高い。

第三章 形容詞及び副詞

第一節

形容詞 Adjektivo.

1. 形容詞の語尾は a で終る。

ruĝa papero. 赤い紙

bona knabo. 善い子供

Nego estas blanka. 雪は白い

2. 複數を形容する形容詞は語尾に j を、目的格を形容する形容詞には n を附して形容する關係を明かにする複數で目的格の場合も亦同じい。

novaj libroj. 新しい本(複數)

dolĉan pomon. 甘い材檜を(目的格)

karajn amikojn. 親しい友達を(複數目的格)

3. 形容詞は名詞の前後何れに置いてよい。

honesta homo. } 正直な人、
homo honesta. }

diligentaj studentoj. } 勤勉な學生達、
studentoj diligentaj. }

④

agrablan kanton. } 愉快な歌を、
kanton agrabl in. }

4. 比較級は pli, 最上級は la plej をつけてつくる。
同等級には tiel ..., kiel ... (状態の場合に)、又は tiom ...,
kiom ... (数量の場合に) を用ゐる。

Li estas pli forta, ol mi. 彼は私より強い。

Ŝi estas la plej bela el ĉiuj. 彼女は皆の中で一番
美しい。

この場合 (l (よりも) は接續詞であつてその前に (,) 印が来る、el (の中で) は前置詞であつてその前に (,) はいらぬ。

Mi estas tiel alta, kiel vi. 私はあなたと同じ位の
背丈だ。

Li havas tiom, kiom vi. 彼はあなたと同じだけ有
つてゐる。

第 二 節

副 詞 Adverbo

1. 副詞は e で終る。

rapide 速かに

2. 比較級、最上級、同等級は皆形容詞の場合に準ず。
但し最上級に la を省く。

Ŝi legas libron pli bone, ol mi. 彼女は私より上
手に本を読む。

Taro kuras plej rapide el ĉiuj. 太郎は皆の中で一
番速く走る。

Hodiaŭ estas tiel varme, kiel hieraŭ. 今日は昨日
と同じ位暖かだ。

3. 形容詞と副詞とは單に形の上に語尾が異なるばかり
でなく、本質的に次のやうな差異がある。

形容詞は名詞及び代名詞を形容するが副詞はその他の
品詞を形容する。

Floro estas bela. 花は美しい。

Li estas agraba. 彼は愉快だ。

Hodiaŭ estas bele. 今日はよい天気だ。

Kanti estas agrable. 歌ふのは愉快だ。

(1) Papero estas blanka. (2) Blanka pap-
ero kuŝis sur la tablo. (3) La patro donis
al mi dolĉan pomon. (4) Mi ne amas obst-

inajn homojn. (5) La papero estas tre blanka, sed la neĝo estas pli blanka. (6) Lakto estas pli nutra, ol vino. (7) Mi havas pli freŝan panon, ol vi. (8) Ne, vi eraras, sinjoro: via pano estas ^{pli malfrasa} malpli freŝa, ol mia. (9) El ĉiuj infanoj Ernesto estas la plej juna. (10) El ĉiuj siaj fratoj, Antonio estas la ^{plej malsaga} malplej saĝa. (11) Mi estas tiel forta, kiel vi. (12) Birdo kantas agrable. (13) Bonaj infanoj lernas diligente. (14) Nu, iru pli rapide! (15) Matura homo povas pli multe fari, ol infano. (16) Mario kantas plej bone el ĉiuj. (17) Li legis malpli rapide, ol kutime. (18) Mi kuris malplej rapide el ĉiuj. (19) Hodiaŭ estas varme. (20) Resti kun leono estas danĝere. (21) Estas necese, ke vi tuj venu.

【譯】(1)紙は白い。(2)白い紙が机の上にある。(3)父が私に甘い林檎をくれた。(4)私は頑固な人が嫌いだ。(5)紙は白い、だが雪はもつと白い。(6)乳は葡萄酒よりも滋養がある。(7)私はあなたより一層新しいパンを持つてゐる。(8)いいえ、あなたは間違つてゐます。あなたのパンは私のよりは新らしさが劣つてゐます(古い)。(9)凡ての(私の)子供の中でエルネストが最も若い。(10)凡ての彼(アントーノ)の兄弟の中でアントーノは最も愚かである。(11)私は君と同じ位強い。(12)鳥は愉快に歌ふ。(13)善い子供達は勤勉に學ぶ。(14)サア、行けもつと早く!(15)大人は子供よりは一層多くなすことが出来る。(16)マリーオは皆の中で最もよく歌ひます。(17)彼はいつもよりはゆつくり讀んだ。(18)私は皆よりおそく走つた。(19)今日は暖かい。(20)獅子と一所に居ることは危険である。(21)君はすぐ来る必要がある。

第 四 章

動 詞 Verbo.

第 一 節

動 詞 の 時 及 び 法

1. 動詞の時は次の如き語尾を取る。

-as. 現在 skribas 書いて居る。
 -is. 過去 skribis 書いて居た。
 -os. 未来 skribos 書くでせう。

2. 動詞の法は次の如き語尾を取る。

-us 假定法 skribus 書いて居るかも知れぬ。
 -u 命令法 skribu 書け。
 -i 不定法 skribi 書くこと。

3. 動詞の不定法とは現在過去未来等の時の觀念なく
 單に動作其のものを示すものであつて skribi と云へば單
 に「書く」といふ動作其のものを示すことになる。

不定法は名詞の如く主格に用ゐられることがある。

例へば

Skribi estas pli malfacile, ol legi. 書くことは讀む
 ことより六ヶしい。

といふ如きそれである。

又不定法は他の動詞の意味を補足して完全な言ひ表は
 しをなすことがある。例へば

Mi devas skribi leteron. 私は手紙を書かなければ
 ならぬ。

Mi povas paroli esperante. 私はエスペラントの話を

すことが出来る。

4. 命令法は二人稱に對する時ばかりでなく、一人稱
 にも、三人稱にも用ゐる。例へば

Ni iru. (吾々は)行きませう。

Li venu. 彼れは(すぐ)來れ(彼が來ねばならぬ)
 といふ如きそれである。

接續詞 ke の後に來る命令法は命令、希望等を表はす
 ものである。

Mi petas al vi, ke vi venu morgaŭ. どうぞ明日お
 出で下さい。

La patrino preĝas, ke lia filo sukcesu. 母は其の
 子の成功する様にと祈つた。

接續詞 por ke の後には常に命令法を用ゐる。

Vi devas lerni pli diligente, por ke vi nepre povu
 sukcesi. きつと成功するにはもつと勉強しなければ
 ならぬ。

5. 假定法とは事實なきことを假に想像する場合であ
 る。

Ŝi venus. 彼女は來るかも知れない。

Ŝe li lernus, li sukcesus. 彼は若し勉強すれば及第

するんだがね (勉強しないからだめだ)。

6. 天地自然界の現象 (天気) の主格を表はさい時には
単に動詞のみで表はす。

La suno brilas. (太陽は輝いてゐる)。

Hodiaŭ pluvas. 今日雨が降つてゐる。

Neĝas nun. 今雪が降つて居る。

尙ほ次の例について研究せられたい。

(1) Mi legas leteron. (2) Ili lernas historion.

(3) La kato manĝis raton. (4) La studentoj
salutis min. (5) Hodiaŭ estas sabato, kaj
morgaŭ estos dimanĉo. (6) Hieraŭ estis
vendredo, kaj postmorgaŭ estos lundo.

(7) Eble ŝi vin konus. (8) Se mi estus sana,
mi estus feliĉa. (9) Li estus kontenta, se
mi sukcesus. (10) (Vi) venu. (11) Karaj
infanoj, estu ĉiam honestaj! (12) Ni estu-
gajaj, ni uzu bone la vivon, ĉar la vivo ne
estas longa. (13) Mi preĝas, ke vi estu

ĉiam sana. (14) Li penadis, por ke li ne-
pre sukcesu la ekzamenon. (15) Ŝi volas
danci. (16) Ĉu la infano ne ĉesas plori?
(17) Vivi ne estas manĝi.

【譯】 (1) 私は手紙を書いてゐます。(2) 彼等は歴史を
學んでゐます。(3) 猫は鼠を食べた。(4) 學生達は私に挨拶
した。(5) 今日は土曜日です、明日は日曜日です (明日
のことをいふから未來の -os をつけるのである)。(6) 昨日は
金曜日であつた、そして明後日は月曜日です。(7) 多分
彼女は君を知つて居るかも知れない。(8) 若し私が健康
であるなら幸福なんだがな。(9) もしも僕が成功したら
彼は満足するだらうよ。(10) 來給へ。(11) 親愛なる子供
達よ常に正直であれ! (12) (吾々は) 愉快にしませう、
そして一生をよく利用しませう、人生は長くはないのだ
から。(13) 私は祈ります、あなたがいつでも健康である
様にと。(14) きつと試験に合格しやうとして彼は勉強し
た。(15) 彼女は舞踏したがつて居る。(16) あの子は泣き
やまないですか。(17) 生きるといふことは食ふといふこ
とではない。

【注意】 1. 一の文章中の語の配列は意味の混雑を来たさざる限りは各人の随意である。但し普通は主たる語を文の頭首におくことになつて居る。

Cezaro transiris trans Rubikonon. ケーザルはルビコンを渡つて行つた。

といふ風を書く。併し特に或る語を強く言はうとする時は

Trans Rubikonon transiris Cezaro. ルビコンを渡つてケーザルは行つた。

この二つの場合 trans が Rubikonon の前にあるのは前置詞たる本来の使命に基く。

【注意】 2. 疑問詞 (ĉu, kiu, kio 等) は常に文章の頭におく。

Ĉu ni parolas esperante? 君はエスペラントで話しますか。

Kiu estas tiu? 其の人は誰ですか。

といふ如きそれである。但し前置詞は疑問詞の前に來ること他の品詞に於けると同じい。

Pro kio ni lernas? 何の爲めに君は學びますか。

といふ如きそれである。

【注意】 3. 否定詞 ne は常に否定せらるゝ語の前に置く。次に一例をあぐれば

(a) Ĉiuj hundoj ne manĝas kukon. 凡ての犬は菓子を食はない。

(b) Ne ĉiuj hundoj manĝas kukon. 凡ての犬が必ずしも菓子を食ふといふことはない。

(a) は manĝas を否定し、(b) は文全體を否定する。

第二節

分詞及び混成時

1. 動詞に一定の接尾字を附して名詞、形容詞、副詞の用を爲さしめることがある。これを分詞といふ。一部分は動詞の用をなし、他の部分は名詞、形容詞、副詞の用をなすから分詞とはいふのである。

2. 分詞には能動の分詞と受動の分詞とがある。その語尾は次の如くである。これを分詞接尾字といふ。

	現在	過去	未來
能動	-ant	-int	-ont
受動	-at	-it	-ot

3. 分詞は其の語尾によりて名詞的、形容詞的、副詞的に用られる。今其の一例として現在の能動分詞の各

場合を挙げれば

lernanto 生徒 (學びつゝある者)

leganta 讀んでゐるところの

kriante 叫び乍ら

「*尊敬する諸君*」, 「*愛する友*」といふやうに日本語では能動のやうに使はれるところをエスペラントでは、

Estimataj sinjoroj (尊敬さるゝ諸君).

Amata amiko (愛さるゝ友).

といふやうに受動の形を用ゐる。此の時の *estimataj* も *amata* も共に形容詞的分詞であるから之を形容詞と同様につかふのである。形容詞はすべて形容さるる詞 (例へば *sinjoro*, *amiko*) を主として考へるから、自然に受動形分詞を用ゐることになるのである。しかし日本語に譯する時は能動的に譯するがよい。

Tiu ĉi estas la libro aĉetita de la patro hieraŭ. これは昨日父が買つた本です。

上の例文の中に於いて分詞形容詞はその原形たる動詞を補足する語をその後にとることが出来る。上文の中の *de la patro* の如きそれである。次の例に注意せよ。

Ne sin trovas patro malhelplanta sukceson de sia

filo. 自分の子息の成功を妨げる父はゐない。

5. 分詞副詞を用ゐるのは次に示す如く分詞の主格たるものと、主文の主格たるものが同一の場合に限る。

Legante leteron, li mangas kukon. 手紙を讀み乍ら (讀むといふ動作の主格も彼である) 彼は菓子を食べてゐる。

であるから次のやうな文は誤りである。

La suno brilante, mi iris promeni.

これは *La suno brilas, kaj mi iris promeni*. 太陽は輝いてゐた、それで私は散歩に行つた。

とすべきである。

6. 受動分詞に動詞 *esti* の各變化形 (即ち現在、過去、未來、假定、命令、不定) を添へて受身を表はす。

Li estas bata'ita de la patro. 彼は父に打たれてゐる。

Letero estas legata de li. 手紙が彼によつて讀まれてゐる (彼は手紙を讀んでゐる)。

7. 動詞 *esti* の各變化形と各分詞とを組合はせて各種の時を表はすことが出来る。

能 動	受 動
estas skribanta 書いて ゐる	estas skribata 書かれ てゐる
" skribinta 書いて しまつてゐる	" skribita 書かれて しまつてゐる
" skribonta 書かう としてゐる	" skribota 書かれ やうとしてゐる
estis skribanta 書いて ゐた	estis skribata 書かれて ゐた
" skribinta 書いて しまつてゐた	" skribita 書かれて しまつてゐた
" skribonta 書かう としてゐた	" skribota 書かれや うとしてゐた
estos skribanta 書いて ゐるであらう	estos skribata 書かれ てゐるだらう
" skribinta 書いて 了つてゐるだらう	" skribita 書かれて 了つてゐるだらう
" skribonta 書かう としてゐるだらう	" skribota 書かれや うとしてゐるだらう

次に混成時と法との交渉を示せば

estus skribanta 書いて ゐるかも知れない	estus skribata 書かれ てゐるかも知れない
" skribinta 書いて 了つてゐるかも知れない	" skribita 書かれて ゐるかも知れない
" skribonta 書かう としてゐるかも知れない	" skribota 書かれや うとしてゐるかも知れない

estu skribanta 書いて をれ	estu skribata 書かれて あれ
" skribinta 書いて しまつてをれ	" skribita 書かれて しまつてあれ
" skribonta 書かう としてをれ	" skribota 書かれや うとしてあれ
esti skribanta 書いてゐ ること	esti skribata 書かれて ゐること
" skribinta 書いて しまつたこと	" skribita 書かれてし まつてゐること
" skribonta 書かう としてゐること	" skribota 書かれやう としてゐること

混成時は受動を表はす時には必要であるが、能動を表はす時は必ずしもそれに依らなくとも他に助辭の助けによつて十分に同意味を表はすことが出来る。

- (1) Mi estas skribanta—
の代りに Mi skribas—
- (2) Mi estis skribanta—
の代りに Mi jam skribis—
- (3) Mi estos skribanta—
の代りに Mi skribos—
- (5) Kiam vi venis al mi, mi estis skribinta—

の代りに Kiam vi venis al mi, mi jam anta e skribis—

又は Antaŭ ol vi venis al mi, mi skribis—

(5) Kiam vi venos al mi, mi estos skribinta—

の代りに Kiam vi venos al mi, mi jam anta e skribos—

又は Antaŭ ol vi venos al mi, mi skribos—

とするやうなものである。

(1) Fluanta akvo estas pli pura, ol akvo staranta senmove. (2) Kiam Nikodemo batas Jozefon, tiam Nikodemo estas la batanto kaj Jozefo estas la batato. (3) Mono havata estas pli grava, ol havita. (4) Pasero kaptita estas pli bona, ol aglo kaptota. (5) En la lingvo "Esperanto" ni vidas la estontan lingvon helpantan de la tuta mondo. (6) Venu, ni atendas vin, Savonto de la mondo. (7) Promenante sur la strato, mi falis. (8) Li venis al mi tute ne atendite. (9) Legonte leteron, ŝi ekploris. (10) Tiu

ĉi komercaĵo estas ĉiam volonte aĉetata de mi. (11) La surtuto estas aĉetita de mi.

(12) Kiam vi vidis min en la salono, li estis dirinta al mi la veron (aŭ li jam antaŭe diris al mi la veron). (13) Kiam vi venos

al mi, li estos dirinta al mi la veron (aŭ li jam antaŭe diros al mi la veron, aŭ antaŭ ol vi venos al mi, li diros al mi la veron.) (14) Mi ne farus la eraron, se li

estus dirinta al mi la veron (aŭ se li antaŭe dirus al mi la veron). (15) Kiam mia patro venos, estu dirinta al mi la veron (aŭ diru al mi antaŭe la veron). (16) Mi volas esti dirinta la veron (aŭ mi volas, ke tio,

kion mi diris, estu vero). (17) Kiam via domo estis konstruata, mia domo estis jam

longe konstruita. (18) Laŭ la projekto de

la inĝenieroj tiu ĉi fervojo estas konstruota en la daŭro de du jaroj; sed mi pensas, ke ĝi estos konstruata pli ol tri jarojn.

【譯】(1)流れつゝある水は動かずに溜つて居る水よりは一層清くある。(2)ニコデーモがヨゼーホを打てばニコデーモが打者でヨゼーホが被打者である。(4)現に有つて居る金は曾つて有つて居た金よりは一層重大である。(5)捕へた雀は未だ捕へない(是れから捕へんとする)驚よりはよい。(5)エスペラント語に於て吾々は未來の全世界の補助語を見るのである。(6)來りませ世界の救主!吾々は御主をまつて居る。(7)街を散歩してる間に私はたふれた。(8)彼は私の所に全く突然(豫期されずに)やつて來た。(9)彼から來た手紙を讀まうとして彼女は泣きだした。(10)この商品はいつでも私は喜んで買ひます。(11)この外套は私が買ったのです。(12)あなたが客間で私を見た時にはもうすでに彼は私に眞實を言つてしまつてゐた。(13)あなたが私の所へ來る時分には彼はもう眞實を言つて了つて居るでせう。(14)若し彼れが私に眞實を語らなかつたとせば私は誤をなしたかも知

れない。(15)私の父が來る時まで私に眞實のことを話しておき給へ。(16)私は眞實を話したことを欲する(私は自分の話した事が眞實であつて欲しいと思つて居る)。(17)君の家が建てられつゝあつた時に私の家はとつづくに建て終つてゐた。(18)技師の設計によれば此の鐵道は二年間で敷設さるゝとのことであるがしかし私は考へるそれは三年以上かゝつて敷設さるゝだらうと。

第 五 章

助 辭 Partikuloj

第 一 節

冠 詞 Artiklo

【主辭と助辭】以上説明し來れる名詞、形容詞、副詞及び動詞は文章構成の主要部分であつて其の數も無限であるから、エスペラントの創案者ザメンホフは之れに一定の語尾を附して一目瞭然たらしめた。其の他の冠詞、代名詞、數詞、相關詞、接續詞、副詞的助辭、前置詞及び間投詞は文章構成上補助役たるものであつて其の數も亦有限であるから定まつた語尾を有たしめてない。之を助辭といふのである。之に對して前者を主辭といふても

よい。

【助辭の語彙】 助辭は一の文章の中に頻出するものであるから初學者はなるべく早く之を語彙するがよい（小坂氏著助辭一覽、千布氏著助辭詳解（未完）——共に日本エスペラント社發行——参照）

以下助辭の一たる冠詞を解説する。

1. 冠詞は名詞の前に冠せしめて用ゐる。定冠詞 *la* が即ち夫れである。

2. 冠詞は名詞の性數格等によりて變化しない。

3. 冠詞の用法は他の國語に於けると同じい。即ち名詞が特に定まつた事物を示すときその前に置くのである。例へば「子供」と一般的にいふときは *knabo*（單數）又は *knaboj*（複數）といふのであるが、特に定つた「その子供」とか、「そこに居る子供」「昨日見た子供」とかいふ様に或る一定の子供を指すときは *la knabo* 又は *la knaboj* とする。

4. 或る名詞が其の種類全體を示す時には單數複數に拘らず *la* をつける。

La homo estas mortema. 人（全體）は死ぬものだ。

La homoj estas mortemaj. 同上

5. 地名、人名其他固有名詞には冠詞をつけないのが普通である。

6. 冠詞を用ふるは便利の爲めであつて、必要の爲めではないから、冠詞がないからといつて文章が全然わからない譯ではない。それで冠詞を有たない國民（例へば日本人、露西亞人の如き）又は其の用法に習熟せざる初學者は當初の間之を用ゐなくとも差支ない。

7. 冠詞は母音に終る前置詞の後及び母音に始まる語の前にありては *a* を省きて *'* となすことが出来る。特に韻文の場合に多い。（例6）

(1) *Infano ne estas matura homo.* (2) *La infano jam ne ploras.* (3) *La suno brilas.* (4) *Jen estas la pomo, kiun mi trovis.* (5) *La dentoj de leono estas akraj.* (6) *La bela sonĝo de l'homaro.*

【譯】 (1) 赤ん坊は成人ではない。(2) あの赤ん坊はもう泣いては居ない。(3) 太陽（太陽は一つに定まつて居る故に *la* をつける）が輝いて居る。(4) そこに私が見付けた林檎がある。(5) 獅子の齒は鋭い。(6) 人類の美しい夢。

【注意】 尙ほ韻文の場合には平仄の都合上名詞の語尾（單數主格の場合に限る）を省略して略符'を附することがある。

（前篇第三章ザメンホフ十六ヶ條の文法規則第十六條参照）

Por eterna ben' efektivigos. 永遠の福祉が實現する爲めに。
といふが如き夫れである。

第二節

代名詞 pronomo

1. 代名詞は名詞の代りに用ゐる。即ち次表の如し。

	單數	複數
第一人稱	mi 私	ni 私達
第二人稱	vi(ci).あなた(お前)	vi あなた方
第三人稱	男性 li 彼 男	ili 彼等、夫れ等
	女性 ŝi 彼女	
	中性 ĝi 夫れ	
再歸稱	si 自身	si 自分達
	oni 人、世人	oni 人々、世人達

2. ci は年下の者又は極めて親しい者の間に限り用ゐる。

3. ĝi は動植物、無生物又は赤ん坊等特に性を區別する必要な場合に用ゐる。

4. 代名詞の所有格は上記の各代名詞に a を附してつくる。同目的格は n を添へてつくる。

mia patro. 私の父

Li batas ŝin. 彼は彼女を打つ

5. oni は誰れと定まつたものなく、唯廣く一般に世間の人々を指す場合に用ゐる。

Oni diras, ke la vero ĉiam venkas. 眞理は常に勝つと人はいふ。

6. oni は單數にも複數にも用ゐられる。

Kiam oni estas riĉa (或は riĉaj), oni havas multajn amikojn. 人は富んで居る時は友が多いものだ。

7. oni は主格として用ゐるだけで目的格又は所有格となることはない。onin 又は onia といふ語はない。

8. 再歸代名詞、si の用法は特に注意する必要がある。si は性及び數の區別がない。

9. si は三人稱の場合丈けに用ゐられる。一人稱二人稱にはその要がないからである。例へば

Mi amas min (mem) 私は私自身を愛する。

Ni amas nin (mem). 吾々は吾々(自身)を愛する。

Vi amas vin (mem). あなたはあなた(自身)を愛する。

に於いては意味に不明な點がないけれども

Li amas lin. 彼は彼を愛す。

Ŝi amas ŝin. 彼女は彼女を愛す。

では愛される彼なり彼女なりは愛する彼又は彼女と同一人であるのか、それとも別の人なのか解からなくて意味の不明をきたす。そこでエスペラントでは上の例の如き場合に愛する人と愛される人と同一人なる時、即ち再び主格に歸つてそれと同一人を……といふ時には *si* を用ゐるのである。だから再歸形の代名詞といふのである。

10. *si* は *n* をつけて目的格にするか又 *a* をつけて形容詞となすこともある。

La patro kun lia filo admiras in 父はその息子と共に自分をほめた。

La infano donis al la leono sian manon. 赤ん坊は獅子に自分の手を出した。

11. *si* は常に主語となることはない。*sia* も主語に冠することはない。

La patro kaj lia (sia ではない)filo vizitis lin.

父とその息子とは彼を訪問した。

12. 次の二文章を比較せよ。

Taro vidis Saburo'n kaj lian fraton. 太郎は三郎と三郎の兄弟とを見た。

Taro vidis Saburo'n kaj sian fraton. 太郎は三郎と太郎の兄弟を見た。

13. *unu* が代名詞の如く用ゐられることがある。

Ili interparolas unu kun la alia. 彼等は互に(即ち一は他の者と)話し合つて居る。

El ŝiaj infanoj, unuj estas bonaj kaj aliaj estas malbonaj. 彼女の子供達の中で一部分は善良だが他は不良だ。

(1) Li amas min, sed mi lin ne amas.

(2) Mi volis lin bati, sed li forkuris de mi.

(3) Diru al mi vian nomon. (4) La tranĉilo

tranĉas bone, ĉar ĝi estas akra. (5) La infano ploras, ĉar ĝi volas manĝi. (6) Mi batis min (mem.) Vi batis vin (mem.) Li batis lin. Li batis sin (mem). Ŝi batis sin (mem).

(7) Mia frato diris al Stefano, ke li amas lin pli, ol sin mem. (8) La infano serĉis sian pupon; mi montris al la infano, kie kuŝas ĝia pupo.

【譯】(1)彼れは私を愛する、併し私は彼を愛しない。(2)私は彼を打たうと欲した、しかし彼は私の所から逃げていつてしまつた。(3)お名前を言つて下さい。(4)この小刀はよく切れるそれは鋭いから。(5)あの子は食べたがつて泣いて居る。(6)私は私(自身)を打つた。君は君(自身)を打つた。彼(甲)は彼(乙)を打つた。彼は彼(自身)を打つた。彼女は彼女(自身)を打つた。私の兄弟はステファノに言つた、彼(兄弟)は彼(ステファノ)を彼(兄弟自身)よりよけいに愛すると。(8)其の子は自分の人形をさがして居た、私はどこに其の(子供の)人形があるか教へてやつた。

第 三 節

數 詞 Numeralo

1. 基礎となる數詞は次の如くである。

unu 一、du 二、tri 三、kvar 四、kvin 五、ses 六、

Sep 七、ok 八、naŭ 九、dek 十、cent 百、mil 千

2. 十以上の數は單に基礎數詞を組合はせてつくること日本語に於けると同じい。

dekunu 十一、dekdu 十二、dektri 十三、dudek 二十、dudek kvar 二十四、cent kvindek ses 百五十六。

3. 百萬以上の數を表はすには miliono (百萬) biliono (十億)を用ゐる。

4. 順序數は形容詞の語尾 a をつけてつくる。

unua 第一の、dua 第二の

5. 數詞に語尾を附して名詞及び副詞をつくることが出来る。

unu 一個、單位。duo 一對。

dekduo 一ダース、du dekduoj 二ダース。

unue 第一に、最初に、due 第二に、次に。

6. 分數は接尾字 on を附してつくる。

duono 二分の一(名詞)

duona 半分の(形容詞)

duone 半分に(副詞)

du trionoj 三分の一

kvar kaj kvinono 四個五分之一。

ses kaj sep okonoj 六個八分之七。

7. 小数の読み方は例へば

0.125 は nulo punkto unu du kvin.

3.46 は tri punkto kvar ses.

8. 倍数は接尾字 *obl* を付けてつくる。

duoblo 二倍(名詞)

duobla 二倍の(形容詞)

duoble 二倍(副詞)

9. 集合数は接尾字 *op* をつけてつくる。

duopo 二つ一所(名詞)

duopa 二つ一所の(形容詞)

duope 二つ一所に(副詞)

10. 分別(即ち幾つづつといふ時)には前置詞 *po* を用ふ

po tri pomoj 林檎三つづつ。

po kvar homoj 四人づつ。

(1) Dekunu. dekdu. dudektri. kvardek-
kvin. cent sesdek sep. okmil naŭcent sesd-
ek kvar. (2) Unua. dua. tria. dekdua. (3)

Duono. duona. duone. triobla. trioble. kva-
ropo. kvaropa. kvarope. (4) Du trionoj.

Ses seponoj. (5) Mi havas nur unu buŝon,

sed mi havas du orelojn. (6) Kvin kaj

sep faras dek du. (7) Morgaŭ estas

la dua lundo de la Monato. (8) Janua-

ro estas la unua monato de la jaro, Ap-

rilo estas la kvara. (9) La sepan tagon

de la semajno Dio elektis, ke ĝi estu pli

sankta, ol la ses unuaj tagoj. (10) Hodi aŭ

estas la dudek sepa (tago) de Marto. (11)

Kvinoble sep estas tridek kvin. (12) Tri

estas duono de ses. (13) Tiu ĉi libro havas

sesdek Paĝojn; tial, se mi legos en ĉiu ta-

go *po* dek kvin paĝoj, mi finos la tutan

libron en kvar tagoj.

【譯】(1)十一、十二、二十三、四十五、百六十七、八

千九百六十四。(2)第一の、第二の、第三の、第十二の、
 (3)二分の一、二分の一の、二分の一に、三倍の、三倍
 に、四ツ組 (四つ一所)、四ツ組の (四つ一所の)、四ツ組
 に、(四つ一所に)。(4)三分の二、七分の六。(5)私はた
 だ一つの口を有つて居る、しかし私は二個の耳を有つて
 居る。(6)明日は此の月の第二月曜日である。(7)五と七と
 で十二になる。(8)一月は年の第一の月である、四月は第
 四の月である。(9)週の第七の日を神様は最初の六日より
 一層神聖なものに選んだ。(10)今日は三月の二十七日で
 ある。(11)七の五倍は三十五である。(五七三十五)。(12)三
 は六の二分の一である。(13)この本は六十頁ある、それ
 故に若し私が毎日十五頁宛読むこととせば全冊を四日間
 で読み了るでせう。

第 四 節
 相 關 詞

1. 相關詞とは不定、疑問、指示、汎稱、否定を表はす
 代名詞的、形容詞的、副詞的助辭の一團であつて其の語
 形及び意義に於いて一定の聯絡あるやうにつくられたも
 のである。即ち次の如くである。

(i) 不定	io	io	ia	ies	ie	iel	ial	iam	iom
	(或事 或物)	或人 或	或種 の	或人 の	或所 で	どうか し	或理由 で	何時 か	いくら か
(ki) 疑問	kio	kiu	kia	kies	kie	kiel	kial	kiam	kiom
	(何事 何物)	誰 何れ	如何 なる	誰れ の	何處 で	如何 に して	何故 に	何時	如何 程
(ti) 指示	tio	tiu	tia	ties	tie	tiel	tial	tiam	tiom
	(其事 其物)	其の 人	そん な	其の 人 の	其處 で	其様 にして (非常に)	其れ 故に	其の時	其れ 丈
(ci) 汎稱	cio	ciu	cia	cies	cie	ciel	cial	ciam	ciom
	(總て の事 物)	各 人 各 の	あ ら ゆ る	各 人 の	各 所 で	各 様 に	各 種 の 理 由 で	常 に	悉 皆
(neni) 否定	nenio	neniu	nenia	nenies	nenie	neniel	nenial	neniam	neniom
	(何事 も... ない)	何人 も... せぬ	如何 なる も... ない	誰の も... ぬ	何處 に... ぬ	どうか し... ぬ	如何 なる 理 由 も... ぬ	何時 に... ぬ	少し も... ない

2. o に終るものは指示代名詞的の働きをなすもので事物を(概括的に)表す。

3. u に終るものは二通の用法がある。第一の用法は代名詞的の働きをなすものであつて人又は物を(個々に具體的に)表はす。第二の用法は形容詞的に用ゐられる場合である。數、格の變化は名詞形容詞に同じい。

Kiu estas tiu? 誰れですか其の人は(代名詞用法)。

Tiu libro estas mia. 其の本は僕のです(形容詞的用法)。

4. a に終るものは性質又は種類を表はし、常に形容詞的に用ゐられる。數、格の變化も全く形容に於けると同詞じい。

5. 不定詞、疑問詞及び汎稱詞に *ajn* をつけば無差別を示し、もしくは其の意味を強めることになる。

io ajn 何でも、*kiu ajn* 誰れでも……か?

ĉiu ajn 何人でも(此の場合の *ajn* は意味を強める役目をなす)

Kiu ajn li estas, li devas morti. 彼が誰であらうとも死ななければならぬ。

6. 疑問詞は關係代名詞若しくは感嘆の文に用ゐられる。

La homo, kiu min vizitis hieraŭ, estas mia malnova amiko. 昨日私を訪ねて來た人は私の舊友です。

Kia ĝoja festo! 何とおめでたいことで!

7. 指定詞に *ĉi* を添へれば(此の時には指定詞の前後何れに置いてもよい) 近接を示す。

tie 其處に、*ĉi tie* (或は *tie ĉi*) 此處に、

8. *es* の附くものは形容詞的意味を有つものであるが一般の形容詞のやうに複數の *j* 又は目的格の *n* をとることとはない。*ties* の代りに通常三人稱代名詞に *a* を附したものが多く用ゐられる。

Mi renkontis multajn fraŭlinojn, kies vestoj estis tre belaj. 私は澤山の娘たちに行遇つた。その娘達の着物は大層美しかつた。

Lia domo 其人の家 (*ties domo* とは普通云はない)

(1) *Ia amiko vin helpos. Mi havis ian ideon, kiel ĝin fari.* (2) *Ial li subite forlasis Londonon.* (3) *Kiam ajn vi povos min viziti, estos konvene al mi. Venu hodiaŭ.*

ĉar iam morgaŭ estos tro malfrue. (4) Mi
 ne povis trovi mian libron ie en la ĉambro.
 Ĉu vi metis ĝin ien? (5) Iel li sukcesas en
 ĉio. (6) Ies perdo ne estas ĉiam ies gajno.
 (7) Io estis sub la tablo, sed mi ne povis
 vidi ion tie. Morgaŭ mi sendos al vi ion
 belan. Li vidis ion, kion li tre amis. (8)
 Mi komprenas iom tion, kion vi volas diri.
 La vetero estas iom pli varma. (9) Ĉu iu es-
 tas tie? (10) Ĉiu aĝo havas siajn devojn.
 Mi konis ĉiun viron, kiun mi renkontis. (11)
 Kial vi silentis? Ĉial tio estas la plej bona.
 (12) Mi ĉiam respondas al viaj leteroj. Ĉiam
 skribu legeble. Ĉiam pripensu antaŭ ol vi
 parolas. (13) Ĉie mi trovis amikojn. Akvo,
 akvo ĉie, sed eĉ ne unu akvero por trinki.
 (14) Ni helpos la lernantojn ĉiel. (15) Ĉies

ideo estas diversa.

【譯】 (1) 或る誰か知ら友人が君を助けるであらう。私
 は夫れを如何にして爲すべきかといふ或る考へを有つて
 居た。(2) 或る理由で彼はすぐロンドンを去つた。(3) 何時
 君が僕を尋ねて來やうと僕には差支ない(都合がよい)。
 今日來給へ、明日になると明日はどんな時もあまり遅い
 から。(4) 私は私の本を室の中の何處でも見付けることが
 出来なかつた。君は夫れを何處かへ置いたのですか。(5)
 何とかして彼は萬事に成功します。(6) 或人の損失は何時
 でも或人の利得ではない。(7) 何かが卓子の下にあつた、
 しかし私は其處に何も見ることは出来なかつた。明日は
 私は君に何か知ら美しいものを送らう。彼れは何か知ら
 彼れが非常に好きなものを見た。(8) 私は何を君が言はう
 として居るかを幾らか了解して居る。天氣は多少暖かで
 す。(9) 誰かそこに居ますか。(10) 各の歳は其れ自らの
 義務を有つて居る(年齢に應じて夫々すべきことがある)。
 私は自分が逢つた男を皆知つて居る。(11) 何故君は黙つて
 居たか。あらゆる理由からそれが最もよい。(12) 私はい
 つでも君の手紙に返事する。いつでも讀める様に書いて
 呉れ。いつでも君は話す前によく考へるがよい。(13) 到

る處私は友人を見出した。水、水は到る處にある、しかし飲むべき水は一滴もない。(14)吾々はあらゆる仕方で學生を幫助しよう。(15)各人の考へは區々である。

(16) Ĉio havas lokon propran, tial metu ĉion en ĝian propran lokon. (17) Ĉio, kion mi havas, estas ankaŭ (la) via. (18) Preskaŭ ĉiu amas sin mem. Mi legis ĉion zorge antaŭ ol mi ĝin sendis al li. El ĉiuj miaj amikoj, li estas la plej bona. Ŝi legis ĉiun libron, kiun ŝi povis ricevi. (19) Kia lingvo ĝi estas! Kian leteron vi skribis? Kiaj ĉarmaj infano estas la viaj! Kiajn belajn mi legis! (20) Kial vi ne skribis al li? Kial vi ne venos al nia kunveno? (21) Kiam ni iros Londonon? Kiam ni estos finita nian laboron? (22) Kie estas la poŝtoŝeĵo? (23) Kiel vi elparolas "aŭ"? Kiel "ow"?

en la lingvo angla. (24) Kies libro estas tiu ĉi? Kies plumon vi uzas? Mi vidis kampon, en kies mezo staris du arboj. (25) Kio iras rapide? La tempo. Kion li volis montri al vi? (26) Kiom da ĉevalo estis tie? Kiom kostas tio? Je kioma horo vi venos al mi? (27) Kiu parolas Esperanton? Kio estas la tago de la semajno? Kion vi bezonas? La libron, kiun vi pruntos al mi. (28) Nenia antaŭa sperto estas necesa. Mi estis havinta nenan antaŭan sperton. (29) Li neniam ĉesis skribi al mi. (30) Mi neniam skribas longan leteron. Mi neniam aĉetas malkarajn librojn.

【譯】 (16) 凡ての物は固有の位置を有つて居る其れ故に凡ての物を其の固有の位置に置け。(17) 私が有て居る凡ての物は又君の物である。(18) 殆ど凡ての人は自分自

身を愛する。私は夫れを彼れに送る前に凡てを注意して讀んだ。凡ての私の友達の中で彼は最も善良である。彼女は彼女の受取り得る限りの凡ての本を讀んだ。(19)まあ何たる言語でせう！ どんな手紙を君は書きましたか。まあ何といふ可愛い御子達でせうあなたの御子達は！ まあどんなに美しい本を私は讀んだこととせう！

(20)何故君は彼れに手紙を書かなかつたか。何故君は吾々の會に来ないのか。(21)何時吾々はロンドンへ行くことになりますか。何時吾々はこの仕事を終へるだらうか。(22)郵便局は何處にありますか。(23)“au”を如何に發音しますか。英語の“ow”の如くします。(24)是れは誰の本ですか。誰のペンを君は使つて居ますか。私は野原を見てゐた、其の中に二本の樹が立つて居た。(25)何が速に去りますか。時が。何を彼は君に示さうとしましたか。(26)何匹の馬がそこに居ましたか。其れは幾何錢ですか。何時に君は僕の所まで來ますか。(27)誰れがエスペラントを話しますか。一週間の日は何々ですか。何を君は要求して居るのですか。君が僕に貸さうとする本を。(28)如何なる是迄の經驗をも要しない。私は是れ迄如何なる經驗もしなかつた。(29)彼れは決して私に手紙

をかくことを止めなかつた。(30)私はいつでも長い手紙を書かない。私はいつでも廉い本は買はない。

(31) Nenie oni min komprenis. Nenie oni povis trovi mian hundon. (32) Ĝi neniel povis kompreni tion, kion li skribis en alia lingvo. Sen Esperanto li neniel povis komprenigi sin. (33) Ies devo estas nenies (devo). (34) Nenio estas preta. Ĉu vi havas nenion por diri al mi? (35) Li havas neniom. (36) Neniu estis apud la pordo. Neniu parolas al mi. Ĉu vi nenium vidis tie, kiun vi konis? Mi nenium vidis ĉe vi. (37) Tia ripetado enuas min. En tiaj okazoj ĉiam mankas io. Mi neniam vidis tian aferon. (38) Ĉar li ne respondas al vi, ne kredu, ke li ne volas respondi; tial mi al vi konsilas reskribi al li. (39) Tiam ni povos iri al

la kunveno. Mi vizitos vin tiam, kiam vi estos preta. (40) Tie vi trovos multe da amikoj. Mi iros tien, kiam mi ricevos vian leteron. Miaj amikoj loĝas tie ĉi. Ĉu viaj fratoj venos tien ĉi? (41) Se estus tiel, vi devus skribi al li. Mi sentas min tiel malfeliĉa, ke vi devus reveni. Kiam vi skribis tiel? (42) Mi neniam prenas ties konsilon. (43) Ĉu vi parolas pri tio? Mi neniam aŭdis tion. Tio ĉi estas malkredinda. Vi devus memori tion ĉi. (44) Tion estas malfacile memori. (45) Mi loĝis en tiu urbo. Ĉu mi montris al vi tiun leteron? Kie kreskas tiuj floroj? Ĉu vi ricevis tiujn librojn? Tiu ĉi ringo estas por vi. Mi neniam forgesos tiun ĉi regulon. Tiuj ĉi hundoj estas tre grandaj. Mi aĉetos tiujn ĉi librojn.

【譯】 (31)何處へ行つても人は私を理解して呉れなかつた。何處にも私の犬は見あたらなかつた。(32)彼れが他の言語で書いたものを彼女はどうしても理解することが出来なかつた。エスペラントなしでは彼れはどうしても自分を了解させることは出来なかつた。(33)或る人の義務は或る(他の)人の(義務)ではない。(34)何も準備せられてゐない。君は何も私に話すことはありませんか(35)彼れはすこしも有つて居ない。(36)戸の傍に誰れも居なかつた。何人も私に話さない。君はそこで君の知人を誰れも見なかつたか。私は君の所で誰れにも逢はなかつた。(37)その様な反覆は私を倦ましめる。その様な場合には何時でも何かが缺乏して居る。私はいまだかつてそんな事件を見たことはなかつた。(38)彼れが君に返事しないからとて、彼れが返事することを欲しないのだとは信ずるな、だから私は君に忠告する、彼に再び手紙を書く様にと。(39)其の時に私達は會合に行くことが出来るでせう。私は君の都合のいい時(準備の出来た時)に訪問しませう。(40)其處に君は多數の友人を見出すでせう。私は其處へ行きます、私があなたのお手紙を受取つたらその時に。私の友人達は此處に住んで居る。君の兄弟達

は此處へ來るでせうか。(41)若しさうならば、君は彼に手紙を書かなければなるまい。私は自分を非常に不幸に感じます、ですから君は歸つて來なければなるまい。何時君はその様に書いたのですか。(42)私はいつでも其の人の忠告を受入れない。(43)君は夫れについて話しますか。私は決してそんなことを聞いたことはなかつた。此れは信すべからざることだ。君は此れを記憶して居るに違ひないだらうに。(44)それ程記憶するに困難だ。(45)私は其の市に住んで居た。私は君に其の手紙を見せましたか。その花はどこに生えますか。君は其れ等の本を受取りましたか。此の指輪は君の爲め(につくつたもの)である。私は決して此の規則を忘れないでせう。是等の犬は非常に大きくある。私は是等の本を買ひませう。

第五節

接續詞 Konjunkcio

1. 接續詞は語又は文の部分をつなぐ用をなすものである。其の主なるもの次の如し。

aŭ 或は、又は

kaj と、及び

do	それで、さて
dum	…する間に
ĝis	…する迄に
ju pli…des pli	…すればする程益々…
ĉar	…するが故に、何となれば…
ke	…すると、…すること
kvankam	…と雖も、けれども
ne…nek	…も…せず
ol	…よりも(比較)
se	…若しも…ならば
sed	併し乍ら
tamen	それでも、しかし

【注意】 dum, ĝis は又前置詞としても用ゐられる。

2. 副詞又は其の他の語が接續詞として用ゐられる場合がある。

alie	然らざれば
apenaŭ	…かしないかに…や否や
antaŭ ol	…より前に
ĉu	…か、どうか
dume	其の間に

eĉ se	假令…とも
ĝis	…まで、…して後初めて
ĵen…ĵen…	…或は…或は…
kiam	する時に
kiel	…の如く、…として
kiel ankaŭ	並に…
kiel ekzemple	例へば
kiel se = kvazaŭ	殆んど…であるかの如くに
kiom	だけ
konsekve	従つて
kontraŭe	反對に
krom tio	その外に
kvazaŭ	…かの如くに
malgraŭ ke	…するに拘らず
ne nur…sed…	のみならず又
ne sole…sed…	のみならず又
nome = tio estas (t.e.)	即ち
plie	其の上に、更に、尙又
por ke	…せんが爲めに
se ne	然らずんば

se tamen	假令…とも、とは云へ
sekve	従つて
tial	それ故に
tial ke	…する故に…の理由で
tio estas = t.e.	即ち、それは
tuj kiam	…するや否や、するとすぐ

(1) Ne riproĉu vian amikon, ĉar vi mem pli multe meritas riproĉon; li estas nur unufoja mensoginto, dum vi estas ankoraŭ nun ĉiam mensoganto. (2) Ju pli mi lernis, des pli mi interesiĝis. (3) Kvankam vi estas riĉa, mi dubas, ĉu estas feliĉa. (4) Mi ne scias la lingvon hispanan, sed per helpo de vortaro hispana-germana mi tamen komprenis iom vian leteron. (5) Ĉiu homo, ĉu li estas juna, ĉu maljuna, ne povas legi tiun libron sen larmoj. (6) Mi parolis kaj parolis, ĝis li plene konvinkiĝis. (7) Lia ka-

nto sonis jen ĝoje, jen korŝire. (8) Li ne sole ŝtelis, sed mortigis homon. (9) Li parolis, kvazaŭ li scias ĉion.

【譯】(1)君の友達を批難し給ふな、何となれば君自身は一層多く批難に値するから、彼は唯一回丈の虚言つきであるが君は未だ今でも相不變虚言つきなんだ。(2)私は學べば學ぶ程、益々面白くなつた。(3)君は富んで居るけれども僕は君が果して幸福であるかどうか疑ふ。(4)私は西語を知らない、しかし私は西獨辭典の助けを借りて幾らか君の手紙を理解し得た。(5)誰れでもそれが若いと年老つて居るとに論なく其の本を涙なしで讀むことは出來ない。(6)私はよつくくりかへし話した、彼れが全く納得する迄。(7)彼れの歌は或は嬉しく或は心を引裂く様に響いた。(8)彼は單に盗んだ丈けでなく又人殺をした。(9)彼は恰も自分が何でも知つて居るかの如く話した。

第六節

副詞的助辭

普通の副詞は語尾に e がつくものであるが、茲に其の外、特別の副詞的助辭がある。副詞的助辭は其の意味か

ら言へば普通の副詞と全く同様であるが、其の形は一定しないものである。

次に擧ぐるものは副詞的助辭である。

ajn	よしや…でも
almenaŭ	少くとも、せめて
ambaŭ	双方、兩方
ankoraŭ	猶ほ、未だ
apenaŭ	殆んど…ない、辛じて、やつと
baldaŭ	やがて、ちきに、程なく
bis	もう一度
ĉi	(近接を表はす tie ĉi, ĉi tie).
ĉirkaŭ	約、凡そ
ĉu	(疑問)
do	されば、かるが故に、依つて
eĉ	さへ、すら
for	あちらへ
hieraŭ	昨日
hodiaŭ	今日
ja	實に、全く…こそ
jam	もはや、既に

jen	そらここに
jes	然り
jus	たつた今、丁度
kvankam	恰も、まるで
mem	自身
morgaŭ	明日
ne	否
nun	今、今や、さあ、さて
nur	たつた…だけ、にすぎず
plej	最も
pli	一層
plu	さらに進んで、もつと
preskaŭ	殆んど
tamen	とはいふものの
tre	甚だ
tro	あまりに
tuj	すぐに

【注意】 相關詞中の -el, -al, -am, -om 等のつくものも性質上副詞的の助辭であるが相關詞の節で説明したから茲には改めて説かない。

第七節

前置詞 Prepozicio

al	に、へ(方向)、誰々の處へ
anstataŭ	の代りに
antaŭ	の前に(場所、時間)
apud	の傍に(位置)
ĉe	の所に、に於て、(空間の一點)、…するに當つて
ĉirkaŭ	の周圍に、の頃、ばかり(程度)
da	の(數量を表はす語の後に來る)
dank' al	のお蔭で
de	の、から(時間、空間)誰々によつて
dum	の間(時間)
ekster	の外に(外方)、のほかに(除外)
el	より(内より外へ)、にて(材料)、の 中で
en	の内に、に於いて
ĝis	まで
inter	の間に(物と物との)

je	(意味不定)
kontraŭ	に對して、に反して
krom	の他に、の以外に (添加)
kun	と、と共に、(そのやうな風)をして (状態)
laŭ	に従ひて、に據つて
malgraŭ	に拘らず
per	を以て、にて (用具、用材)
po	(いくつ) づつ、の割合で
por	の爲めに(目的)、に取つては
post	の後 (場所、時間)
preter	の傍を過ぎつて
pri	に就いて、に關して
pro	の爲めに (原因)
sen	なしに
sub	の下に
super	の上に (上方)
sur	の上に (表面)
tra	を通して、ぢうに
trans	の彼方に、を越えて

【注意】 je は他に適當な前置詞の見當らぬ時用ゐる、但し je を用ゐる代りにその次の語に n を附して目的格の形としてもよい、次の例題 (3) (4) を参照せよ。

(1) Li sidas apud la tablo. Li sidas ĉe la tablo. Li iris preter la tablo. (2) Mi aĉetis centon da pomoj. Jen estas la libro de mia patro. (3) Kiu okupas sin je meĥaniko, estas meĥanikisto, kiu okupas sin je ĥemio, estas ĥemisto. (4) Ĝlaso de vino estas glaso, en kiu antaŭe sin trovis vino, aŭ kiun oni uzas por vino; glaso da vino estas glaso plena je vino. (5) La tero estas kovrita per neĝo. La letero estas skribita de mi. (6) Mi aĉetis por la infanoj tableton. Por kio ni kunvenas? Ni venis pro serioza afero. Ili laboras pro malriĉo. Ŝi laboras por pano.



【譯】(1)彼れは卓子の傍に坐つて居る。彼れは卓子に就いて坐つて居る。彼れは卓子の傍を通つて行つた。(2)私は百個の林檎を買つた。そこに私の父の木がある。(3)器械の事にたづさはつて居る人は器械師である。化學にたづさはつて居る人は化學者である。(4)glaso de vino(葡萄酒の杯は) 其の中に以前葡萄酒が入つてゐるか、或は其れを人が葡萄酒用に使つて居るかするところの杯のことである、glaso da vino(葡萄酒一杯)とは葡萄酒が杯に一ぱい分である。(5)地面は雪で掩はれて居る。その手紙は私によつてかかれた(私が書いたものだ)。(6)私は子供達の爲めに小机を買つた。何の爲めに吾々は會合するのか。吾々は重大な事件の爲めに來たのだ。彼等は貧乏の爲めに働らく。彼女はパンの爲めに働らく。

第八節

間投詞 Interjekcio

1. 間投詞は感情を表はす詞であつて、單獨に又は他の語句の内に投入して用ゐられる。

fi! (淫蕩、嫌惡) チエツ

ha! (輕き驚嘆) ハア、オヤ、マア

he! (驚嘆、呼掛)、ヘー、モシ

hej! (呼掛) オーイ

ho! (驚嘆) オ、ア、

hura! (喜悅、喝采)、ハンザイ、イヨーステキ、

チエースト

nu! (發聲) サア、サテ、ヨシ

ve! (悲嘆、苦痛)、ア、悲しや、アアア

2. 副詞その他の詞が間投詞として用ゐられる場合も少くない、次の例の如し。

adia! (告別)、左様なら アバヨ

bone! 善哉、ヨシ

for! あつちへ行け

helpon! 助けてくれ

jes! 然り、左様々々

ne! 否々、ノーノー

tute ne! 決して、いやどして

kompreneble! 勿論

第六章

造語法 Vortfarado

第一節

語尾の添附

1. 少数の語を記憶して之を自由自在に活用して多くの用を辨ずるのはエスペラントの特色で、その學習の容易である原因はここにもあるのである。

2. 造語法を分つて五つとする、即ち次の如くである。

1. 語尾の添附
2. 語根の連結
4. 接頭字及び準接頭字の添附
4. 接尾字の添附
5. 外來語の轉用

1. 語尾の添附

語根には意義の許す限り各種の語尾を添附して異なる意義を表はすことが出来る。

-o, -a, -e, -j, -n,

-as, -is, -os, -us, -u, -i

-ant, -int, -ont, -at, -it, -ot,

(1) Lia kolero longe daŭris. (2) Li estas hodiaŭ en kolera humoro. (3) Li koleras kaj insultas. (4) Li fermis kolore la pordon. (5) Lia filo mortis kaj estas nun malviva. (6) La korpo estas morta, la animo estas senmorta. (7) Li estas morte malsana, li ne vivos pli ol unu tagon. (8) Li parolas, kaj lia parolo fluas dolĉe kaj agreable. (9) Ni faris la kontrakton ne skribe, sed parole. (10) Li estas bona parolanto. (11) Starante ekstere, li povis vidi nur la eksteran flankon de nia domo. (12) Li loĝas ekster la urbo.

【譯】 (1)彼れの怒りは長く續いた。(2)彼れは今日は怒氣を帯びて居る。(3)彼は怒つて居る、そして罵つてゐる。(4)彼れは怒つて戸を閉めた。(5)彼れの息子は死んで今やこの世にはゐない。(6)肉體は死すべきものであるが、靈魂は不滅である。(7)彼は危篤である、彼は一日より長く

は生きないだらう。(8)彼れは話して居る、彼の辯はうまく且つさはやかに流れるやうだ。(9)吾々は書面ではなく口頭で契約をした。(10)彼れは善き話し手である。(11)外に立つてゐるので彼れは吾々の家の外側を見ることが出来たのみである。(12)彼れは市外に住んで居る。

【注意】 多くの助辭及び接頭字接尾字等も之に語尾を附して別個の獨立語とすることが出来る。

(13)Unuo, duo, dekduo. (14)Kialo, tioma, ĉiele. (15)Hodiaŭa, jene, jesi, neo. (16)Apuda, ekstero, poste. (17)Hovea vetero. (18)Geoj, male, ree. (19)Aro, inda, eble.

【譯】 (13)一個、一對、一ダース。(14)理由、幾らかの、凡ての手段で。(15)今日の、次に、肯定すること、否定。(16)傍の、外部、後に。(17)オオ嫌な天氣。(18)男女、反對に、再び。(19)團體、價值ある、恐らく。

第二節

語根の連結

1. 二個以上の語根を連結して一語となすことが出来る
この場合には主要な語が後に来る。

2. 連結して出来た語の發音に若し不便があつたり又は意味を特に明示する必要あるときは連結される語根の間に適當な語尾を挿む。普通 *o* を挿入する場合が最も多い。

(1) Fervojo, pcŝiorleĝo, antaŭparolo. (2) Lernolibro, mangoĉambro, Anglo'ando. (3) Multekosta, ĝustatempe, supreviri.

【譯】 (1)鐵道、懷中時計、序言。(2)教科書、食堂、英國。(3)高價な、丁度よい時に、登ること。

第三節

接頭字並に準接頭字の添附

1. 一定の語根の前に冠して新しい語を造ることが出来る。これを接頭字といふ。

2. 準接頭字とは本來は前置詞又はその他の品詞であるがそれを恰も接頭字の如く使用するから斯くいふのである。

1. 接頭字

bo-	姻族關係	eks-	前の、先の
dis-	分散	ge-	男女兩性
ek-	發端	mal-	反對

pra-	時間的に遠き意	vic-	次位
re-	復、再、歸		

2. 準接頭字

al-	對向、添加	ne-	非、不、否
de-	離去、由來	sen-	無
el-	外へ、完了	sin-	自己を
en-	内に、内へ	sub-	下に
for-	あちらへ、去る	sur-	上に、表面に
kun-	共に	tra-	通過、擴充

(1) Bopatro, disdoni, ekiri, eksministro, gefratoj, malbona, praavo, reveni, vicprezidanto. (2) Alveni, aldoni, demeti, deveno, eltiri, eluzi, eniri, forkuri, kunveno, ueblanka, sensenco, sindoni, subakviĝi, surkovri, tralegi, tralerni. (3) Li estas tiel dika, ke li ne povas trairi tra nia mallarĝa pordo. (4) Ĉiuj parencoj de mia edzino estas miaj boparencoj, sekve ŝia frato estas mia bofr-

ato, ŝia fratino estas mia bofratino; mia frato kaj fratino (gefratoj) estas la bofratoj de mia edzino. (5) Du ekbriloj de fulmo trakuris tra la malluma ĉielo. (6) Mi disŝiris la leteron kaj disĵets ĝiajn pecetojn. (7) Ni ĉiuj kunvenis, por preparoli tre gravan aferon; sed ni ne povis atingi ian rezultaton, kaj ni disiris. (8) Mi foriras, sed atendu min, ĉar mi baldaŭ revenos.

【譯】(1)舅、分ち與へること、出發すること、前大臣、兄弟姉妹、悪い、曾祖父、歸ること、副議長。(2)到着すること、附加すること、取除けること、由來、引用すること、用る盡すこと、這入ること、逃げ去ること、會合、白くない、無意味、貢獻すること、沈むこと、覆ひ被せること、通讀すること、習得すること。(3)彼れは非常に肥つて居るので内の狭い戸口を通ることが出来ない位である。(4)私の妻の凡ての親戚は私の姻戚である、従つて彼女の兄弟は、私の義理の兄弟で彼女の姉妹は私の義理の

姉妹である。私の兄弟と姉妹(兄弟姉妹)は私の妻の義理の兄弟姉妹である(5)一條の電光の閃きが暗い空を通して走つた。(6)私は手紙を引裂いて其の片々を投げ散らした。(7)吾々凡ては非常に重大なる事件を相談する爲めに集つた、しかし吾々は何等決定に達することが出来ずに解散した。(8)私は去ります(座をはづします)、しかし私を待つてゐて下さい、すぐ歸つて來ますから。

第 四 節

接尾字の添附

接尾字は語根の後に付けて新語を造るに用ゐられるものである。例題について注意深く研究せられたい。

1. 人: —

-an	或る團體の成員	-in	女性
-ĉj	男子愛稱	-ist	職として従事するもの
-estr	首頭	-nj	女子愛稱
-id	子、幼者	-ul	「者」

2. 物: —

-aj	物	-il	道具、用材
-ar	集團	-ing	被挿入物

-ej 場所 -uj 容器、國、樹

-er 分子、個體

3. 性質: —

-aĉ 罵稱 -em 傾向、癖

-ebl 可能 -et 弱小

-ec 性質(抽象的) -ind 價值

-eg 強大 -oz 多、富

4. 行爲: —

-ad 繼續 -ig となる(自動)

-ig となす(他動)

5. 數: —

-obl 倍數 -op 集合數

-on 分數

6. 不定: —

-um 意義不定これの附く字はそれ自身單語として記憶せよ。

(1) Ŝipano, vilaĝano, urbano, loĝantoj. (2) Nikolĉjo, Nikoĉjo, Nikĉjo, Niĉjo, Johonĉjo, Joĉjo. (3) Ŝipestro, urbestro. (4) Reĝdo,

kokido. (5) La edzino de mia patro estas mia patrino. (6) Verkisto verkas librojn, kaj skribisto simple transskribas paperojn. La kuraĝa maristo dronis en la maro. (7) La infano kriis, "Panjo, venu!" (8) Timulo timas eĉ sian propran ombron. Preĝu al la Sankta Virgulino. (9) Bagatelaĵo, sensencaĵo, manĝaĵo. (10) Arbaro, ŝtuparo, militistaro. (11) La kuracisto konsilis al mi iri en ŝvitbanejon. (12) Sablero enfalis en mian okulon. (13) La tranĉilo estas tiel malakra, ke mi ne povis tranĉi per ĝi la viandon kaj mi devis uzi mian poŝan tranĉilon. (14) Kanderingo, piedingo. (15) En la poŝo de pantalono mi portas monujon kaj en la poŝo de mia surtuto mi portas paperujon. (16) La rusoj loĝas en Ru-

sujo kaj la germanoj en Germanujo. (17) Poetaĉo, knavaĉo. (18) Vitro estas travid- ebla kaj rompebla. Via parolo estas tute nekomprenebla kaj viaj leteroj estas ĉiam skribitaj tute nelegebla. (19) La riĉeco de tiu ĉi homo estas granda. (20) Tuj post la hejto la forno estis varmega, post unu horo ĝi estis jam nur varma, post du horoj ĝi estis nur iom varmeta, kaj post tri horoj ĝi estis jam tute malvarma. (21) Lia edzino estas tre laborema kaj ŝparema, sed ŝi estas ankaŭ tre babilema kaj kriema. (22) Via ago estas tre laŭdinda. Tiu ĉi grava tago restas por mi ĉiam memorinda. (23) Arboza, herboza, sabloza. (24) Li paroladis pri esperantismo. (25) En la kota vetero mia vesto forte malpurigis; tial mi prenis

broson kaj purigis la veston. Li paliĝis de timo kaj poste li ruĝiĝis de honto. (26) Bonvolu doni al mi duoban panon. Tri estas duono de ses. (27) Kvinope ili sin ĵetis sur min, sed mi venkis ĉiujn kvin atakantojn. (28) Mia skribilaro konsistas el inkujo, sablujo, plumingo kaj inksorbilo.

【譯】(1)船員、田舎者、市民、住民。(2)ニコルさん、ニコさん、ニクちゃん、ニツちゃん、ヨハンさん、ヨツちゃん。(3)船長。市長。(4)王子、雛鷄。(5)私の父の妻は私の母である。(6)著作家は本を著述する、そして寫字生は單に書類を寫す。あの勇敢なる海員は海で溺れた。(7)赤ん坊が叫んだしお母さん、お出でと。(8)臆病者は自分自ら(固有)の影にすらおびえる。祈れ聖母マリヤに。(9)つまらんこと、無意味なこと、食物。(10)森、梯子階段、軍隊。(11)醫師は私に蒸風呂に行く様にと忠告した。(12)砂粒が私の眼に入つた。(13)ナイフが鈍くて夫れで肉を切ることが出来ない位でしたので、私は私の懐中ナイフを用ゐなければならなかつた。(14)燭臺、燈。(15)私の

ズボンのポケットには私は財布を有つて居る。そして上着のポケットには紙入を有つて居る。(16)ロシア人はロシア國に住み、ドイツ人はドイツ國に(住んで居る)。(17)ヘボ詩人、俄鬼小僧。(18)硝子は透明で壊れやすい。君の話は全く理解しにくい、そして君の手紙はいつでも全く讀めない様に書かれてある。(19)此の人の富は大したものだ。(20)火を焚いた直ぐ後は爐は非常に熱かつた、一時間後には既に唯熱い丈けでした、二時間後にはそれは唯幾らか暖くあつた、三時間後には夫れは最う全く冷くあつた。(21)彼の妻は非常に勤勉であり又節儉である、しかし彼女は又非常にお饒舌でギアギア言ふ質である。(22)君の行は非常に賞讃すべきことである。此重大な口は私に取つては常に記憶すべく残つて居る。(23)樹多き、草多き、砂多き。(24)彼はエスペラント主義に就いて話した。(25)ぬかるみの日に私の着物はひどく汚れた。それで私はブラシを取つて着物を拂つた。彼れは恐れで蒼くなつた、そして後には羞しさで赤くなつた。(26)何卒私に二倍のパンを下さい。三は六の二分の一である。(27)五人一所になつて彼等は私に襲ひかかつて來た、しかし私は五人の攻撃者に打勝つた。(28)私の文房具(文具房一

式)はインキ壺、砂入れ、ペン軸、及び吸取紙とから成立つて居る。

第五節

外來語の採用

1. 同一語源より出で諸國に普く用ゐられてゐる語は綴字法をエスペラント式に改めてエスペラント語として用ゐる。

2. 地名人等の固有名詞は世界的に廣く知られてゐるものは矢張綴字をエスペラント式に改めてエスペラント語としあまり有名でないものは原語のままを用ゐる。此の場合に語尾が其自身エスペラント式になつてゐない時には省略したものと見做して略符號(')を附けるがよい。

3. 外來語採用の方法は母音はそのまゝにとつて發音だけはエスペラント式にし、子音は發音によつてエスペラントの綴字に改めるのである。例へば ph を f, th を t, c を k 又は o とするやうなものである。

(1) Influenzo. Antipirino. Dalio. Kronometro. (2) Europo. Napoleono. (3) Tokio. (4) Jamada.

【譯】(1)インフルエンザ、アンチピリン、ダリヤ、クロノメートル。(2)ヨーロッパ、ナポレオン。(3)東京。(4)山田。

第七章

文例

第一節

普通文

ŜILERO

(M. Wolf)

En juneco¹ la konata² germana poeto³
Ŝilero lernis ludi harpon.⁴ Unu amiko⁵ diris
al li⁶:

—Vi ludas kiel⁷ Davido, sed⁸ ne tiel
bone⁹.

Ŝilero respondis¹⁰:

—Vi parolas¹¹ kiel Salomono, sed ne
tiel saĝe.¹²

【註】 (1)青年時代に、(2)有名な、(3)獨逸の詩人、(4)豎琴を弾くことを學んだ、(5)友人、(6)彼に云つた、(7)のやうに、(8)併し、(9)そのやうによく、その程度に上手に、(10)答へた、(11)話す、云ふ、(12)賢く。

TRI KONKURANTOJ¹

(R. E. Kuhl)

En sama strato² loĝis³ tri tajloroj.⁴ La unua por atentigi⁵ pri sia firmo⁶, elpendigis⁷ super sia vendejo⁸ surskribaĵon⁹:

„La plej bona¹⁰ tajloro en la tuta urbo.¹¹“

La dua, vidante¹², ke¹³ lia najbaro¹⁴ akiras¹⁵ ĉiam kreskantan¹⁶ nombro¹⁷ da klientoj,¹⁸ elpendigis surskribaĵon:

„La plej bona tajloro sur la tuta terglobo.¹⁹“

Tamen,²⁰ la tria atingis²¹ la plej grandan reklamon²² per modesta²³ surskribo:

„La plej bona tajloro en tiu ĉi²⁴ strato.“

【註】 (1)競争者、(2)同じ町に、(3)住んでゐた、(4)仕立屋、(5)注意を引くために、(6)自分の商號に、(7)懸けてをいた、(8)店、(9)看板、(10)最善の、(11)全市中で、(12)見て、(13)…を、(14)隣人、(15)得る、(16)ますます増加する、(17)數、(18)顧客、(19)地球、(20)併し、(21)到達する、とうとう…にまで至つた、(22)廣告を、(23)謙遜な、(24)この町で。

LA NOBLA FARO¹

(Helenjo Bezky)

Unu patro disdonis² la heredaĵon³ inter siaj filoj.⁴ Nur unu multekostan juvelon⁵ li retenis⁶ por donaci⁷ ĝin al tiu,⁸ kiu fariĝos⁹ la pli inda¹⁰. La filoj disiris¹¹ tuj¹². Post tri monatoj¹³ ili revenis,¹⁴ kaj la pli aĝa¹⁵ rakontis,¹⁶ ke tute fremda homo¹⁷ konfidis¹⁸ al li grandan sumon¹⁹ sen ricevatesto,²⁰ kaj ke li tamen redonis²¹ ĝin al la viro.²²

„La faro estas bona,“ respondis la patro,

„sed ne nobla, ĉar²³ esti honeste²⁴ estas
n'a devo.²⁵“

La mezaĝa²⁶ diris: „Mi savis²⁷ infanon,²⁸
kiu falis en lago,²⁹ kaj tiel³⁰ riskis³¹ mian
propran³² vivon.“

„Vi faris,“ respondis la patro, „kion³³
ni, kiel homoj,³⁴ devas fari.³⁵“

La plej juna filo³⁶ diris:

„Mi foje³⁷ trovis³⁸ mian malamikon³⁹ do-
rmanta⁴⁰ ĉe abismo.⁴¹ Lia vivo estis en
miaj manoj.⁴² Mi vekis⁴³ kaj forigis⁴⁴ lin de⁴⁵
la abismo.“

„Via estas la juvelo,⁴⁶ ekkriis⁴⁷ la patro.

„Kiom nobla animo,⁴⁸ kiu faras bonan al
sia malamiko.“

【註】 (1)高尚な行爲、(2)分ち與へる、(3)遺産を、
(4)己れの子息の間に、(5)寶石を、(6)残してをいた。

(7)贈與する爲めに、(8)…するその者に、(9)なる、す
る、(10)價值ある、(11)分散した、(12)直ちに、(13)三
ヶ月後に、(14)歸つてきた、(15)長子が、(16)物語つた
(17)見知らぬ他人が、(18)委託した、信託した、(19)金
高を、(20)受取證、(21)返した、(22)その男に、(23)何
となれば、(24)正直なることは、(25)義務、(26)中の子、
(27)救つた、(28)子供を、(29)湖で、(30)そんなに、
(31)危険を冒した、(32)自己の、(33)…なことを、(34)
人間として、(35)なさねばならぬことを、(36)末の子、
(37)或時、(38)見付けた、(39)敵、(40)眠つてるのを、
(41)深淵の所に、(42)我手中に、(43)起した、(44)行か
せた、(45)から、(46)寶石は汝のものだ、(47)叫び出し
た、(48)精神。

EZOPO

(K. Bein)

Ezopo, la fama aŭtoro¹ de fabloj,² estis
malforta³ kaj malsanema.⁴ Li estis sklavo⁵
de severa⁶ komercisto.⁷ Unufoje⁸ la sinjoro
entreprenis⁹ vojaĝon¹⁰ kaj ĉiu¹¹ el liaj skla-

voj devis ion¹² porti.¹³ Ezopo elektis¹⁴ la pankorbon.¹⁵ La kamaradoj¹⁶ forte miris,¹⁷ ĉar ĝi estis la plej peza ŝarĝo.¹⁸ Ezopo gaje¹⁹ paŝis²⁰ post²¹ la aliaj²² kun²³ la peza korbo sur la dorso.²⁴ Sed kio okazis²⁵? Post la tagmanĝo²⁶ la korbo jam fariĝis malpli peza²⁷, post la vespermanĝo²⁸ ankoraŭ²⁹ malpli, kaj fine³⁰ li portis malplenan³¹ korbon. Tiam³² oni komprenis³³ lian saĝon kaj laŭdis³⁴ lian elekton.³⁵

【註】 (1)著者、(2)寓話、(3)弱い、(4)病身の、(5)奴隸、(6)厳格な、(7)商人、(8)かつて、(9)企てた、(10)旅行を、(11)銘々、(12)或物を、(13)持ち運ばせた、(14)選んだ、(15)パンの籠を、(16)仲間、(17)不思議がった、(18)荷物、(19)愉快さうに、(20)歩いて行つた、(21)後から、(22)外の人達、(23)を持った、をかついだ、(24)背中に、(25)何が起つたか、どうなつたか、(26)晝食、(27)重さが減つた、(28)夕食、(29)もつと、まだ、

(30)終に、(31)空(から)の、(32)その時、(33)了解した(34)賞讃した、(35)選擇を。

LA FEINO¹

(L. L. Zamenhof)

Unu vidvino² havis du filinojn.³ La pli maljuna⁴ etis tiel simila⁵ al la patrino per sia karaktero kaj vizaĝo,⁶ ke ĉiu,⁷ kiu ŝin vidis, povis pensi,⁸ ke li vidas la patrinon; ili ambaŭ⁹ estis tiel malagrablaj¹⁰ kaj tiel fieraj,¹¹ ke¹² oni ne povis vivi kun¹³ ili. La pli juna filino, kiu estis la plena portreto¹⁴ de sia patro laŭ sia boneco¹⁵ kaj honesteco¹⁶ estis krom tio¹⁷ unu el¹⁸ la plej belaj knabinoj, kiujn oni povis trovi.

【註】 (1)妖精、(2)寡婦、(3)娘、(4)姉、一層年をとつた方、(5)似て居る、(6)性質と容貌に於て、(7)彼女を見た人は皆、(8)考へる、(9)兩方とも、(10)非常に氣むづかしい、(11)傲慢、(12)それだから、(13)共に生活す

る、つきあふ、(14)完全な肖像、生きうつしであつた、
すつかり似てゐた、(15)親切、(16)正直、(17)その上に
その外に、(18)の内の一人、(19)人が見出し得る…の、
この世の中で。

Ĉar¹ ĉiu amas ordinare² personon,³ kiu
estas simila al li, tial⁴ tiu ĉi patrino varme-
ge⁵ amis sian pli maljunan filinon, kaj en
tiu sama tempo⁶ ŝi havis teruran malamon⁷
kontraŭ⁸ la pli juna. Ŝi devigis⁹ ŝin manĝi
en la kuirejo¹⁰ kaj laboradi senĉese¹¹. Inter
aliaj aferoj¹² tiu ĉi malfeliĉa¹³ infano devis
du fojojn¹⁴ en ĉiu tago iri ĉerpi¹⁶ akvon en
tre malproksima¹⁷ loko¹⁸ kaj alporti¹⁹ dom-
en²⁰ plenan grandan kruĉon²¹.

【註】(1)…であるので、(2)通例、(3)人を、(4)それだ
から。(5)熱烈に、(6)同時に、(7)恐ろしい憎しみ、(8)
に対して、(9)強ひた、(10)臺所、(11)止みまもなく、
絶えず、(12)外の仕事の間、(13)不幸な、(14)二度、

(15)毎日、(16)汲みに、(17)遠くはなれた、(18)場所、
(19)持ち運ぶこと、(20)を家へ、(21)瓶を。

En unu tago,¹ kiam ŝi estis apud tiu
fonto,² venis al ŝi malriĉa virino,³ kiu petis
ŝin, ke donu al ŝi trinki.⁵ „Tre volonte,⁶
mia bona,⁴“ diris la bela knabino. Kaj ŝi
tuj lavis⁷ sian kruĉon kaj ĉerpis akvon en
la plej pura loko de la fonto kaj alportis
al la virino, ĉiam subtenante⁸ la kruĉon,
por ke la virino povu trinki pli oportune.⁹
Kiam la bona virino trankviligis¹⁰ sian soif-
on,¹¹ ŝi diris al la knabino: „Vi estas
tiel bela, tiel bona kaj tiel honesta, ke mi
devas fari al vi donacon.¹²“ (Ĉar tio ĉi estis
feino, kiu prenis sur sin la formon¹³ de
malriĉa vilaĝa virino,¹⁴ por vidi, kiel gran-
da estos la ĝentileco¹⁵ de tiu ĉi juna kna-

bino). „Mi faras al vi donacon,“ daŭrigis¹⁶ la feino, „ke ĉe ĉiu vorto,¹⁷ kiun vi diros, el via buŝo¹⁸ eliros¹⁹ aŭ floro aŭ multekosta ŝtono.²⁰“

【註】 (1) ある日のこと、(2) 泉の側に、(3) 賤しい女、(4) たのんだ、(5) 水を飲ませてくれと、(6) え、どうぞ、(7) 洗った、(8) さへながら、(9) 容易に、(10) 慰した、(11) 湯を、(12) 贈物をする、(13) …の姿をした、(14) 皿舎女、(15) 素直さ、(16) 續けた、(17) 一言毎に、(18) お前の口から、(19) 出てくるだらう、(20) 寶石。

Kiam tiu ĉi bela knabino venis domen, ŝia patrino insultis¹ ŝin, kial ŝi revenis² tiel malfrue³ de la fonto. „Pardonu al mi⁴ patrino,“ diris la malferiĉa knabino, “ke mi restis tiel longe.“ Kaj kiam ŝi parolis tiujn ĉi vortojn, elsaltis⁵ el ŝia buŝo tri rozoj,⁶ tri perloj⁷ kaj tri grandaj diamantoj⁸. „Kion mi vidas⁹!“ diris ŝia patrino kun grandega mi-

ro,¹⁰ „Ŝajnas al mi,¹¹ ke el ŝia buŝo elsaltas perloj kaj diamantoj! De kio¹² tio ĉi venas, mia filino? (Tio ĉi estis la unua fojo, ke ŝi nomis¹³ ŝin sia filino). La malfefiĉa infano rakontis⁴ al ŝi naive¹⁵ ĉion, kio okazis¹⁶ al ŝi, kaj, dum ŝi parolis, elfalis¹⁶ el ŝia buŝo multego¹⁷ da diamantoj. „Se estas tiel,¹⁸“ diris la patrino, „mi devas tien sendi¹⁹ mian filinon. Marinjo, rigardu,²⁰ kio eliras el la buŝo de via fratino, kiam ŝi parolas; ĉu ne estus al vi agrable²¹ havi tian saman kapablon²²? Vi devas nur iri al la fonto ĉerpi akvon; kaj kiam malriĉa virino petos de vi trinki, vi donos ĝin al ŝi ĝentile.²³“

【註】 (1) 叱つた、(2) 歸つた、(3) そんなに遅く、(4) 御免下さい、(5) とび出した、(6) ばらの花 (7) 白珠、(8) 金剛石、(9) それは何だ、(10) 大きに驚いて、(11) …のやうに見える、(12) 何から、(13) 名を呼んだ、(14) 物

語つた、(15)素直に、(16)落ち出た、(17)澤山、(18)さうならば、(19)そこへ送る、(20)御覽なさい、(21)愉快(22)可能力、(23)おとなしく。

„Estus tre bele.“ respondis¹ la filino malĝentile,² „ke mi iru al la fonto!“ „Mi volas, ke vi tien iru,“ diris la patrino, „kaj iru tuj!“ La filino iris, sed ĉiam murmure. ⁵Ŝi prenis⁶ la plej belan arĝentan vazon,⁷ kiu estis en la loĝejo.⁸ Apenaŭ⁹ ŝi venis al la fonto, ŝi vidis unu sinjorinon,¹⁰ tre riĉe vestitan,¹¹ kiu eliris el la arbaro¹² kaj petis de ŝi trinki¹³ (tio ĉi estis tiu sama feino, kiu prenis sur sin la formon kaj la vestojn de princino,¹⁴ por vidi, kiel granda estos la malboneco de tiu ĉi knabino). „Ĉu mi venis tien ĉi,“ diris al ŝi la malĝentila kaj fera knabino, „por doni al vi trinki? Certe,¹⁵ mi alportis arĝentan vazon speciale por tio, por

doni trinki al tiu ĉi sinjorino! Mia opinio¹⁶ estas: prenu¹⁷ mem akvon, se vi volas trinki.“ „Vi tute ne estas ĝentila,“ diris la feino sen kolero.¹⁸ „Bone, ĉar vi estas tiel servema,¹⁹ mi faras al vi donacon, ke ĉe ĉiu vorto, kiun vi parolos, eliros el via buŝo aŭ serpento²⁰ aŭ rano.²¹“

【註】 (1)答へた、(2)荒々しく、(3)泉、(4)すぐ行け、(5)始終ぶつぶつ云ひ乍ら、(6)探つた、(7)銀の甕、(8)住居、(9)…するや否や、(10)婦人、(11)立派な着物を着た、(12)森、(13)飲ませてくれとたのんだ、(14)王妃、(15)たしかに、(16)私の考へは、(17)自分でとれ、(18)怒らずに、(19)よく勧め、(20)蛇、(21)蛙、

Apenaŭ ŝia patrino ŝin rimarkis,¹ ŝi kriis² al ŝi: „Nu,³ mia filino?“ „Jes, patrino,“ respondis al ŝi la malĝentilulino, eljetante⁴ unu serpenton kaj unu ranon. „Ho, ĉielo!“ ekkriis la patrino, „kion mi vidas? Ŝia

fratino en ĉio estas kulpa;⁶ mi pagos⁷ al ŝi por tio ĉi!⁴ Kaj ŝi tuj kuris bati⁸ ŝin. La malfeliĉa infano forkuris⁹ kaj kaŝis¹⁰ sin en la plej proksima arbaro. La filo de la reĝo,¹¹ kiu revenis de ĉaso,¹² ŝin renkontis,¹³ kaj, vidante, ke ŝi estas tiel bela, li demandis¹⁴ ŝin, kion ŝi faras tie ĉi tute sola¹⁵ kaj pro kio ŝi ploras.¹⁶ „Ho ve, sinjoromia patrino forpelis¹⁷ min el la domo!¹⁸“

【註】 (1)注目した、(2)叫んだ、(3)サア、(4)投出しながら、(5)オヤオヤ！ (6)罪ある、(7)むくめてやらう、(8)なぐる、(9)にけて行つた、(10)かくれてゐた、(11)王様、(12)狩り、(13)出遇つた、(14)訊ねた、(15)獨りで、(16)泣く、(17)追ひやつた、(18)家から。

La reĝido,¹ kiu vidis, ke el ŝia buŝo eliris kelke² da perloj kaj kelke da diamantoj, petis ŝin, ke ŝi diru al li, de kie tio ĉi venas. Ŝi rakontis al li sian tutan aven-

turon.³ La reĝido konsideris,⁴ ke tia kapablo havas pli grandan indon,⁵ ol ĉio, kion oni povus doni dote⁶ al alia fraŭlino, forkondukis⁷ ŝin al la palaco⁸ de sia patro, la reĝo kie li edziĝis⁹ je ŝi.¹⁰ Sed pri ŝia fratino ni povas diri, ke ŝi fariĝis tiel malaminda,¹¹ ke ŝia propra patrino sin forpelis de si; kaj la malfeliĉa knabino, multe kurinte kaj trovinte nenium,¹² kiu volus ŝin akcepti, baldaŭ mortis en angulo¹³ de arbaro.

【註】 (1)王子、(2)若干の白珠を、(3)事變、(4)考へた、(5)價值、(6)持參金附で、(7)つれて行つた、(8)宮殿、(9)結婚した、(10)彼女と、(11)悪くむべし、(12)だれも見つけないで、(13)角(すみ)で。

第二節

日用會話 Interparolado

Bonan matenon, sinjoro!	お早やう！(紳士に)
Ionan tagon, sinjorino!	今日は！(夫人に)
Bonan vesperon, fraŭlino!	今晚は！(令嬢に)
Bonan nokton, gesinjoroj.	お寝みなさい、皆さん。
Adiaŭ!	左様なら。
Ĝis la revido!	左様なら。(いづれ又)
Ĝis morgaŭa revido.	明日また！
Revenu baldaŭ.	お早くお歸りなさい。
Mi dankas vin.	有り難う。
Dankon!	有り難う。
Multe da dankoj.	大きに有りがたう。
Mil dankojn!	"
Ko an dankon!	"
Mi dankas vin tutkore.	心からお禮申上げます。
Se plaĉas.	どうぞ。
Havu la bonecon.	"
Permesu(min)……i.	"
(Mi deziras al vi) feliĉan novan jaron.	新年おめでたう。
Feliĉan Novjaron!	謹賀新年。
Gajan kristn skon!	クリスマスおめでたう。

Ĉu vi parolas Esperante?	あなたはエスペラントを話 しますか。
Jes, mi parolas Esperante.	ハイ、エスペラントを話し ます。
Nur iomete.	ほんのわづかばかり。
Ĉu estas ĉi tie iu, kiu pa- rolas Esperante?	此地に誰れかエスペラント を話す人がゐますか。
Kion tio signifas?	それは何のことですか。
Ĉu vi komprenas min?	私の云ふことが解りますか。
Parolu pli laŭte.	もつと大きな聲で云つて下 さい。
Kion vi demandas?	何ですかお訊きになるのは。
Kiel vi fartas?	御機嫌如何です。
Kiel vi sanas nun?	"
Ĉu via ĉarma familio estas en bona sano?	御家族様は御壯健でゐらつ しやいますか。
Oni diris al mi, ke vi estas malsana.	あなたが御病氣だと云ふこ とを承はりました。
Ho ne, dankon al Dio; mi neniam malsanis.	いやどうして、お蔭様で、 一度も病氣にはなりません のです。
Tre bone, dankon!	至極壯健です、ありがたう。
Mi ĝojas, ke mi vin vidas en bona sano.	御壯健なのを見て大層嬉れ しく存じます。
Nek bone nek malbone.	良くもなく悪くもなくです

Mi estas malsana.

私は病氣です。

Ki estas la vetero?

天氣は如何ですか。

Ki nun veteron ni havas?

”

Hodiaŭ estas tre varma.

今日は非常に暖かです。

Ni havas belan veteron.

よいお天氣です。

Pluvas.

雨が降つてゐます。

Fluvis la tutan tagon.

終日降つてゐました。

Negas.

雪がふつてゐます。

Klariĝas.

天氣がよくなつてゆきます

Istos bele.

よくなつて行くでせう。

Istas varmege.

暑くなるでせう。

Kiu frapas?

叩戸(ノック)してゐらつし

やるのはどなたですか。

Ĉu sinjoro A estas hejme?

Aさんは御在宅ですか。

Ne, mi bedaŭras, ke li foriras.

生憎留守です。

Kiu estas tie?

そこにゐらつしやるのはど

なたですか。

Kun kiu mi havas la honoron paroli?

あなたはどなたですか。

Ĉu vi estas sinjoro B?

Bさんですか。

Mia nomo estas C.

私の名はCです。

Estas mi.

私ですよ。

Ĉu vi min konas?

私を御存じですか。

Ĝajnas al mi, ke mi vidas sinjoro c.

あなたは C さんではありませんまいか。

Ho! ĝi estas vi?

おやあなたですか。

Bonvenon al vi.

よくいらつしやいました。

Permesu al mi eniri.

御免下さい。(入る時云ふ)。

Pardonu, se mi vin ĝenas.

御邪魔いたします。

Ĉi tiu, mi ĵetas.

どうぞ御掛け下さい。

Bonvolu sidiĝi.

”

Vi estas tre ĝentila.

御親切様。

Kio estas al via servo?

何の御用ですか。

Ki nun vi bezonas?

何が御入用ですか。

Mi bezonas la unuan libron de Esperanto.

エスペラント第一巻が欲しいのです。

Kiun vi preferas?

どれがよろしいでせうか。

Ĉu vi konsentas al tio?

それで御満足ですか。

Jes, tute volonte.

はい、ぜひ。

Kion kostas tiu ĉi libro?

この本はいくらですか。

Ĝi kostas 50 senojn.

五十錢です。

Ĉu vi aĉetas ĝin?

それをお買ひになりますか。

Jes, sendu ĝin al tiu ĉi adreso.

はい、此の宛名の所へお送り下さい。

Mi havas ion por diri al vi.

申し上げたいことがあります。

Ĉu vi havas liberan tempon?

御暇がありますか。

Mi estas tre okupita.

非常に多忙です。

Mi nun havas urĝan aferon!
 Mi havas peton al vi.
 Pruntedoni al mi Esperanta-
 n vortaron.
 Mi do ne ĝenos plilon ge.
 Ĉu vi jam foriros?

 Kian aĝon vi havas?
 Mi havas deksep jarojn.
 Kiun daton ni havas hodiaŭ?
 Hodiaŭ estas la dekkvara
 de Decembro.

 Kioma horo nun estas?
 Ĝus sonis la kvina(horo).
 Je kioma horo vi foriras?
 Je la naŭa matene.
 Precize la tria.
 Dek minutoj post la sesa.
 Kvarono antaŭ la oka.

 Kion vi pensas pri tio?

 Vi estas prava.
 Ne zorgu pri tio.

今急用があるのです。
 お願いがあります。
 エスペラント辭書を御貸し
 下さい。
 ではこれで失禮いたします
 もう御出かけですか。

 あなたは御幾つですか。
 十七歳です。
 今日は何日ですか。

 今日は十二月の十四日です。

 今、何時ですか。
 丁度今五時が打ちました。
 何時に御立ちになりますか。
 朝の九時に。
 かつきり三時です。
 六時十分過ぎ。
 八時十五分前。

 それを何とお考へになりま
 すか。
 御もつともです。
 それには御心配下さるな。

Mi vin certigas, ke jes.
 Mi ne kredas ĝin.
 Mi estas certa je tio.
 Estas pura eraro.
 Ne, tute ne eble.

 Jes, kompreneble.
 Kontraŭe.
 Atentu.
 Aŭskultu.

たしかにさうです。
 私はそれを信じません。
 それはたしかです。
 明かな誤りです。
 いえ、全くそんなことはあ
 りません。
 はい勿論です
 反対です。
 御注意なさい。
 御聴きなさい。

—Panjo, donu al mi pecon da sukero, mi petas.

—Vi ja ricevis jam nun!

—Jes, sed mi lasis ĝin fali.

—Kien do?

—En la kafon.

Taroo: Diru, patro, ĉu ne la dimanĉo estas la unua
 tago de la semajno?

Patro: Jes.

Taroo: Kaj sabato estas la lasta?

Patro: Certa.

Taroo: Nu, kiel do povas okazi, ke post sabato s kvas
 dimanĉo, do la unua post la lasta?

第三節

書簡文 Korespondado

Tokio, la 1^{an} de Dec., 1922.^a

Estimata Sinjoro,

Mi volus vin viziti lundon, je la kvara horo post tagmezo, se tiu horo estos konvena al vi. Se mi ne ricevos respondon, mi estos ĉe vi je la horo nomita.

Kun saluto,

K.....

拜啓。

月曜日の午後四時頃御伺ひ致したいと存じますが、御都合如何でございませうか。若し御返事のごさいません時は上記の時間に罷り出でますから何卒宜しく。敬白

1. 手紙の日附を書くには目的格とすることを忘れてはならない。1^{an} の如く。

2. 手紙の書きはじめの文句は大抵一定してゐるから次に最も普通に用ゐられるものを列挙しやう。

(1) 友人や親族など親しみある人に對するもの。

Kara Amiko. Mia Amiko. Kara S-ro.....
Kara S-ino..... Sinjoro. Sinjorino. Kara Samideano.¹ Kara Kunbatalanto.²

Kara Patro. Kara Patrino. Kara Frato.
Kara Fratino. Karaj Gefratoj. Kara Onklo.
Kara prapatro. Mia Kara. Kara Knabo.
Karaj Infanoj. Mia Kara Joŝio.

(2) 知人や目上の人に對するもの。

Estimata S-ro..... Sinjoro. Tre Estimata Sinjoro. Kara Samideano. Kara Sinjoro.
Honorinda S-ro. Via Ekscelenco. Via Moŝto.

(3) 會社、商店、學會、クラブ、等團體に對するもの。

Estimataj Sinjoroj. Sinjoroj. Estimata Firmo. Estimata Instituto.

(4) 特別なもの。

Via Barona Moŝto.³ Via Grafina Moŝto.⁴
Estimata Doktoro. Estimata Profesoro. Est-

imata Redaktoro. Via Episkopa Mcŝto.⁵

【註】(1)エスペランティスト仲間に使ふ。(2)同上。
(3)男爵閣下。(4)伯爵夫人閣下。(5)僧正閣下。

3. 手紙の結尾の文句で主なるものを挙げれば、

(1) 友人、親族には

Tute Via. Via. Sincere Via. Fidele Via.
Via Amiko. Via fidela amiko. Kore Via.
Via amata. Kun kora manpreno. Mil kiso-
jn de Via. Kun frata respekto.

(2) 知人、目上の人、會社、商店、學會、クラブ其の
他には、

Mi restas, Estimata S-ro, Via plej hum-
ila servanto. Sincere Via. Tute Via. Tutko-
re Via. Koran saluton de Via. Kun resp-
ekto kaj sauto. Mi restas, Sinjoro, plej
tincere. Via. Mi vin salutas kaj restas via
humila. Akceptu, Estimata Sinjoro, la plej
koran saluton de Via humila. Mi restas

de Via Grafa Moŝto, tre humila kaj obee-
ma servanto.

Kara Sinjoro,

Mi sciigis¹ de S-ro L. M. ke vi intere-
sigas² je la lingzo Esperanto. Mi espe-
ras, ke vi helpas en la disvastigado de la
kara lingvo en tiu ĉi lando, kie novaj afe-
roj³ ne estas akceptataj rapide.⁴

Eble⁵ vi legis la bonan raporton⁶ pri
Esperanto en la artikolo⁷ farita de S-ro
W. T. S. en „La Revuo de Revuoj” por
tiu ĉi monato.⁸

Kun frata respekto

A.....

【註】(1)L. M—氏より承りますれば……。 (2)興
味を持つておいでの由。(3)新らしい事。(4)速かに受入
られない。(5)多分。(6)報告。(7)論説。(8)今日の。

Kara Amiko,

Ĉiujn bondezirojn por gaja Kristnasko kaj por feliĉo kaj progreso en ĉiuj bonaĵoj dum la nova jaro!

Kun kora saluto.

【譯】 楽しきクリスマスお目でたう存じます。併せて新年の御慶も目出度申し納めます。

Sinjoro D—,

Ni havas la honoron sciigi vin,¹ ke ni ekspedas² al vi hodiaŭ,³ malrapidire,⁴ kest-on⁵ enhavantan⁶ 60 botelojn⁷ da vinoj⁸ diversaj,⁹ konforme je la mendo, kiun vi donis al nia vojaĝisto,¹⁰ S-ro L. Vi trovos tie ĉi enfermitan¹¹ la detalan¹² fakturon.¹³ Volu akcepti ĝin kiel ĝustan¹⁴ kaj enskribi¹⁵ la sumon en nian krediton.¹⁶

Ĉiam sindonemaj por viaj mendoj,¹⁷ ni petas vin, k. t. p.

【註】 (1)御知らせ申します。(2)發送する。(3)今日。(4)おくれて。(5)箱。(6)包入せる。(7)ビン。(8)葡萄酒。(9)各種の。(10)出張。(11)封入してあるのを。(12)精細な。(13)仕切状。(14)正しき。(15)記入する。(16)貸方。(17)註文。

Sinjoro E—,

Ni sendas al vi tie ĉi aldonite¹ la staton² de via kalkulo³ fermita⁴ ĉe la fino de Decembro⁵. Ni petas, ke vi ekzameni⁶ ĝin kaj diru al ni, ĉu ni konsentas⁷. Via,

【註】 (1)附加して。(2)状態。(3)計算。勘定。(4)締切つた。……現在の。(5)十二月。(6)檢べる。(7)承認する。

Sinjoro F—,

Mi rapidas¹ respondi je via letero kaj doni al vi la petitan informon² pri la firmo N. Ĝi ĝuas³ tie ĉi la plej bonan reputacion.⁴ Mi pensas,⁵ ke vi povas liveri⁶ al ĝi

en plena trankvilo.⁷ Sen garantio⁸ nek respondeco,⁹ kiel kutime.¹⁰

Tre sincere via.....,

【註】 (1)急いで.....する。(2)報告。(3)享ける。(4)評判。(5)考へる。(6)供給す。(7)安心。(8)擔保。(9)責任。(11)いつもの如く。

Estimata Samideano,

Ni havas honoron informi vin, ke ni estas transloĝiĝantaj¹ en pli vastajn² kaj oportuna-
jn³ oficejojn,⁴ kaj ke, je la supra dato⁵ kaj poste, nia adreso estos: 5. Strato.....

Esperante, ke vi daŭrigos⁶ al ni vian afablan subtenon⁷. Tute via,

【註】 (1)移轉、(2)廣い、(3)便利な、(4)事務所、(5)上記の日から以後、(6)相變はらず、(7)御援助、

【注意】 1. 國際補助貨幣法

一九〇七年英國ケンブリッジに於いて開かれた第三回

萬國エスペラント大會にて決定せられた國際補助貨幣法は今や普くエスペラント採用者間に實用されてをる。

即ち次の如くである。

Speso (略字 s.) これは理想上の單位であつて我約一厘に當る。

Spesdeko (略字 sd.) = 10 spesoj. 補助單位で我約一錢に當る。

Spesmilo (略字 sm.) = 1000 spesoj 實用單位で我約一圓に當る。

我一圓は 1.023 sm. に當り 1sm. は 0.978圓に當る。

10 spesmiloj は金位 $\frac{11}{12}$ であつて、8 グラムの重量の金貨の値である。

【注意】 2. 月名及び曜名

Januaro 一月、Februaro 二月、Marto 三月、Aprilo 四月、Majo 五月、Junio 六月、Julio 七月、Aŭgusto 八月、Septembro 九月、Oktobro 十月、Novembro 十一月、Decembro 十二月、

Dimanĉo 日曜、Lundo 月曜、Mardo 火曜、Merkredo 水曜、Ĵaŭdo 木曜、Vendredo 金曜、Sabato 土曜。

第 四 節

詩 P. zio

LA ESPERO

L. L. Zamenhof.

En la mondon venis nova sento,
 Tra la mondo iras forta voko;
 Perflugiloj de facila vento
 Nun de loko flugu ĝi al loko.

Ne al glavo sangon soifanta
 Ĝi la homan tiras familion:
 Al la mond' eterne militanta
 Ĝi promesas sanktan harmonion.

Sub la sankta signo de l' espero
 Kolektiĝas pacaj bata'antoj,
 Kaj rapide kreskas la afero
 Per laboro de la esperantoj.

Forte staras muroj de miljaroj
 Inter la popoloj dividitaj,
 Sed dissaltos la obstinaj baroj,
 Per la sankta amo disbatitaj.

Sur neŭtrala lingva fundamento,
 Komprenante unu la alian,
 La popoloj faros en konsento
 Unu grandan rondon familion.

Nia diligenta kolegaro.
 En laboro paca ne laciĝos,
 Ĝis la bela sonĝo de l' homaro
 Por eterna ben' efektivigkos.

【譯】希望(エスペラント讃歌)

世界の中へ新しい感じが入つて来た。
 世界を通じて強い叫聲がひびく、

順風の鵬翼を以つて、
此處彼處へと飛び廻はれ。

血に渴いた氷の剣に、
人の同族を導くものではない、
それは永久に戦へる世界に、
神聖なる調和を約束する。

希望といふ神聖な象徴の下に、
平和の戦士は集まり来る、
そして速かにその事業は育つ、
し希望せる人々の働きによつて。

千年の障壁が根強く立つて居る、
別たれたる人々の間に、
しかしその頑固な壁は飛散るであらう、
神聖なる愛もて打碎かれて。

中立語の基礎の上に
御互ひに了解し合つて、

人々は意を合はせて作るであらう、
一大家族的な團樂をば。

吾々の勤勉な友達は
平和の働きに疲れることはない
人類の抱く美しい夢が
永遠の祝福の爲に實現されるまで。

HO MIA KOR'

L. L. Zamenhof

Ho, mia kor', ne batu maltrankvile,¹

El mia brusto² nun ne saltu³ for!

Jam teni⁴ min ne povas mi facile,⁵

Ho, mia kor'!

Ho, mia kor'! Post longa laborado⁶

Ĉu mi ne venkos⁷ en decida⁸ hor'!

Sufiĉe! trankviliĝu de l' batado,⁹

Ho, mia kor'!

【註】(1)さはがしく打つな。(2)胸。(3)とび去るな。
 (4)保つ。(5)た易く。氣安く。(6)長い努力の後。(7)勝つ。
 (8)決定の時に。9)鼓動。打撃。

MIA PENSO¹

(L. L. Zamenhof.)

Sur la kampo² for de l' mondo,³Antaŭ⁴ nokto⁵ de somero,⁶Amikino⁷ en la rondo⁸Kantas kanton⁹ pri l' espero.Kaj pri vivo detruita¹⁰Ŝi rakontas kompatante,¹¹Mia vundo¹² refrapita¹³Min doloras¹⁴ resangante.¹⁵„Ĉu vi dormas¹⁶? Ho, sinjoro,Kial¹⁷tia senmoveco¹⁸?Ha, kredeble¹⁹ rememoro²⁰El la kara infaneco²¹?”Kion diri²²? Ne ploranta²³Povis esti parolado²⁴Kun fraŭlino²⁵ ripozanta²⁶Post somera promenado.²⁷Mia penso kaj turmento,²⁸

Kaj doloroj kaj esperoj!

Kiom de mi en silento²⁹Al vi iris jam oferoj³⁰

Kion havis mi plej karan—

La junecon—mi ploranta

Metis mem sur la altaron³¹De la devo ordonanta!³²Fajron³³ sentas mi interne,³⁴Vivi³⁵ ankaŭ mi deziras,³⁶—Io peias³⁷ nin eterne,³⁸Se mi al gajuloj³⁹ iras.....

Se ne plaças al la sorto⁴⁰

Mia peno⁴¹ kaj laboro—

Venu tuj al mi la morto,⁴²

En espero—sen doloro!

【註】(1)思ひ。(2)田圃。(3)世界。(4)前に。(5)夜。
(6)夏。(7)女友達。(8)周圍。社會。(9)歌。(10)減ほされた。
(11)同情して。(12)傷。(13)再び訪れた。(14)痛める。
(15)再び血にまみれて。(16)眠る。(17)何故。
(18)靜止。(19)きつと。(20)記憶。思出。(21)幼時。
(22)云ふ。(23)泣く。(24)演説。話し。(25)娘。(26)休息しつゝある。
(27)散歩。(28)苦しみ。(29)沈黙。(30)犠牲。(31)祭壇。
(32)命じられた。(33)火。(34)内部に。(35)生きること。
(36)のぞむ。(37)逐ふ。(38)永遠に。(39)快活な人。
(40)運命。(41)努力。(42)死。

— (終り) —

川原次吉郎著書
短期エスペラント語速成教科書 エスペラント同人社發行
講習用 校正嚴密印刷鮮明 定價金三十錢 郵税二錢
レツシングの寓話 日本エスペラント社發行
定價二十五錢 郵税二錢
エスペラントの本質とエスペラント文學 豐川善曄と共譯
定價金壹圓 郵税四錢 發行所 同上

大正十一年十二月二十日印刷

大正十一年十二月廿五日發行



(定價) 上製 一圓八十錢
宣傳版 一圓二十錢
送料 十二錢

著作者 川原次吉郎

發行者 エスペラント同人社

代表者 豐川善曄

東京市本郷區本郷五丁目三十五番地

印刷者 山本長壽

東京市牛込區通寺町六十九番地

印刷所 文長社

東京市牛込區通寺町六十九番地

發行所 エスペラント同人社

東京市本郷區本郷五丁目三十五番地

振替口座東京一四六〇

財團 エス ペラント 同人 社

設立に就いて同志諸君に謹告

世界大戦後新に勃興し來れる國際協調の精神は政治に、經濟に、科學に、文藝に益々高調せられて、今や吾々の愛用する國際語エスペラントの普及に伴ひ、渾然たる人類文化に迄躍進せんとして居る。然るに此の精神を涵養し、育成すべき我かエスペラント普及機關は未だ草創の時代に屬し、之が爲め折角是に志し來る新しき同志を躊躇せしめ、或は學識實力ありて斯業の爲めに盡さんとせらるゝ志士仁人の貴き熱情を冷却せしむるが如き固より創業時代の常とは言ひ乍ら、又吾人同志の力至らざるの致す所たるや云ふ迄もない。

思ふに是等の缺陷を充たし、神聖なる我が文化運動を促進せんとせば須らく全エスペラントイストの人的財的の結合を圖り相共に協力して斯業の發展を圖るより外に道はない。吾人久しく其の感を深くしたのであるが今回同志相圖りて一の財團を設け、微力をつくして在來の諸機關を援助すると共に自らも應分の任務に服して、來るべき大運動の先驅を勤むることとした。抱持する綱領は唯「エスペラント第一」期待する目的は唯「同志の大團結！」

同志諸君望むらくは斯業の現状を察せられて、徒に傍觀せず直接間接吾人の事業に高援を賜はり、相共に歩調を一にして片時も早く最後の勝利に到達せしめられんことを。

大正十一年十二月

設立者 (順次)

- 小川 原次郎
- 谷 鐵之吉
- 豊 孝善
- 上野 孝善

323
474

終